女鑑

第拾三年第卅三號

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

第五回博覽會受賞品陳列會

陳列場增築工落成候間十二月一日ヨリ明年一月二十日迄第五回勸業博覽會ニ於テ全國織物出品中名譽賞牌及第一二等賞ヲ受領セシ品ヲ普ク蒐集陳列致シ出品當時ノ賣價ヨリ格外ノ廉價ヲ以テ賞需ニ應ズベク候得者開場當日ヨリ御誘合ヒ御高覽被下度奉願上候
尙々歲暮御進物用及御仕着衣類ノ格安品よせきれ見切反等ハ澤山取揃有之候

東京神田今川橋

松

まつや

電話本局 六百八十八番 七百四十七番

國光社發行

明治三十七年

女生日記

定價　上製二十錢　並製三十錢　郵税各四錢

各新聞好評

◎東京日々新聞評　體裁の優美なる意匠の巧良なる一見女學生の好日記なるを認むるものは此日記なり卷中日々の欄外に天氣と寒暖とを記入するの場所を設け古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯等にして女子の心得となるべき材料を挿入し且つ女學校案内、女子職業案內等を附記し其實益と興味とを兼ね供へたるは在來の日記と大に其選を異にする所貴婦人、令孃、女學生等新年第一に机上に飾らるべきは恐くは此日記ならんか

◎都新聞評　築地國光社より發兌したる女生日記は日々の欄に古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯など女子の心得となるべきものを挿入し且女學校案内、女子職業案内等を附記しあり女生に適したる好日記帳なり

◎二六新報評　這回築地國光社に於て發兌したる女生日記は意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり（以下略す）

◎日出國新聞評　（前略）實益と興味とを兼備せる事普通日記の比にあらず貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは此優美に愛らしき日記なるべし

◎東京朝日新聞評　學校及び職業の案内其他女子須要の事項を其卷首に掲げ教訓行事等有益なる項目を記せり體裁優美女生及家庭の實用に適す

◎報知新聞評　意匠嶄新體裁優美にして一見如何にも女生に適したる好日記なり卷中日々の紙欄には古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯など女子の心得となるべき種々の材料を精選して挿入し且女學校案内、女子職業案内等をも附記しありて實益と興味とを兼備せること普通日記の比にあらざれば貴婦人、令孃、女學生諸子の机上新年第一に飾らるべきは必ず此の優美なる可愛き日記なるべし

◎平民新聞評　日記も色々出來たが女學生日記は此冬の新案で是れは一アテ當てるであらう別に變つた事もないが可愛らしく善く出來て居る

本誌中付廣告欄に割引券あり

御注文の節は女鑑廣告に據りし旨御附記被下度候

新意匠

羽衣コートの御披露

一羽衣コート甲種金三圓六十錢
一羽衣コート乙種金壹圓九十錢
以上各種

御望の方は御報次第説明書并に寫眞書を呈す



一呉服物一式并に御禮式御衣裳
其他新規仕立日本衣服品々

一男女御袴
寸尺區別種々調製有之候

東京市麻布區飯倉町四丁目

發賣元 萬長呉服店

電話新橋千百六十七番

改良紀念大賣出し

十二月一日より五日間仕候

美佐保形表附

價一圓五十錢

賣出し中は
麁景呈上仕候

東京市淺草區茅町
二丁目一番地

香取屋本店

電話下谷千百九十二番

市内は御一報次第直に御伺申上候

女鑑 第拾參年 第廿三號 目次

定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年十一月三十日印刷
明治三十六年十二月一日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊業一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十番地 河本龜之助
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



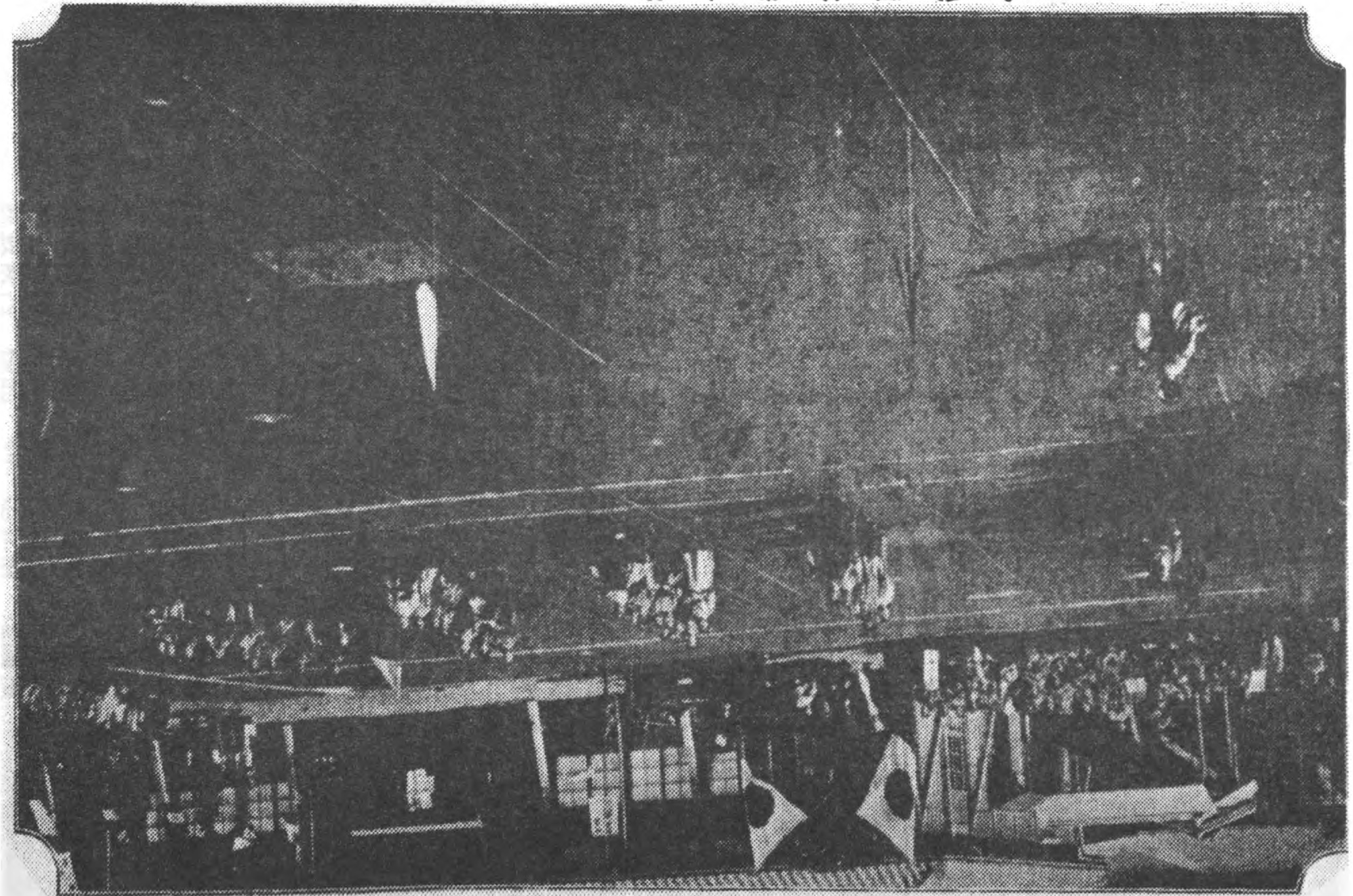
日本赤十字社病院病室



同消毒室

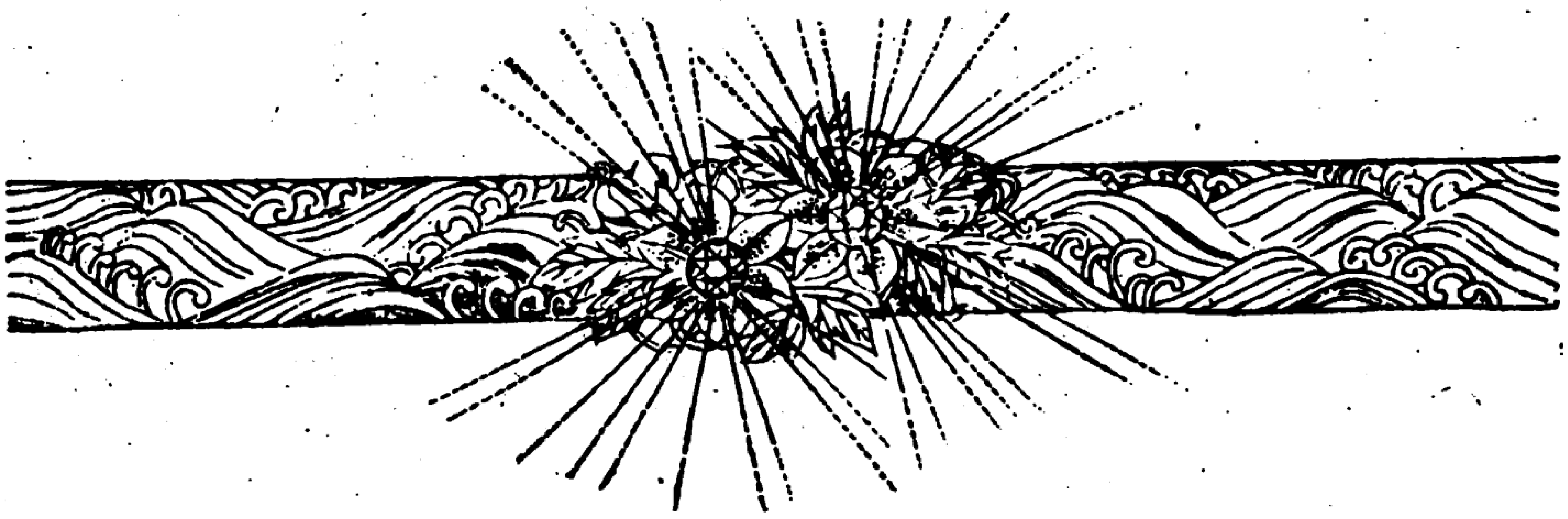


東京第三高等女學校運動會



御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候





貴金製金具附帯留

花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帯美はしくとも帯留佳ならねば裝ひとゝのはず茲に本店新製の帯留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黄金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を箝入し紐は鹽瀬地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極はめたる品なれば霞の帯の引もきらざる御注文あらんことを

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎

金製彫刻金具付價
十二圓十五圓廿圓卅圓以上六十圓迄

寶石入金具付之價
二十圓二十五圓五十圓以上一百圓迄

銀赤銅朧銀並彫刻金具付之價
三圓五圓六圓八圓以上十圓位迄各種

本店に於ては市内の分支店共通仕候小間物切手發賣致候間御用命奉願候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下被度候

○新奇發明 増酒資料

壹斗の清酒は即座に倍增し(即ち貳斗)となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり

(附錄)腐敗酒直し法、醬油參倍增法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍增法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す(注意)本館の隆盛を羨み近時當館廣告に贋せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ…(當館は去廿壹年の創立也)

發明**元祖** 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授產館**

○肉體 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくとし 通經劑

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月間滯りたる月經にても忽ちキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢(注意)本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



○わきが(腋臭症) 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事(電話下谷五四六番)

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

文部省
（檢査出願中）

言文一致唱歌

男爵前島密君題字
理學博士坪井正五郎君序文
帝國教育會內言文一致會編纂

再版發行
定價金拾八錢
郵稅金四錢

新刊

音樂遊戲教材

東京高等師範學校教諭鈴木米次郎先生編

第壹編 縄跳運動 金十錢 郵稅二錢
第貳編 圓舞曲 金十錢 郵稅二錢

文部省
（檢定出願中）

育兒唱歌

音樂學校講師橋野十一良先生作歌
音樂學校講師渡邊森藏先生作曲

春の卷 金八錢 郵稅二錢
夏の卷 金八錢 郵稅二錢

發兌元
東京市神田區
錦町二丁目六
同文館樂器械具店

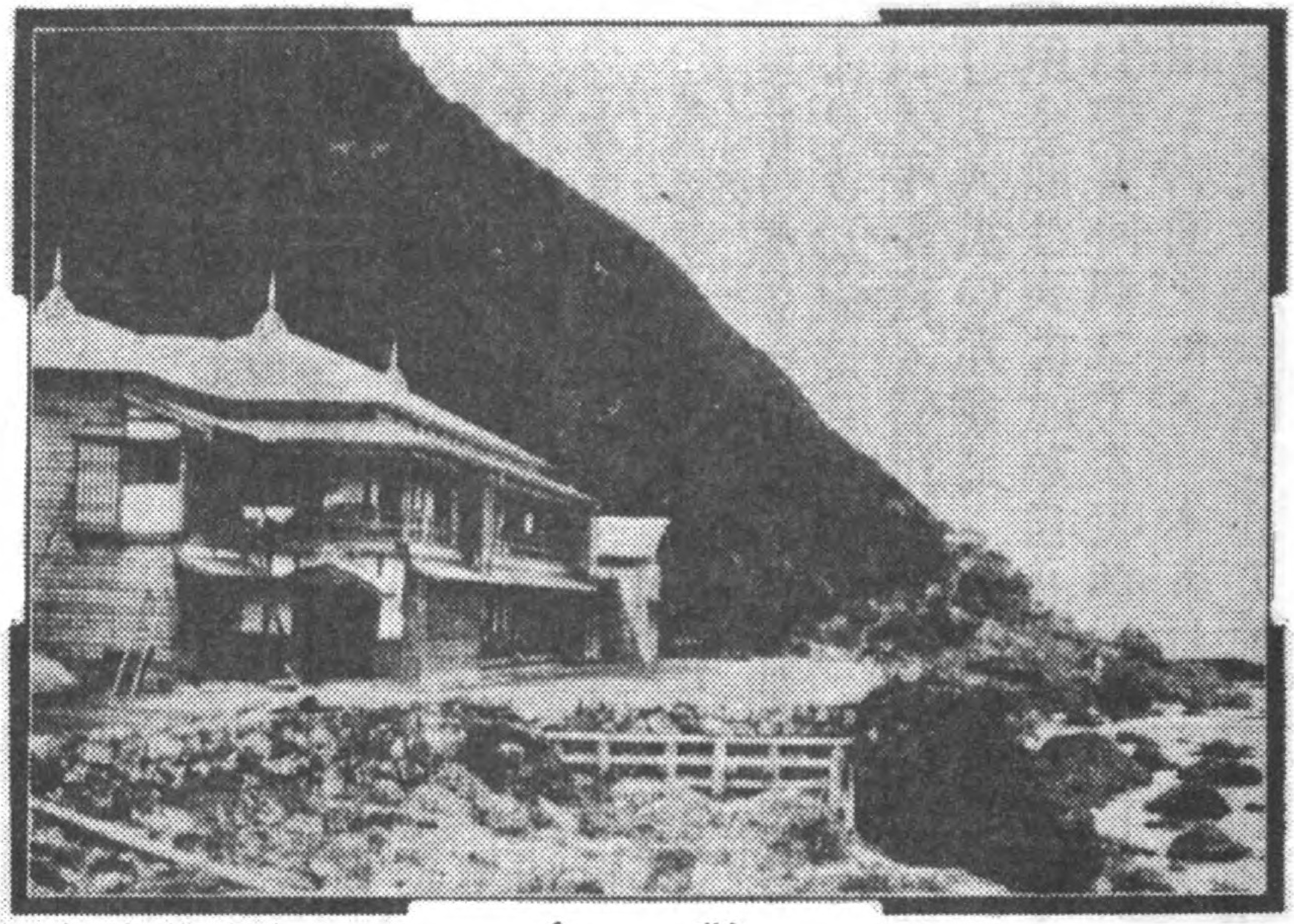
女鑑兼題投稿優等者



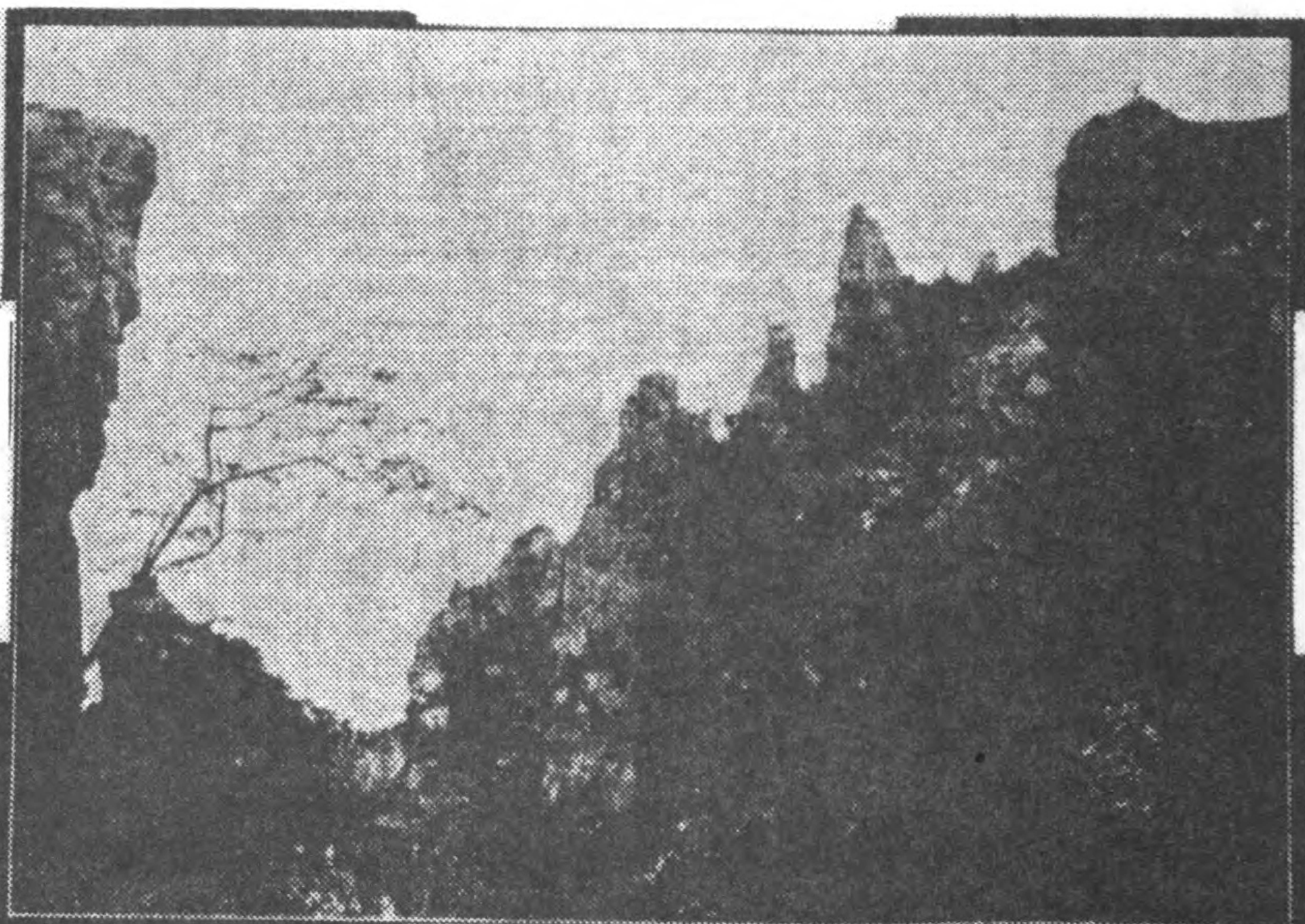
横田秋子刀自

松澤まつ子孃

北海道小樽赤岩温泉場の景



（其一）



（其二）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下度候

新製 寶石入指環



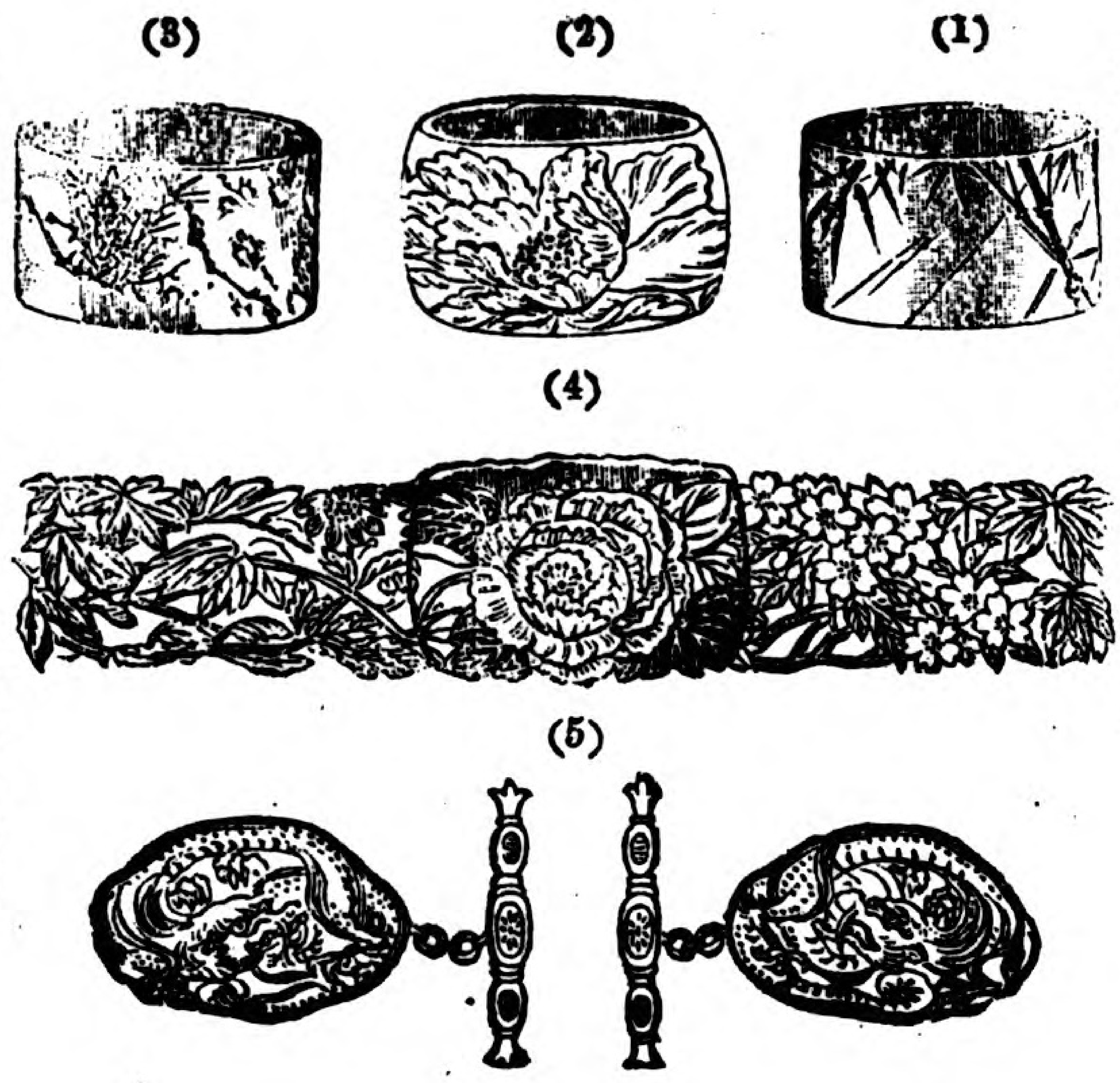
(1) 拾金製……價九圓六拾錢
(2) 拾八金製……價廿貳圓卅五錢
(3) 拾八金製……價廿三圓五拾錢
(4) 拾八金製……價廿六圓廿錢

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
(市外郵送料拾五錢)

時計寶玉類貴金屬商
美術品及銃砲火藥
天賞堂
電話番號新橋(特三三三)(三一五三)

◉ 無料呈贈 天賞堂營業一覽 (送料四錢)

新製指環及



(1) 價廿一圓八拾錢……廿二金三匁付片切刻
(2) 價廿七圓八拾錢……同……高刻
(3) 價二拾圓八拾錢……同……片切刻
(4) 價五拾六圓五拾錢……同四匁付……高刻
(5) 價卅二圓九拾錢……十八金三匁付高刻

東京市京橋區尾張町貳丁目拾六、七、八、九、番地

時計寶玉類貴金屬
美術品及銃砲火藥商
天賞堂
電話新橋(特三三三)(三一五三)

天賞堂出張所々在地

東京市(中田小川町)●橫濱市
●名古屋市●大坂市 廣嶋市
●熊本市●長崎市●小樽(臨時)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京本町 博文館發行

飯田呉服店裁縫部 主任 小岩井規太郎君 副主任 飯田眞三郎君 合著

實用裁縫書

全壹册

卷頭 少女裁縫圖（上村松園筆） 店頭装飾圖（飯田呉服店）

大判和装頗美本 紙數貳百七拾頁

正價五拾錢 郵税八錢

衣服の裁ち方積り方等は主に數理上の智識と工夫とを要し其巧拙によりて經濟上に關すること少からず本書は著者か懇切周到なる編纂に係り倘斯道達人の助力を得たるもの先づ前編に於て裁縫に關する百般の要件を詳述し後編に於て普通の衣服は元より之に附屬する諸種のものに就て普ねく裁ち方積り方を丁寧に圖解を施す故に女子諸學校の參考書たると同時に家庭唯一の好侶伴たるべき也

吉田調子女史著 ◉ 裁縫と編物 全壹册

大判洋装美本 紙數二六〇頁

正價廿五錢 郵税六錢

女學世界定期増刊

第拾五號 玉あられ

十一月十五日發行 正價貳拾錢 郵税貳錢

口繪

ものおもひ△貴婦人小集（愛國婦人會名譽會員）△歐洲風景△歐洲人都の戸觀△枯野△山村の初冬△秋の晚景△水彩其他人物風景繪畫等數葉挿入

詞藻には天下の才媛が其麗心繡腸より成れる新躰詩、寫生文、消息文を滿載す正に之萬朶の風樹雨に飽いて梢上錦を織るの觀

◉玉の説……小川直子
◉國の華月の花……本田増次郎
◉風景談……大町桂月
◉衣装共進會……二十三階堂
◉米國式家庭……中村鈴子
◉紅葉の話……寺崎留吉
◉我が故郷……藤葉女史
◉小萩ばら……佐藤露英
◉春の鳥……國木田獨歩
◉南洋風物記……大鳥居古城

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候





定價・金五十錢・金廿五錢・金十五錢・金二十錢

女鑑　第十三年　第廿三號

女子と慈善事業

（四恩瓜生會園遊會に臨みて）

涙脆きは凡ての女性の常なりとかや、そは女子は情に深ければなり。愛に厚ければなり。情緒一たび動き、愛の心一たび生ずれば、温かき涙の珠は、その睫より頬へと傳はりて、慈悲の容と、慈愛の姿とを以て溢れん許りに、全身を充さずんば已まざるなり。婦人の涙は、その笑顔よりもうるはしとは、此のことを云ひたるに外ならじ。

されば情に感じ易く、愛に動き易きは、婦人の天性にして、この天性や、發はれて慈悲の行となり、慈愛の業となりて、世に多くの善徳を傳へ、人に多くの善行を施すに至れるは、寔に尊ぶべきことゝいふべきなり

優勝劣敗の大勢は、自然淘汰の道に従ひ、日に人間萬事の上にあらはれて、富みて強きものは、

貧しくて弱きものを次第に凌壓し、滔々として天に瀰るの勢を以て、世上の一切を席卷し盡さんとするは、今日の現況にあらずや。こゝを以て富める者はいよ〳〵富み、強き者はいよ〳〵強く、貧しき者は益々貧しく、弱き者は益々弱くして、その間また一片の情と愛とを留めざるなり。只それ情もなく、愛もなし。むべなる哉、その勢の殘忍酷薄にして、親を亡ひて寄邊なき、可憐の孤兒を路頭に徘徊はしめ、子を先立てゝ賴りなき白髮の老夫を飢渴に苦ましめ、終日營々額に汗するも、尙ほ妻子を養ふ能はず、日夜病床に呻吟轉輾して、一滴の藥水にも潤ふ能はざる不幸不運の人々の多々益々多きに至らんも、亦自然の理勢ならざるを得ざるべし。かくては世愈々開けて、人愈々苦しみ、時益々進みて、人愈々窮するの變調を生じ、古へ謂ふところの世道日に微にして、人心維れ危きの光景を呈するは必然の勢にして、また奈何とも爲難かるべし。

かゝる世、かゝる時に當りて、婦人の天性なる情と愛とは、忽ち四面冷酷と殘忍とを以て充されたる重圍の中に分け入りて、盡きざる情の淚を以て、貧しき者、困める者の上に濺ぎ、溫かき愛の泉を以て、弱き者、惱める者に沐浴せしめんは、婦人の天職にして、その人道に對する功績の大なること、死生の間に出入して、君國の爲に偉功を奏したる古來幾多の忠臣義士に比して、優るあるも決して劣るところあるべからず。ア、かゝる世、かゝる時に當りてこそ、慈悲慈愛を湛へたる婦人の淸き淚は惜氣もなく、濺がるべきものにぞあれ。

この頃ろ四恩瓜生會の園遊會に臨みて、養育院に收養せる兒童を見るに、十四五歲を頭に、五

六歲までなる凡そ百人以上の可憐の男女が、一齊に會場の傍に整列し、音樂の調に從ひて、唱歌を始めたるときには、予輩は感に打たれて、覺えず暗淚を催ふさゞるを得ざりき。ア、是れ誰が忘れ形身ぞ、誰が遺愛の兒女ぞ、如何なる不幸に遭ひ、如何なる不運の爲に、年齒も行かぬ身を以て父母に棄てられ、兄弟に別れ、親族に見放さるゝに至りたるか、若し一たび母たる人の心を以て、是等の兒童の有樣をながめなば、不憫とも、可愛とも、殆んど譬へんに物なかるべし、されど彼等は尙は幸福なる者なり。縱ひ母の慈愛の懷に眠りて、溫かき夢を結ぶ能はざるも、慈悲深き慈善篤行の人の手に救はれて、朝夕衣食の事に不足を告ぐることなく、且つ敎育を受け、職業も授かりて、人並に生育つことを得るは、彼等の將來に取りて、頗ぶる仕合せといはざるべからず、翻へつて廣き世間を見渡せば、慈悲ある人の手に拾ひ殘されたる、可憐の孤兒と無辜の窮民とは、その數果して幾干ぞや。彼等は一椀の殘飯をも得るに由なく、一杯の冷羹をも求むるに途なくして、朝夕となく、日夜となく、たゞ飢渇に苦しみつゝあるなり。焉んぞまた敎育と職業とを望むを得んや。たとひ生きて長く此世に在るも、その行末や洵に思ひやるべきなり。是れ最も悲慘を極めたる不幸の人々にはあらずや。

予輩は今日の慈善事業に向つて、遍ねく天下の孤兒窮民を救濟せんことを望むの、頗る難事なるを知らざるにあらずと雖も、願はくは篤志の婦人が資を投じ力を盡して、例へば四恩瓜生會の如き慈善團體の事業を益々擴張して、一人にても多くの孤兒窮民を收養するの途を講じ、殘酷なる自然淘汰優勝劣敗の中に於て、特に人道の光輝を發揚せんことを、切望して措く能はざるなり。



孝に就て

東京帝國大學兼東京外國語學校講師文學士　村上辰午郎述

（其一）親に對する孝

我邦にては、忠と孝とが、倫理上極めて大切なものになつてをりまして、從つて、忠と孝とに就ての教は、數澤山ございます、それ故、今、私がお話をなさずとも、先哲の教で充分でありますが、それにも關らず、今、私が孝のことを述べんとするのは、自分には、自分だけの考があるのと、一つには、婦女方に、切に望むことがあるからであります。子が父母より受けたる恩惠は、如何にも大なるものでありまして、われらが、幼少なる頃から、耳にせるところの、『父母の恩は海よりも深く、山よりも高し』とある教は、一言にて、能く、その恩の大なるを示し、また、英國の語に、『一人の子を失ひたる父の悲みは數人の子を誕みたるときの喜びよりも遙かに大である』とある、また、獨逸の語にも『母の心はいつも子の側を離れぬものである』とあるのは、矢張、親の恩を示した教であります。

父母の恩惠は、かくも大なるものでありますから、或る學者は、子が親に孝を盡すのは、父母の恩に報ずるためであると申されますが、私は、左樣ではあるまいと考へます、申すまでもなく、子たるものは、父母の恩を知り、生涯忘れてはなりませぬ、されど、恩に酬ゆるために、孝をなすのではありませぬ、子が如何程力を盡したとても、父母の恩の幾分にも、酬ひ得らるゝものではありませぬ、恰も、他人より物品でも貰つたときの返禮のやうに、そんな間の隔つた譯のものではありますまい、されば、何

が故に、孝を盡すかといふに、たゞ、子たるが故に孝を盡すべしと、このやうに私は申して憚らぬのであります、それ故、萬一不幸にして、子に對する親の心は鬼なりとも、親に對する子の心は佛でなくてはなりませぬ。

精かに申せば、孝には、心の孝と、行の孝との二つがありまして、この二つ共完き人でなくては、眞に親に孝とは申されはせぬ、即ち、孝心にして、孝行なる人でなくてはなりませぬ。

子が生れてから、見たり聞いたりすることができれば、早や、その頃から、心の孝は、慥かにあります、外の人の顔を見て泣く子供も、親を見て喜ぶのが、こ即ち子として、親に對する一種の心で、つまり、孝の心に相違ありませぬ、このことは、たゞ、私一人の考のみではなく、瑞西の有名なる教育學者ペスタロッチ氏も、そのやうに申して居られます。

このやうに人の精神が、まだ、發達せない內から、孝の心はありますが、敎を受け、智力を發達せしむることに依て、この心をます〳〵發達せしめ、且つ、行をして、心と一致せしむるに至るものであります。

これから、行の孝に就て申しますが、一言せば、親を安心せしむるやうになすことゝ、また、親を喜ばすやうにするのが、孝行であります、一體、親は、その子の健康如何に就て、心配せらるゝことは、一と通りではないので、少し病にでも冒されたならば、親の心配は非常であります、それ故、能く衛生法を守りゆくのが、父母をして、安心せしむる一つで、孝經に『身體髮膚之を父母より受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり』とあるのは、このことを申したものであります。

また健康上の注意のみならず、能く品行をつゝしむことが、父母をして、安心せしむる所以であります、男の子よりも、女の子をもつ親の心配は、又特別なもので、萬に一つでも、心得違なことでも起るまいかと、案じらるゝものなれば、女子はつゝしむ上にもつゝしみて、行を正しくし、親をして、自分の娘

は大丈夫であると、安心せしむることがなくてはなりませぬ、外より歸るときなどは、定めたる時刻に遲れぬやう、男子よりも、一層、注意せねばなりませぬ。

それから、また、今は、昔と違つて、學問修業のため、一時、古郷を離れて、都に出でねばならぬこともありましやう、左樣なお方は、いつも、手紙を怠ることなきやうにせぬと、父母の心配は、大なるものであります、また、既に婚姻せる女子ならば、夫に對して、能くその道を盡し、舅姑を大事にしてゆくのが、これ即ち、生みの父母に、安心せしむる所以であります。

それから、また、親を喜ばす行は、どうかといふに、私は、平日の僅かなことを、輕卒にせぬやうにするべきであると思ひます、例へば、障子の紙でも、破れてあるならば、父母の命をまたずして、自分でそれをつくろひ置くが如き、または、庭でも少しくきたなくなつてあれば、直ぐ掃除をなすが如き、或は、草でも生へたれば、自分で出來る限りは、人手を借らずして、自分でそれを取り去るなどは、若き女子として、父母を喜ばす行であります、こんなことは、なすところの本人に取りては、別に骨の折れる譯のものではなけれど、それを御覽なさるゝ父母のお心は、どれ程喜ばしいか知れませぬ、それから、また、僕婢を多はく召し使はるゝ家なりとも、父母に對することは、なるべく、それら僕婢の手を借らずして、子たるものが、自分でするやうになされたいものであります、例へば、煙草をお飲みなさる親なれば、娘たるものが、煙草盆に、手づから、火を入れ、煙草盆も、なるべく清くして、親の前へすゝめ申し、お茶を好まるゝお方なれば、お茶を入れて、差し上げるやうに、致さねばなりませぬ、學校へゆく時間がくるからといふて、少しも、このやうなことをなさぬ方は、大なる心得違であります、寧ろ、このやうなことをなすために、朝起をなすべきであります、また母がなさるゝ家事の手助

をなし、或は、母に代りて、弟妹を導くやうにせねばなりませぬ、學校時代の處女は、家に歸りては、机に面するばかりで炊事、その他のことは、我れ敢て與らずといふ心で、然かも、それが上品であるやうに思ふて居らるゝお方が、時にないではありませぬが大變の心得違であります。

以上お話したることは、主として、處女に對する注意でありますが、次に述ぶることは、重に主婦に對する注意であります。

〔其二〕 先代の人に對する孝

凡て、如何なることにても、始めに注意することなくして、終を完うせんとするのは、大變の心得違であります、お互が、こうして、無事に暮してゆくことができるのは、その家の祖先を初め、先代の人の御蔭であります、それ故、祖先を初め先代の人々に對して、尊敬の心なきものは、大に非難せねばなりませぬ、孝といふのは、生みの父母に對してのみいふではなく、先代の人に對しても、孝がなくてはなりませぬ、されば、先代の人に對して、如何なすべきかといふに、それは申すまでもなく、祭祀を怠らぬことであります、然かし、その祭祀をなすにも、唯、僧侶を招待して讀經を頼み、或は、神官を聘して「高天原」を願ひ、親類知己を招いて饗應し、是れで先々安心と、斯ういふ了簡のお方が多いやうでありますが、私はそればかりでは、大に不足であると思ひます、一體、祭祀は何んのためになすのであるかと申すに、その死なれた人の御魂が殘つて居らるゝから、それ故、祭祀をなして、その御魂を慰めんと思ふなら、それは、大なる思違であります、人智未だ發達せず、世がまだ文明とならざる間は、そんな考であつたやうなれど、この文明の世に、そんな考をもつて居らるゝなら、それこそ大笑ひであります、そんな考ならば、御經を讀んだ、高天原をやつた、アーメンを始めた、さてこれで、死したる人も安心せらるゝであらうとして、それでよいかは知れませぬが、祭祀の眞の目的は、決して、魂

が殘つて居るから、なすにはあらで、唯々、子孫として、その死したる人を思ふて、忘るゝことのできぬ心、即ち、孝心より出づるものでありますから、形ばかりの祭祀はよくない、眞に孝の心より出でたるものでなくてはなりませぬ、即ち、精神上の祭祀でなくてはなりませぬ、精神上の祭祀とするならば、無論、僧侶を招いて讀經するも宜しい、またこれまでの習慣通り、親族知己を招きて饗應するもよいが(私の考通りに申せば、饗應は止めて、その費は慈善事業に寄附する方が、一層宜しいと思ひます。)それらの外に、自から、自分の行ひを考へて、その先代のお方の教訓、又はなされたる、行爲に背くことはなからうかと、能々自分を省みることが、眞に先代の人を祭る精神であります、また先代の人は如何なる人か、明かに知られぬとしても、自分の行爲を省みて、先代の人をけがしたこともなきかと、熟考すべきであります。

先代の人々は、如何なるお方であつたか、如何なることをなし、如何なる教訓を家に遺して置かれたかといふことは、縦し分らぬとしても、當代の人の祖父祖母、或は、父母が、如何なる御方で、如何なる教訓があつたか、如何なる事業をなされたかといふことを、子孫に傳へて置くことは、これ即ち、それらのお方に對する孝行の一であります、さすれば、子孫も、自然と、そのお方に對して、忘るべからざる心を有するに至るは、明かなことであります。

それから、また、今一つ述べたいことがあります、それは、私共は、いつも、悲しく感ずることでありますが、寺々の墓地に入つて見まずると、先代の墳墓が、大變に粗末になつて居るのが、如何にも多いことであります、或は、子孫が絶えたなどのため、そのやうに粗末になつて居るものとせば、どうも詮方はありませぬが、皆が皆までそうではなくて他國へゆきて居るために、寺へは音信不通のものもあれば、子孫がその土地に居りながら、丸でかまわないやうなものもありますが、何れも言語同斷であ

ります、中には、昔は佛教信者であつたが、今は、基督教を信じて居るから、寺へは行かぬと、理由を述ぶる人がありますが、それは理あるに似て、甚だ理に當らぬことであります、宗教は宗教、祖先は祖先で、自から別であれば、改宗後なりとも、先代の墳墓は大切にして、注意怠ることなきのが、子孫としての道であります、このやうに申すならば、先代の人と墓とは、全く別であれば、その人に對する尊敬の心あつて、家に於て祭祀怠りなければ、墳墓などは、どうでもよいではないかと、このやうにいふ人があるかは知れませぬが、そのやうに理屈ばかりで世を渡らんとする人は、それぞ、却て物知らずであると、私は笑ふことを憚らぬのであります、苟も、先代の人の遺骸を埋めたる墳墓を、粗末にしてよいといふ道理は、決してありませぬ、子孫を連れて墓詣をするのも、その子孫をして、先代の人を敬する心を養はしむるに、大なる力ともなるものに相違ありませぬ、今述べてきたところの、祭祀のよいいひ、墳墓のことヽいひ、何れも、主婦たる人の充分心得て置かねばならぬことでありますから、一言致した譯であります。

（完）

過渡時代の女學生（續）

呦鹿庵主人

五

智識を求むるに急にして、徳を修むるに不熱心なることも亦た、現下の通有病たり。獨り世の若き女性をのみ咎む可きに非らずと云へども、若し夫れ徳に於て缺ぐる所あらむ歟、女性たるの資格、遺すところ幾許もこれ在らざる可し、寧ろ徳育あつて而して智育なきに、吾人與みせざる能はず。

一女學生あり、甚だ學才多く、而して資之に伴はず、久しく鄕國を出でヽ帝都に居る、竟に幾多都門の男學生と馴れ而して之によりて得るところの資を

以て某校舍に通勤す。これ事實也、此くの如きを耳にするもの、何人も奇異の感に撃たれざるは莫かる可し。然れども其女性は公言す、曰く、妾只だ學ばむとす、學問の爲に身を犠牲とす又何の憚かる所ぞと。

世人乞ふ怪しむ勿れ、現下都門の惡風潮は、此の一語を以て悉く之を表示し居る也。

昔者深窓の内に幾多の醜聞の流れざるには非らず然かも今日の如くに甚だしきに非らざる可し、海老茶を穿ちて、日々校舍を昇降するものにして、此の語を公言するに到つては、常識の決して解し得ざる所也。德育を外にして智育に重きを置く明治の不具敎育、眞に恐怖す可し。

總て女性の能力は、家庭に於て充分に發揚さるれば夫れにて宜しきもの也、敢て天下を料理するの材を有するを要せず、敢て政論を草するの技を持するを要せず、辯舌何かあらむ、理窟何かあらむ、其の能力は須らく家庭的たる可し、而して德操は家庭に於ける唯一の能力を有す。思ふに今の若き女性に在て、家庭に於ける德操兼備の婦人たるに充分の資格を有する人々、幾許ありや、英書は讀み得可し、新體詩は草し得可し、自由結婚は論じ得可し、我儘勝手は云ひ得可し、小理窟は並べ得可し、然れども、然れども遂に一人の德操あるものを見ざるに非らずや。

此かる女性に由りて、組織されむとする新家庭のこと、誠に思ひ遣らるゝ也。柔順ならば尙は敎ゆる術もあり、無學ならば尙は說き聞かせ得る餘地もあり、此等の見込み全く絕えて而かも德操なきものを相對と云ふに到つては、男性の迷惑も大なりと謂ふ可し。而して現に、都門の女學生約一萬五千の內、其の三分の二即ち約一萬は、此の濟度し難き類なるを思はゞ、人誰か驚かざらむ。

吾人は、世の若き女性が、女性本來の眞意義を充分に理解し、其の眞意義の存する所に從つて、自己の歩を進めむことを希はざる能はざる也。

六

女學生の腐敗の一端が、下宿屋生活若くば素人下宿生活と、密接の關係を有するは、炳かなる事實也。左ればとて寄宿舍生活も、目下のところにては不完全なるもの多きが如し。

前來記しおきし樂天的敎育を受けつゝ、男女の交際を相當の事態と唱ふる輩が、下宿若くば素人下宿とするもの、一室を借り、江湖に放浪す。汚がれ行くには、最も能き便利を有すものと謂ふ可し。而して内外の誘惑は、不知不識の間、女性を惡魔の手に渡す可し。危險至極ならずや。吾人は先づ何よりも前に、惡思潮の横溢せる帝都の下層に、年頃の女性を遊學せしめて、敢て意とせざる鄕里の父母の心中を解釋するに苦しむもの也。

調査に依れば、目下他鄕より獨身遊學せる女性の數は、帝都に父母を有するものゝ夫れよりも、多きに居ると云へり。然らば其の數は當に八九千人の多きにある可し。而して夫等八九千以上の女學生が家庭や如何と見るに、大概左の如かる可し。

(一) 地方に於ける富豪の女
(二) 地方に於ける耶蘇敎徒の女
(三) 地方に於ける學者の女
(四) 地方に於ける俄紳士の女
(五) 貧家若くは他の故を以て孤獨の生活を爲し居たるもの

我國に於ける女學校が、イエス主義者に依て開始を見るに至りしものなると同時に、女學生は先づイエス敎徒ならざるを得ざりしの時代ありしは、世人の能く記臆する所也、男女同權、女權擴張抔の小理窟は、多く此の徒によつて叫ばれたりき。從つて重なる都會に遊學するの風は、此のイエス敎徒の女によつて盛に開始されたる也。地方に在て多少學識あるものは勿論、多少の富を有するものも、其の女を都會に向つて送らずむば何となく肩身が狹きかの觀を起さゞるは無かりき、況むや俄紳士のごときに於てをや。

耶蘇教徒の女は、大抵寄宿舎に向つて進みたり。然れども、其の不完全なる寄宿舎生活と、自由文學を味ひ自由に男子と交際し自由に戀愛を説き得るの放縱とは、彼等を德操ある婦人たらしむるに、何の効をか奏したる。先づ彼等の腐敗は、イエスが默可せる戀愛談に由りて、其の緒に就かざらむとするも得ざりき。

其の他の女性の多くは、これ下宿屋生活而已。腐敗するに於て、最も易々たり。

思想の未だ確かならざる男子をして、獨り東都に遊學せしむるの夫れだにも、大なる不安なるに、先天的意志薄弱の女性を、下宿屋に送る、而して就學する所は樂天的教育に在りとせば、父母は己れが愛する所の美玉を取て一個の泥中に投ずるものに異ならず、美玉を汚がすの泥土は尚ほ拭ひ去るを得可し女性の腐敗に到つては、白壁に向つて墨印を捺すの類也、遂に生涯の負傷たらざるを得ざる可し、朱に交はれば赤くなるとの諺はあれど、十人の中に一人の腐敗せるものあれば、他の九人も漸次に着色され行くもの也。父母の監視あるなく、社會の制裁あるなく學舍は盛に樂天的生理的に育成し、机上に横はる雜誌は悉く若き男女の戀を語る、而して、男學生の誘惑は日に益々施さる、此くの如くにして腐敗せずむば、これ却て異數にあらずや。

これを聞く、近時著しく書生の遊廓に赴かざるもの、其の源因主として女學生の增加にありと。女學生と男學生の亂行の、漸く甚だしきを證據だつるに恰好の話柄にあらずや。試に女學生の根據地たる本郷神田の町々を逍遙せば、二階より喃々嬌々の語の漏るゝに何人も愁歎せざる能はざる可し。

曾て女學生攻擊の聲の甚だしきや、當事者は共に同音を以て、これ女學生の罪にあらず、女學生を誘惑する男學生の罪也、と反駁の矢を放てり、女學生の罪か、男學生の罪か、そは知らず、孰れにしても此かる聲の交換さるゝ程、女學生の腐敗が、事實たるは掩ふ可からざらむ。而して下宿屋が女性醜行の

媒介者たるは、即ち一也。

下宿屋にあるものは、概して腐敗せり、甚だしく腐敗せり、故にこれを救濟するには、女學生の下宿屋生活を禁ずるに在り。方法最と簡便也と云へども素人下宿にあるものは甚だ救濟を難うするが如し。如何にして之を取締る可きや、彼等は種々の口實を以て、例へば知人親戚等の語を用ゐて、此の名目の下に依然として素人下宿生活を繼くるなる可し、故に如何ともする能はざる也。縱令、素人下宿より彼等を追ふとするも、彼等の意志にして改悛なさずむば、彼等は寄宿舍をも直に醜行の媒介所となさむ。此くの如くにして進まむには、彼等の總ては恰かも四人の如く抑留するに非らずむば、所謂女學生の醜行は跡を絕たざる可し。然かもこれ四人扱ひ而已、決して明治の女學生を待遇する所以のものに非らざる也。下宿屋生活は斷禁す可し、素人下宿生活は充分の取締りを爲す可し、若し夫れ以上に在ては、今日教育方針を全然根本より革新するの一事存る而已。

七

これを外にしては、男學生の誘惑あり、不完全なる樂天的教育が教ゆる弊習あり、而してこれを内にしては、更に一の彼等を誘惑しつゝあるもの在るを認む。

自由廢業後の醜業婦あり、高等淫賣あり、酌婦あがりの怪しき女あり、何れも海老茶袴に外面を欺き他の女性と伍して校舍の門を潜る。此等のものゝ爲めに他の女性が誘惑さるゝもの、決して尠からざる也。

一面よりして云へば、此等の醜業婦が苟めにも海老茶の袴を穿ち、校舍の門に通ふ抔は、非常なる進步也、發達也、稱す可き事也。然れども、他面より云はゝ、海老茶の袴を汚がすの非常なるもの也。何等の教育なきものが、多少の醜行をなしたりとて、左程に醜感を與ふるものにはあらねど、堂々として海老茶の袴を穿ち、文明の教育を受けつゝあることを天下に發表せるものが、內容の之れに伴はざるに

於ては、吾人は甚だしく之れを憎みても宜しかる可し。

海老茶袴を廢することは、一の急務たる可き歟。彼等にして明治の女子敎育を鼻にかけずば、吾人たりとも、餘りに惡感をば催さじ。

八

過度時代にある女學生が、其の家庭に於て寄宿舍に於て、將た亦た下宿に於て、全く根底なき生活を續けつゝあるが如く、其の精神に於ても、また同じく根底なき生活を續けつゝあるは、事實也。彼等は嫁入前の大事の身なるを考ふるの暇だに無きもの、如し。これ一種の浮浪生活也。

天才崇拜は吾人が半面の主義也と云へども、吾人はこれを婦人の上にまで應用し主張せむことは欲せず。婦人に對して吾人が希待する所は、彼等が能く家庭の主人公として家庭に重きを致さむこと、これ也。一の貞操にして完備せずむば、他の有ゆる能力は、女性に在て味意を爲さず。如何ほど時代の思潮が動亂すればとて、家庭に於ける主人公の眞意義は毫末も異ならざる可し。

吾人は、奇嬌なる本能論や浮浪主義の、女性界に實行さるゝを好まず。然れども、過度時代の惡思潮の、今や女性の上に最も著しく現はれつゝあるを悲しむ。

（完）

史談

エミール、ド、ジラルデン夫人

前田越嶺

われ死せる後、わが天啓の歌に誇り、佛國の民、われを最愛なる妹の如く惜み、異日われを國家のミューズと稱讃へん。

一

夫人初の名はデルフィン、ゲイ孃、幼より才媛の聞え高く、天性歌道に堪能にして實に『國家のミューズ』の稱にそむかざりき、其歌、其小說、其劇作等は人々の爭ふて讀まんと欲したる所なり、されば夫人のサロンは常に巴里知名の人士を以て滿されたり其死するに當り、都人士皆深く之を惜み、天若し尙數年を夫人に假さば、其の成功如何ばかり大なりしならんかと云へり。

二

夫人は一千八百四年一月二十六日獨逸のエキスラシャペルに生る、母は、マダム、ソフィ、ゲイと稱し、頗る文才に富み、少なからぬ著書を遺せり。

母は華美なるサロンを有ち、交際に巧なる所より當代知名の政客文士等に交り、夜來此等政客文士の集れるとき、夫人即ちデルフィン孃は容をつくり、髮を梳り、身に白衣を穿ち、サロンに出で來りて來客に應接する風情は、言々珠をころがし、步々花を生ずといはんも愚なり。

母が此等の人士と文を語り、歌を詠じて樂みつゝある間に成長したる孃は、彼を耳にし此を眞似る內早く旣に其の天才は境遇によりて最と立派に發揮せられたり。

孃が初めて文を世に出し、學士會の懸賞に應じたるや、人皆舌を卷て其の天才に驚きたり、是より當時の新聞雜誌は爭ふて孃の寄稿を仰ぎたるが故に、其才名愈々日に月にあがれり。

三

孃は其の才名の爲に多くの貴顯紳士より結婚を申込まれぬ、其中にアルトア伯の家人はルイ十八世の晩年に當り、孃を伯に配せしめて、彼のルイ十四世とマダム、ド、マンツノンの往時を追想せしめんと計りたれども、伯が後にシャール十世となりし時、事止みとなれり。

マダム、ド、スタエルは其の名著『コリンヌ』に於て才色兼備の理想女子を描けり、孃は竊に書中の理想を取りてわが身に實現せんことを務めたりと云ふ蓋し孃が内外四邊の事狀境遇之を然らしめたるものなるべきか。

孃は此の如き理想を懷て、世界の名士、史上の美國伊太利に旅行し、山紫水明の地に入り、名都舊跡を探り、天然の景色と歷史の紀念とを歌はんと欲したりしが、果して此行は孃の錦腸繡心を發揮し、金石の調、流水の韻今仍は誦す可きもの多し、就中孃が彼のポンペイの遺跡を想見しつゝ、ナープルのウェズーヴ山を歌ひたるが如き、句々皆金玉なり、嗚呼記者は此の高調に對して、愈々我拙筆の無能なるを怨まざるを得ず。

夫より孃は古來の名都羅馬に來り、彼のカタコンブ洞窟の側、聖女セシリアの墓前に詣づるや、天啓の光忽ち其心に映射し來り、金石流水の韻調直に口を衝て出づ、嗚呼何等の高才ぞや。

斯の如く孃の天才は境遇によりて養はれ、名士を經て一段の光彩を放つに至り、其間にマダム、ド、スタエルの理想とせる所は、孃の身に着々現實になり來れり。

孃の佛國に歸るや、富豪の聞え高き一靑年ラグランジュ伯、孃を娶らんとせしが、結婚の間際に至り姑の一條より破談となれり、是れ孃がエミール、

ド、ジラルデン夫人となるを得たる所以なり。

四

一千八百三十一年、嬢は殆んど天然の約束によりてエミール、ド、ジラルデンに嫁せり、嬢曰く、「われ彼を見るや否や、わが心既に彼に繋れり」と、是れ豈自然の約束にあらずや、嗚呼嬢は是に於て乎遂にエミール、ド、ジラルデン夫人となれり。

夫人となりて後、夫と共に新聞事業に從事し、文藝欄を擔當し、世の出版界に貢獻したること枚擧に暇あらず。

夫人のサロンは夫が何れの地に移轉するも、諸大家の訪問にて始終賑ひたり、夫人は母のサロンに在りし昔より、疾く既に交際の道に熟したれば、夫人となりてよりは交際場裡に尚一層花を咲せたり。

乍併寄る年波と共に夫人の相貌もやゝ衰へて、其の心氣亦多少荒け來り、時に銳鋒當る可からざる筆舌に惱まさるゝものもありしは、蓋し其夫の境遇自ら然らしめたるものなるか。

彼のカウェギヤク將軍が『出版』新聞の主筆を捕へたる時の如き、夫人憤慨に堪へず、禁あるにも係らず、直に將軍の前に出でゝ、

『嗚呼是れ何たる事ぞ、今日は是恐怖時代なるか。』

『否、サーベル時代なり。』

『然り、將軍のサーベルに麻繩を附けよ、直に是れ斷頭臺なり。』

と語りたるが如きは、其の一斑を窺ふに足るべし。此際に於ける夫人は最早一個の歌人なりとして視る可からず、凜然たる女丈夫なり。

然れども夫人姿色の美全く消せたりと謂ふにあらず、年老ても夫人は尚は絕代の美人たるを失はざりき、若夫れ夫人の精神に至りては年齡といふことを知らざりしなり。

五

夫人は晩年專ら劇作に從事し、多くは成功せり、少くも夫のそれとは大に撰を異にせり、夫人の文を行る必ずしも易々たりしと云ふにあらず、多くは苦

民を思ひ給ひしと、この一語にて、いひ盡して余蘊なし。又、わらやの風、いと妙也。賤民が、茅屋に粗末なる布團着て、うち伏せる上に、寒風隙を漏りてふきこむさま、目の前に見ゆる心地す。まことにこの御製は、ひとり調高きのみならず、寒夜御衣を脱し給ひし帝のふるごとすら思ひ合されて、益々あはれふかし。

後醍醐天皇

民のため時ある雨をいのるとも
　知らでや田子のさ苗とるらん

○この御製は、新千載集に、「夏、百首歌めされけるついでに」といふ詞書あり。○ときある雨　五風十雨といふごとく、時に適ひて降る雨をいふ。言ひ換ふれば、氣候和順にして、風雨災害のなきことなり。○知らでや　知らずにやといふ意。やは、疑問の係辭にて、下のらんに應じたるなり。○田子　田を作る人也。榮花物語に、「雨すこしふりて、田子の袂ども、しほとけたり」などあるは、

その一例也。されど、こゝは、廣く、農夫と見てよし。○さ苗　さは、接頭語にて、さ夜、さ蕨などのさと同じく、語調のために添へたるなり。單に稻の苗と見るべし。

○一首の意は、朕が、民のために、氣候の和順ならんことを欲し、心を痛めて、その時に適ひたる雨を祈るとも知らで、農夫等は、植ゑつけをせんとて、欣然として田面におり立ち、早苗を取るならんといふ御事にて、「朕がねがひかなひて、民のその業を勵むは、何よりうれし」との餘意をこめたり。躬から農作のさまなどみそなはせ給ひて、百首歌めされけるついでに詠み給へるものなるべし。民と共に喜び給ふ叡慮のほど畏こけれど、餘情ひゞきて、いひ知らぬ味ひあり。調べもまためでたし。

源實朝

實朝は、源頼朝の次子にして、頼家の同母弟なり。建仁三年、兄頼家に嗣て征夷大將軍となり、

建保六年左近衛大將に任ぜられ、後又、右大臣に進む。承久元年正月、拜賀の禮を鶴が岡の社に行ひしとき、姪、公曉に殺されたり。時に年廿八。實朝、人となり、温雅清秀にして、頗る將士の心を得たり。文學を好み、和歌を藤原定家に學び、雄壯の句多し。左に示す如きは、その一也。

山はさけ海はあせなん世なりとも
君にふた心わがあらめやも



○この歌、新勅撰雜の部に「ひとりおもひをのべはべりける歌」と題したり。所謂述懷の歌なるべし。○あせなん世　海の水の涸れて、なくならん世の意。あすは、淺くある意の語也。萬葉集の「ひさ方の天のさくめがいは船のはてし高津はあせにけるかも」また、源氏物語の「むすびつる心もふかきもとゆひにこき紫の色しあせずば」にて、知るべし。○次の歌のあせは、即ち、約束せし心の淺くなるを、紫の色の淺くなりて、さめるにいひかけたる也。○わがあらめやも　われあらんやの意。わがも、あらめやも、共に古格也。やもは、反語にて、やはの意なり。感嘆詞にあらず。○一首の意は、山の裂くべきものにあらず、海も淺くなるべきものにあらず、されど、その大山裂けて崩潰し、蒼海涸れて焦土となるほど、大變動ある世となりても、われは、朝廷に對して、二心

を持たず、ひたすら誠意を以て仕へたてまつると也。この歌、別に餘韻をば含まざれども、匹夫をして廉ならしむべく、懦夫をして起たしむるに足りぬべし。なほ、彼の歌に、

大海の磯もとゞろに寄る波の
　われて碎けて裂けて散るとも

武士の矢なみつくろふこての上に
　あられたばしる奈須の篠原

などあり。いづれも雄渾なる氣象、一首の上に躍動せり。近來、史家の、彼を凡庸の人にあらずとなすも、宜なりけり。誰か、歌を以て、優にやさしきものとのみなす者ぞ。

藤原師賢

師賢は、内大臣師信の子なり。花園天皇に仕て、權中納言に拜せられ、後醍醐天皇、御位に即き給ふに及び、正二位權大納言に陞れり。元弘二年、天皇、北條高時を誅せんとし給ふや、首として、この謀に與り、大に畫策する處あり。たま〳〵事泄れて、高時、兵を遣はして、天皇を遷し奉らんとす。師賢、藤房と共に、天皇を奉じて宮を出で、やがて袞龍の御衣を着、御輿に乘り、詐りて天皇と稱し。叡山に登る。これ、敵の視線を牽制せんが爲也。かくて、笠置に赴きしが、その陥るに及び、また、天皇を扶けて遁れ、遂に路を失ひて捕はる。三年夏、下總に流され、その冬、年三十三にて薨ず。

つかふとてまづ踏みわけし九重の
　雲居の庭の雪のあけぼの

○これは、元弘二年、百首歌めされけるとき、詠みて奉れる歌にて、新葉集に見えたり。○つかふとて　朝廷に出仕せんと云意。まづ踏みわけし　人々に先だちて出仕せしと、この句にて明かなり。○九重　宮廷の別稱也。支那の故事に、禁中を九天に擬し、天子、九門を備ふと、あるより起れり。されど、こゝは、九門を備ふといふほどの意に見るべし。○雲居　禁中を尊び、雲の上になど

らへていへるなり。公卿、殿上人を、雲の上人といふも、この意なり。〇あけぼの　明仄の義にて夜の、ほのかに明け初めし頃をいふ。この下に、「さても美しき眺めなるかな」などの意をふくめたり。

〇一首の意は、朝廷に出仕せんとて、第一に御庭の雪を踏み分けて、その曙の景色を眺むれば、えも云はれぬ美しき景色なるかなと、大内の雪のあしたの絶景を詠じたるなり。夜色、やうやく明けはなれんとするころ、金殿玉樓を始め、美しく作りなしゝ御庭に、雪のふり積りて、一面に銀世界を現じたる絶景、さてもありぬべく覺ゆ。

この歌、名歌として、たゞふるほどのものにあらねど、大内の絶景を巧に人に連想せしむる技倆、さすがに捨てがたく、いひまはし方もまた面白し、かねてまた、忠臣の面影も汲まるべしや。

家政學大要講義（つゞき）

磯邊　武者五郎

（二十六）各種の飲料

飲料の重なるものは左の如し。

乳汁、蛋白脂肪糖分より成る、成人には牛乳を可とす、

酒、アルコールを主成分とす、少量に用ふれば消化力を助く多量に用ふれば痲酔に陷り種々の病を起す、西洋酒はアルコールを含むこと多量なり、

茶、テインと稱する植物性鹽分なり、興奮作用を爲す、少量に用ふれば、消化を助け心神を爽にす、多量に用ふれば消化不良となる、小兒及び虛弱の人は用ひざるを可とす。

珈琲、効用、害毒、共に茶に同じ。

（二十七）各種の食物

食物は大別して植物性食品、動物性食品の二つと

す、其の種類左の如し、

食物
- 植物性
  - 穀類（米、糯米、小麥、大麥、裸麥、粟、黍、玉蜀黍、稗、蕎麥）
  - 菽類（大豆、小豆、豇豆、豌豆、蠶豆、隱元、刀豆）
  - 藷類（甘藷、靑芋、九面藷、佛手藷、薯藷、馬鈴薯）
  - 蔬菜類（蘿蔔、蕪菁、胡蘿蔔、蓮根、慈姑、茄子、百合、葱、芹、土當歸、筍、蕨、薇、款冬、小松菜、芥菜、牛蒡、胡瓜、白瓜、南瓜、冬瓜）
  - 海草類（裙帶菜、羊栖菜、昆布、海苔、黑菜、石花菜）
  - 菌類（椎茸、松茸、木茸、石茸、樅茸、松露）
  - 果實類（桃、扁桃、梅、杏、梨、鳳梨、林檎、柿、葡萄、蜜柑、無花果、枇杷、莓、西瓜、甜瓜、橙、栗、胡桃、銀杏）
- 動物性
  - 卵子類（鳥獸魚類の卵子）
  - 魚介類（海魚、淡水魚、貝類）
  - 鳥肉類（鶴、雁、雉、鴨、鴫、鶉、雞、鳩、雀）
  - 獸肉類（牛、豚、羊、兎、猪、鹿等）

（二十八）　各種食品の性分

穀物は澱粉多量にして蛋白及び脂肪鹽分の少許を含有し、人生必要の食品なり、殊に日本には必要なり、米は精白米よりは荒搗の半白米を滋養に適せりとす。

菽類は蛋白質を多量に含み、澱粉、脂肪鹽分をも含有し米麥に次ぎて滋養物なり。

藷類は多量の澱粉質を含む、脂肪、蛋白質の食物に添へて食ふべし。

蔬菜類は多量の水分と鹽分とを含む、又蛋白脂肪澱粉、糖分を含むものなり、蔬菜類の水分と鹽分とは人體血液を補ふ効あり、肉類と配合して食すれば、人體に益あり。

海草類は蛋白質に富めどもすべて消化惡しく滋養の効少し。

菌類は蛋白質に富めどもすべて有害性のもの多し、

果實類は水分、糖分、酸類を含有す、消化を助くる効あり、不熟のものを食ひ、又多く食すれば腸胃を

害ふ、
卵子類は多量の水分と蛋白質を含み、又脂肪と鹽分とを含み、人體の滋養となる、
魚介類は蛋白脂肪に富み、又多く燐を含む、燐は腦神經を養ふに効あり、
鳥類の肉は蛋白脂肪に富み、又燐を有す、
獸類の肉は蛋白脂肪に富む、

（二十九）製造品

豆腐　大豆より製す、蛋白質に富み滋養に効あり、
蒟蒻　滋養に富めども消化遲し、

麵包　蛋白脂肪の兩質を含む、饂飩及び素麵、蕎麥、概して滋養になれども饂飩を最も善しとす、
菓子は食後適度に用れば益あり、多食すれば害あり。

（三十）嗜好品

嗜好品とは酒、茶、珈琲、煙草及び諸種の香料にて少量に用ふれば可なり、多量に用ふれば有害なり、
諸種の香料とは山椒、蕃椒、山葵、芥子、薑、胡椒、肉桂、にて肉類に少許を添へて用ふべし、多量に用ふれば胃を害し、神經を衰弱せしむ。

（未完）





日本好きの露國婦人

松本晃

露西亞、露西亞、露西亞とし云へば、乳臭き兒童より頭上霜を戴ける老爺の輩に至るまで、何人も日本と極交情の悪い暴虐なる憎らしき覇國なりと思ひ、特に近時の如く兩國各所見を異にして相讓らず、次第に面白からざる方嚮に進み、暗澹たる一道の殺氣鬱として東亞の天を蔽ひ、彼我共にマサカの時の防備に忙はしく、軍艦の増遣！、兵員の異動！よと京童日として警報を傳へざることなく、危機壓迫、何時火を覩るか血を降らすかも測り知るべからざる今日此頃、迂濶にも『女鑑』に『日本好きの露國婦人』を掲ぐるとは那の意味にやと詰問さるゝ讀者もあらんと思ひながらも茲に餘白をかるは、眇たる一女性の躬を以て積年同情を日本に寄せ、赤子に對する慈母とまでには至らざるも、水魚の交ある親友の態度に出で、異郷に入りて物慣れざる日本人に許多の便宜と慰樂を與へ、垂教懇到、誠情流露眞に掬すべきものありといふに至りては、籍のスラヴに屬し地の歐露に棲むとの故を以て、また輓近偶々兩國意志を同うせずして時局難に干戈相見えんとする危機に瀕せるの故を以て、篤志を紹介せずにムザ〳〵握潰して置かねばなら

ぬといふ道理がないからである。英や米はいざ知らず、彼に於て之を見る、恰かも寂寞たる荒野に遊んで香氣芬々たる一朶の菊花を探り得たるの趣なくんばあらずだ。

今を距る凡そ二十餘年前、西部西伯利なる某縣の知事にイワン、ブラングと稱する人があつた。後ち病死したるを以て夫人マリヤは遺産を襲ぎて家を露都聖彼得堡に移し、大伊太利街なる一陌に居を求め、富豪といふ程にはあらざるも、さりとて生計に不自由を感ずることもなく、從妹オリガ、トラウエルセイ孃と共に聲華を避けて閑雅なる生活を營み、冬季社交の季節は多く都市に在りて知人と往來し、夏期は概ね郊外又は芬蘭の別墅に赴きて悠々閑日月を送つて居るが常である。夫人マリヤは性頗る温柔にして談笑を好み、始終嬉々として來客に接するが中にも、殊に日本人を遇すること極めて厚く、邦人の始めて露都に赴きたるものにて之を訪ふあれば、懇ろに同市の生活、風俗其他何くれとなく仔細に説き示し、以て尠なからぬ便益を邦人に與へ、苟も我より彼に問ふことあれば、諄々として説き去り説き來り、宛かも恩師の愛兒に對するが如き狀ありとは、邦人の彼土に赴きて親しく同夫人の謦咳に接したる者の語る所である。曾て公使として久しく同國に駐劄したる西男爵の如き、其の少時同市の大學に在りて業を修めたることありしが、當時屢々夫人の許を訪ふて、或は社交上の談話を聞き、或は語學上の教授を受け、やがて業成りて官に就きたる後は、更に有力なる人物を紹介して社交場裡に立つの便宜を與へられたる等其の負ふ所尠なくなかつたといふことである。爾來其因緣に由りて邦人の任に露國公使館に赴くものは、誰一人として夫人の門を叩かざるはなく、若し新任の館員にして久しく訪問せざるときは、何故に速に其仁を誘ひ來らざるやと不快なる顏色にて舊知の人に問て、又一度び訪問したる者時に久しく再訪せざるときは、彼君は或は病床に臥せらるゝにはあらざるか、或は何か意外なる重要事件にても起らざるか抔と種々に婆心を

騁せ、日を經て再訪するや、歡然として之を客室に導き、邦人中未だ自在に露語を操つること能はざる者に對しては、通俗なる佛語を以て之に接し、傍ら露語の實驗を試み、また客の歐語に熟するものあれば、歐亞兩洲の文明、風俗等を對照談論して滔々萬言を列ね、その日本の維新以來勃興の狀を評するに至りても、他の露人の如き淺膚の見に陷らず、特に我が國の文學美術等の優秀なる點を論ずるに及んでは自ら一隻眼を備へ、氣焔なか〱當り難きものあり、語次時々自國下民の智識に乏しきことを嘆き、日本の國民教育の能く普及し居ることを羨んで措かざるほどなりとは、殊勝なる心掛けを有する女性といふべきである。蓋し夫人に接する邦人の多くは、自國に於て大抵相當の教育を受け、且つ春秋に富みたる青年の事とて、此等は其同情を日本に傾けしむる一原因であるさうな、夫人齡尙は知命、躰軀肥大にして健康人に勝れ、克く誨へ克く談じ、洵に異彩を有する女丈夫にして、廣き露國婦人中に在りても、日本の事情に通じ且つ日本人の爲めに勞を吝まず惠を頒つこと同夫人の如きものは眞に其儔を見得ないのである。

然るに從妹オリガ、トラウエルセイ孃もまたマリヤ夫人と等しく日本贔負の露國婦人にて、亡父はアレクサンドルと稱し子爵の榮典を受けし人であつた。孃天資穎敏にして學藝の嗜み淺からず、就中繪畫に妙を得マリヤ夫人と供に親しく交を邦人と締び居る人なるが、曾て同地公使館に書記官を奉じ、今は佛國に駐劄する本野公使の如きは、曾て孃につきて水彩畫を學び、今日に及んでは運筆頗る自在となり、異郷の風光を寫して孃に寄せ、舊誼を謝すること抔も屢々あるさうだ。孃はその贈られたる繪畫を壁間に掲げて心を慰め偶々邦人、孃を訪ふものあれば、談笑の傍ら此の繪畫を指して邦人の技藝に巧みなるを賞すると共に意中の温情を漏し、其の間には毫も人種の別などゝいふ惡感念を挾まぬさうだ。孃年齒已に三十に垂んとするも婚嫁を欲せず、早く兩親を喪ひし爲め今日に至るまで空しく寂寞たる孤獨の生活を營みつゝある

蓋し生涯單身以て美學の上に貢献せんと欲する覺悟ならんといふ事である。冬季社交の期に入れば、マリヤ夫人と共に毎週一回日を期して來客に接し、露國人は勿論邦人の此日に會するものも甚だ尠なからざることなるが、又各月一回位は茶話會を開きて邦人を招き、露國の知友も之に加はりて淸談閑話時の移るを知らず、和氣洋々として春風堂に盈ち、斯會は啻に邦人の露人と交誼を結ぶの好機たるのみならず、彼我兩國事情の疏通上にも益する所尠なくないといふ事である。又兩女史は多年本邦觀光の望を懷いて居るといふことを聞いた。

兩女史たる者秋夜孤燈の下極東の時局に顧みて胸中果して奈何の感かある。霜雁一聲恐しく斷腸の想ひあらんと察せられる。されど憂ふること勿れ、戰は素と國家間に起る爭にて個人の罪にあらず、又敢て永續的の性質を有するものでもない。たとひ一時不幸にして鐵火相接し吾人は貴國を敵とすることあるも、貴國人をば敵とせず、貴國人を敵とするも、其敵とするものは武裝して軍に從ふもの若くは抗爭するものに限る。他は敢て之を問はず、又聊かも憎怨の情を挾むが如きことは爲さない。是れ文明國民の守るべき義務である。貴國また此の法例の外に出づることは決してあるまい。兩女史願はくは神を靜め時局の久しからずして寧謐に歸するを俟て。而して平和の神戰亂の魔を征し得て國交舊に復したるの後、貴國に類を見ざる日本の櫻花、長崎より函館に抵るまで一路爛熳たるの日、一度び來りて觀光の勞を執らんと欲するの志なきやいかに。我が國の姊妹は貴女等の篤志を諒とし舊誼に酬ゐんが爲め誠意歡迎を拂ふべきや必然である。貴國が苦心經營の餘に成りたる西伯利貫通鐵道は今や貝喀爾湖沿岸線路を除く外咸く竣工を告げて、貴國より日本に來るの易き、恰かも貴國より汽車又は汽船に搭じて西歐諸國に赴くと異ならない。旅行上往昔の如き艱苦を甞むること絕えて之れなきは吾人の萬々保證する所ろである。

富豪の母

（岩崎美和子刀自）

松濤庵

我邦長者の筆頭として其名高き富豪岩崎家の歴史を綴る時に當つて、最も良き材料があるが、夫は當主彌之助氏の母刀自が、岩崎家に嫁がれてから一日も缺かさずに記された處の日記である。即ち此日記に依つて、岩崎家今日の成功を知ることが出來るし、又世人の多くが羨み迷ふ處の心を矯める事が出來ると同時に更に富豪の母たる人は、甚麽ものであらうかを知る事が出來る。

土佐國安藝郡の山奥に、小野敬藏といふ醫者があつた。此人の娘に美和子といのがあつて、十八歳の時に、同郡の郷士岩崎家に嫁したが、此娘こそ即ち今の岩崎家には大切な人で、茲に富豪の母として紹介する其人である。

美和子の良人彌次郎氏は、實に豪放磊落の人で當時最も不如意であつて家政の事などには頓着せず、成る儘に打捨てゝ置いたのを、只一人美和子が左右して、或は自分で鋤を握つて畠を耕し、或は夜に入つて機を織りなどし、種々樣々の困難を一身に引受けて居た。それで漸との事家内は粥汁三椀づゝが毎日の常食！

毎日粥汁三椀づゝを常食とする此哀れなる夫婦！二人の仲に擧けたのが彌太郎、彌之助と呼ぶ男の子終日の勞働に身體は疲れ飢を感ずる事は甚だしいが何うする事も出來ぬから、堪へねばならぬ其辛さ！たゞ家を興したいとの一心が、辛うじてそれに打勝つて居たのである。加之も此憐れむべき新婦の實家方なる小野家では、早く實父去り實母歿して、二人の兄弟が最と貧しい境遇に陷つて居るので、美和子は常に一方ならず此方の心配も堪へない。と云つて岩崎家の多からぬ金品を持ち出して助ける譯にも行かず。止むを得ぬから毎晩自宅の用事を了つてから

暫時の暇を貰つて實家に行き、機織紡糸などをして幾何かづヽ生計の資を助けると共に、兄弟二人の衣服の世話までもしてやつて、夜更けて後一里以上もある山路を自宅に歸ること何年の間？脊中には乳呑兒の彌之助氏が無心の夢を結ぶあり、幽かに淋しき梟の聲を聞き、夜を我物に鳴く蛙の聲を便る時、撞き來る鐘の音の一ッ二ッ如何に哀れなるよ。

が併し、此堅忍不拔なる美和子の苦心は、決して畫餅では無かつたのである。可愛き彌太郎、彌之助の二子も、相當の青年になつた頃には、三椀の粥汁に舌皷を打つの境遇を免かれるやうになつた。下男下女の一人づヽも使つて、少しは自由の利く身の上とはなつた。處が良人彌次郎氏は、間もなく黄泉の人となつて、我子の出世を見ずに此世を去つた、美和子は實に悲嘆の涙に暮れたのである。けれども根が男子勝りの悟りも早く、二人の子供を修業の爲に城下に出し、自分は亡夫の位牌を護つて、益す勤儉貯蓄に心を懸け、十年一日の如く働いた。

時は德川の流れ漸く濁り、尊王攘夷の説盛に行はれて、いと騷がしき世の中である。勤王の義氣に凝り固つた土佐一藩の青年中に籍を入れてある二人の子は、時の風雲に乘じて故郷を出奔した。母の身として心配せずに居られやうか、召使ひの下婢一人を相手として、細き烟を立てつヽも、我子が上を氣遣うことは又一入であつた。さらぬだに、人の弱味に附け入る沒骨漢、何の世にも絶へぬもので、何時何處にて知りたりけむ、朱鞘投挿の大小を鼻にかけ、小倉袴に物言はせて、ヤレ旅費を呉れ金子を與へよと強請る者も少くなかつたが、美和子は少しも驚かず親切に之を待遇して、相手の顏色を無からしめし事も幾度ぞ！

兎角する内時勢も變つて、岩崎家でも當主彌太郎氏の計策當り、多少の資産も出來て、東京に引移る事となつてのであるが、美和子はなか／＼油斷せず、一家の經營少しも昔と變らなかつた。其後彌太郎氏が愈よ三菱會社を起して、家道日に月に肥つて行き

海上王の名全國に響き渡つてからは、美和子は漸く安居の出來る身の上とはなつたが、併し相變らず自分の所業だけは廢さないで、機や糸などを手にかけて、少しも無駄に時間を費やさぬのである。

海上王の彌大郎氏は、其性質克く父に似て、至て豪放磊落、細かな事に拘泥しないで、頗る剛膽であるが、母なる人に對つては、何處までも小心で、其前へ出れば、謹んで禮義を守つた。例へば外から醉つて歸つて來た時、何か心に充たぬ事があると、忽ち癇癖を發して人に當り散らすが、それが母美和子に嫣乎笑はれると、顔の色が和らぐ程。

美和子には孫に當る康彌、秀彌などいふ二人が、雨の日雪の朝、學校へ行く事を躊躇する時、祖母樣が直ぐ鞭をもつて驅けつけ、今時の小供で、學校へ往にのを厭がるものは誰だ、其麼事で、將來剛い者になれるか？と詰れば、兄弟はこそ〳〵と提鞄を抱へ學校指して大急ぎ。更に泣き盛りの玄孫などが、泣き出して止まぬ時に、それ祖母樣がお出でゞすよと、只た一言云へば、フッツリと泣止むことは至極妙！。

妾は何程富有になつても、昔の貧乏は忘れることが出來ない、女の職業ほど樂な物はない。と糸繰機織は死ぬまで止めず、着物は木綿が一番着慣れて居るから、この方が肌ざわりが可い。と云つて日本一の分限者たる三菱の隱居美和子、卅三年の三月十四日大往生を遂ぐるまで木綿の着通し！。

あはれ此人！あはれ此母！

（をはり）

主婦と接客（上）

土肥月巴

◎都府に家居して田舍人の訪問を受くるとき如何心得然るべきにや。

△總て田舍と都會とは風俗習慣を異にすると共に禮儀の度合に於ても、亦た自ら長短の差あるを免れず、左れば夫れ〳〵場合に臨みて成るべく客

の意に適するやう程合を見計ひ應對す可し。

◎田舍に在つて都人の訪問を受くるときは如何心得て然るべきにや。

△成るべく竊に婢僕若しくは子女に命じ其の地の特產に係るか、左なくも氣味よき精良の飮食物を取りつくり、先づ之を饗したる後に、ゆる〳〵四方入方の談話に移るべし。

◎恰も用向に從事中來客あらば如何心得然るべきにや。

△若し來客と懇親の間柄ならば、改まつて用事を中止するに及ばず、作業を爲しつゝ對話するも妨げなし、左れど禮式に繫はる訪問なるときは、假令懇親の間柄にても作業を見合せ應對すべし、偶ま來訪の珍客に對しては固より論ずるまでも無し。

◎若し用事あり面會するを得ざる際には來客に對し如何心得然るべきにや。

△客の挨拶に應じて、婢僕或は子女の取繼の爲め戶口に出で行く折、豫め主婦已むなき故障あり、面會叶はざる旨を申し含め、之を來客に致さしむ可し。

◎一時に數多の來客あるときは如何心得然るべきにや。

△滿前の來客悉く主婦の疎略を感せざる樣誰れ彼れ新知舊知の差別なく、最も公平に取り持つ可し。

◎特別の儀式或は重大の事柄に就て衆多の來賓を招待するときは如何心得然るべきにや。

△總て獨斷することなく、男子の補助を乞ひ、周到と嚴肅を保つに注意す可し。

◎催ふして客人を招待するに當り、偶々雨雪のふるときは如何心得然るべきにや。

△來客の送迎に召仕の者を差し出し、大傘を翳し參らせ、或は車馬の乘降を助け、手荷物等の持ち運びに任せしむ可し。

◎夜間の來客に對しては如何心得然るべきにや。

△凡そ衞生上に於て、夜分多量の飮食を爲すことは、健康に大なる害あり、左れば主婦の客に對するに於ても、餘り充分の飮食物を用意するは、徒らに金錢と勞力を費すのみならず、實際害あるも益なきを以て、寧ろ手輕き有合の菓子位にて、茶或は珈琲などを進め、代りに接待方に於て一層叮嚀懇切を盡し、談話に花を持たす如くす可し。

◎遠方より知人の來訪あるべき通知ありたる時は如何心得然るべきにや。

△通知ありたる豫定の日附に至れば、先づ其の行李鞄包など、自家に運搬せしむる爲め、豫め召仕の者を停車場或は道筋なる最寄の村口に派し置き、且つ又た自身も成るべく都合して、來着を途中に迎ふる如くすべし。

又た斯る珍客に對しては豫め逗留の準備を整へ定めたる一室を淸潔に掃除し且つ冬は最も暖なる所、夏は最も涼しき所を撰み、化粧臺には石鹸手拭、櫛、白粉、紅、香水、揚枝など總て化粧に

要する品を新調し、倘は又た剪刀、針、蠟燭、寸燐、硯、卷紙、筆、封筒など便利の品目を其の室に備へ付け、椽側には淸潔の器物に水を湛え、卓上には新刊の面白き讀物を備ふべし。

客の逗留中に於ては、成るべく近傍の名所、舊跡、其の他山水の勝景などを案内し、旅情のつれづれを慰め參らせ、知らず識らず客の歡情を發して、滯在の日子を緩ふする如く仕向く可し。

客立ち去らむとの申出ある折は、倘は多少の滯留を勸請すべく、而も愈々强ての儀ならば、出發の準備何くれとなく周旋し、客の携帶せんとする物品の、萬一も遺失なきことを心掛け、又た旅中食すべき品々を調製し、停車場まで同行するか、或は町村の出外れまで見送り、滊車ならば客の乘り込むまで附き添ひ、別に臨んで叮嚀に挨拶し、將來の健康を禱ると共に、復の面會を樂む旨を告ぐべし。

○○○○

(註に曰く)己れの欲せざる所を以て人に加ふる

は不義なり、無情なり、己れの好む所を以て則ち之を人に推すは忠恕なり、熱誠なり、今ま友正に遠方より來る之を禮遇款待するに當つてや、宜しく己れ外に出で丶他の慇懃なる接待を受け、内心愉快を感じたる時の如くすべし、苟も此心以て客を待つ獨り客其の者を喜ばしむるに止まらず自ら友誼の表示に於て、微志の遺憾なく酬ひられたるを思はゞ、己れ亦た胸裡清風萬斛其の樂眞に言ふべからざる者あらん、總じて輕薄は幸福の賊なり思はざるべけん哉。

(又た註に曰く) 主婦の務めは成るべく客人をして自由にして拘泥の煩なからしむるに在り、然らずんば寄寓の客をして將に宛も奴隷視さるゝの感を爲し、頗る不快に陷らんとす、俚諺にも人に七癖と云へり、例へば同じく人たるに於ても、或は天質の自然に依つて、或は境遇の感化に依つて、金殿玉樓に桂を焚き、玉を炊くの幻境を以て、野外芳草煙を吐く處、從容大櫟樹下に席して、一杯の溪水を啜るの眞吾に若かずとするあるが如く、強ち美食濃味を以てするも、或は客の却つて之を厭ひ寧ろ粗飯菜食の淡泊なるを取るなきを保せず、殊に人々氣質の異なるや、都人にして大に田舍の趣味を喜ぶあり、或は然らざるあり、田舍人にして大に都風を慕ふあり、或は然らざるあり、固より一律を以て規すべからず、左れば苟も主婦たる者最も先づ此間の消息を看取し、所謂る客人の自由を拘束せざるを以て最も重き條件とし、終始或は犯すなきやを顧慮し、成るべく客の嗜好を枉げしめず、趣味を失はしめざるを努むべし、今ま一例を擧げて云へば、前項にも記載を終たる如く客の旅情を慰めん爲め、名所古跡を案内するは主人役としての務より見れば頗る親切の思付なるも、若し其の當の客人にして山水煙霞の趣味を解せずんば、朝夕靈苑勝地に案内し、自ら待遇の良法なりと思惟するも客に於ては、徒らに疲勞を増し、迷惑を感ずるの結果を來すに過ぎず、凡そ此類一に

して足らず、左れば斯く〳〵の物式は此人の餘り好む所にあらじと豫側しつゝ朦朧氣にも之を勸め誘は實に智慧なき業に屬すれば先づ輕く氣を引き見る位は兎も角大抵は客より所望あつて然る後案内手引するこそ寧ろ策の得たる者と爲すべし。

冬の話（下）

清水橘村

冬の使命は一體何であらう？、冬の特性は一體何であらう？、間逆に花葉を咀ひ、草木を枯らし、天地を死灰の境に陷らせて、我獨り喜ぶのが、天より受けた冬の使命ではあるまい、否人を泣かしめ、人を狂せしめ、人を絶望の淵に投せしめて、吾獨り樂しむのが、天より受けた冬の特性ではあるまい、まして春は植物發芽して、戀愛の保護者たり、夏は繁成して安樂の同伴者たり、秋は收穫して豐饒の保姆たる時に於て、冬も亦夫れ相應の天職が無くてはならぬ譯だ、ソーゼーは冬を愛する詩人で「十二月の初め」と題する詩中にも「余は御身を愛すおゝ冬よ」と、春の野も面白く、夏の川も面白く、秋の山も面白いけれど。

And pleasant to the sobered soul
The silence of the wintry soul
When Nature shrouds herself entraned
In deep tanguility

寂滅靜和、萬物の休息こそ、是れ實に冬本來の性質で、又天賦の使命ではあるまいか、頭に紫紅の花も冠らず、身に黄綠の衣も纏はず、玄白の布、何の光彩も無いけれど、天地淸高の趣を極めて、枯骨鏗然寒天雲凍り、嚴地動かず、睡るが如く默々禪定の三昧に入り、常に寂として聲を發せぬ代り、時として天飈浩々として去來する夜半、密かに出て冬の姿を窺ふと、神骨稜々たる老仙の、白鶴に駕する趣があつて存するので、冬はまこと聖者の如き面影があ

ると思ふと、一面には又優美な姿を以て吾人の前に現はれるので、吾人はいよ〳〵崇敬の念を加へる。冬の自然の壯嚴なのも幽艶なのも雪霜の仕業に外ならない、見給へ、嚴霜積雪の神腕は、一夜の中に此の天地を變換させて、冬枯の寥々たるものが白銀殿の莊々たるものになり、落葉朽葉の焦茶色が晨に銀色の水を引く、いざ次に雪霜の物語をして冬の使命を果さうと思ふ。

嚴霜烈日と云ふが如く、霜の嚴しい朝は多く快晴になるものだ、然し結霜が朝日の光に烈射されて融解し、盛んに蒸發する時若し寒風が吹き拂つて了ふ事があれば、之れを「霜揚げ」と云つて急に曇つたり、又雨が降つたりする、これは重に霜の强い地方に現はれる現象で、我國に於ては東山道諸國及び瀨戸内沿岸各地に行なはれる、而してこの霜の最も淸美なのは、朝日に對せし時の光景で、田も畑も一白凜乎として高潔な裝飾を爲せる時、金色の光が閃々一點の翳もなく、東の森に表はれてくると、蘆花子が「霜は皎々晶々として表に白光を放ち、隱に紫の影を落し、人家も、藪も、田の中に積みし稻塚も、乃至寸ばかり地より起てるわら屑も、凡て日に向ひて白く日に背いて紫に、眼の至る所、一望所として白光紫影ならざるはなく、紫影の中霜又隱々として見るべし、地は凡て紫水晶中の塊となりぬ」る趣は、冬日早朝の最も興味深き景象であつて、田舍では「殘月に汁の香高き在所哉」の感あり、大根は至る所に白い素肌を現はして、霜と其美を爭つて居る。

霜は植物に害を與へるけれど、雪は却て利益があるので、農家に取つて雪は大切な保護者である、全體霜の生ずる理由は、水蒸氣が露と凝集する時に當つて、其れよりも一層强い寒氣＝凡そ攝氏六度以下の夜に會ふと、露は凝集するに從ひ結晶して霜と變ずるのだ、雪も亦水蒸氣が大氣中に於て凝固する時、大氣の狀態と凝固の模樣とに依て、或は霰となり、霙となり、雹となり、雪となつて降つてくるのである。夫れで雪は何故に農家の保護者であるかと云ふ

に、雪は地に降りると嚴重に植物を擁護して寒氣に傷ませない樣にし、陽春の候に向つて能く發育させるからで、是れ雪は不導體であるが故に、地温の逃散を防ぐからで、積雪の底にあつた植物は、春になると寒氣に敗けないで居たものだから、勢ひ盛んに發育して良好な實を結ぶ、がこれに反して風の爲めに雪を拂はれた土地、又は降雪の少ない地方などは地盤が固く凍つて、植物を害する所から其發生が遲くなり、不結果な果を結ぶやうになる、麥作に雪が効用あるのも全く是れが爲めだし、雪間から早くも若草の芽を吐くのも又これが爲めで、雪を豐年の兆とするのは決して理れない事ではない。

雪の結晶は實に美麗なる六角形をなして、中心から六方に突出して居る、昔から雪の輪の六出形であるのを見ても知れるし、又別に六出花など云ふ名を與へ「六出花中五出花」など稱して居る。

奥山の菅の根しぬきふる雪の
けなばをしけん雨な降りそね(大伴公)

雪は冬の自然の花である。

雪は純白に見えるから、物の白いのを雪に擬へるけれど、雪は其實無色透明なもので、決して純白でないので、而も其純白に見ゆる理由は、雪の結晶が疎鬆である所から、其間に空氣が含まれて、光線反射作用である樣に白く視ゆるのである。

冬の愛孃なる雪姫は、實に絶高なる妙手を以て、此の寂寞たる天上地下を裝飾するに、玉珠の彫刻を以てする、見給へ、深夜更々として人眠り、自然も亦靜寂の境に立かへる時、雪姫は獨り眼覺めて雲の彼方の殿を立いで、清しき明眸に暫く下界の暗を眺めながら、霜や木枯の爲め染め穢された此世の塵を淨めんとて、まづ大空に冷たき風を吹度らせ、やがて白銀の花を撒きちらすと、

Retiring as he were not.
leaues. When the sun appears, astonished Art.
Io mimic in slow structunres, stone by stone,
Built in an age. the mad wind nightwork.
The frolic architecture of the snow.

世界は忽ち色相を變じて、何れも淨白な聖殿に化し去つた、原野の千草、森蔭の落葉、今は何處にかくれたのか、遂に昨日の寂々たる光景でない、されば枕の草紙にも「雪のいと高くはあらで、薄らかに降りたるなど、いとこそをかしけれ」とあり、源氏物語にも「時につけ人の心をうつすめる、花紅葉の盛りよりも、冬の夜のすめる月に、雪の光りあひたる空こそ、あやしう色なきもの丶身にしみて、此世の外にとまで思ひなされ、面白さも殘らぬ折なれ、すさまじきためしに言ひおきけむ、人の心の淺さよとてみすまきあげさせ給ふ」とある、清少納言、紫式部など云へる人達は、雪の日の美しく又樂しきことを讃へて居るけれど、其他多くの歌人などは、西行法師の樣に「雪の降る日は寒うこそあれ」など丶唯折からの感情を漏して居る斗り。今又、冬の愛孃を雪とする時は、氷は冬の寵兒で、頗る淡白な寧ろ頑固な童子である。

で此の頑固な童子は、嚴冬の候となると、愉快さうに、軒端から、池邊から、河から瀧から、總て水のある場所は、處嫌はず飛び回つて、或は白銀の球を連ね、或は玻璃の床を布き、或は瑪瑙の衣を展べ、天の光榮を迎へると同時に、地の尊嚴を加へて居る雪でも氷でも、晴れ渡つた空に白日が懸つて、光輝が隈なく來射す時は、最美の極點に達するもので、其内にも雪後の晴れた朝などは特に愉快に清淨なものである。

山川は氷にけらしをし鳥の
羽風のさなみ音もせぬまで（顯仲）

氷は日の神と雪姫との間に生れた愛兒で、到て頑固であるけれど、然も中々美術思想に富んで居て、天晴一個の建築家とも云つて宜からうと思ふ。

No mortal builder's most rare device could
maech thes Winter—Pace of ice.

靜寂は冬本來の性質であるけれど、其は唯外觀ばかりのものであつて、靜寂の懷には汪然たる大活動の力を含んで居る、是れ丁度山は靜寂の形象を持て

横たはつて居るけれど、其の内部には烈々たる大火力を藏して居るもの丶これ靜中動ありで、冬も寂寥として居るかと思ふと、時に囂然として起り、飈然として行き、忽然として元の靜寂に歸つて了ふ、山の活動するは火山力など其の重なる原因であるけれど、冬の活動するのは風がその主因であるのだ。

かく冬の研究を積んで見ると、唯その愛すべきを知つて厭ふべきを識らない、人若し、春の發芽の準備をせんとならば、靜和なる境地に遊ばんとせるならば、冬の天地に休息し、冬の天地に入り玉へ、冬は獨り外界の清境のみならず、我等が靈覺の聖者として、眼前咫尺の間に現はる丶であらう。

Cone, Winter, then, and spred thy robe of
white.
Above the desolatin of this scene;
And when the sun with gems shall make it
bright or when it snowy folds by midnight
sheen—are silvered o'er with a serener light.
Well cease to sigh for Summers living green.(完)

女生と日記

記者

生きた人間には、生きた日記を備へて置く必要がある。生きた日記といふと少々耳に障る様にも聞えるが、それは死んだ日記でないといふことを表はす爲めに、こんな名を附けたのである。然らば死んだ日記とはどんなものであるか、他でもない、五日前のことや、十日の前のことを、思ひ出し次第に一寸書き附て置くはまだしも、一月も二月も、悪くすると半年も一年も、そのまゝ擲ちやつて置いて、更に顧みない日記は、死んだ日記といふべきである。

そこで生きた人間は、其の日の事は、其日に書留めて置かれねばならぬ。世の進歩するに随つて、社會の事々物々みな複雑になつて來るから、一身上の出來事も、思想も、雑駁になつて限りある記憶力でもつて、限りない種々の事柄を覺えて居るといふことは出來ないから、必らず日記にかき付けて置くことが必要となる。その日記は則ち生きた日記といふべしだ。

それ故日記を附けるといふ習慣は、なる丈け吾國一般に及ぼしたいもので、それには成るべく幼少の時から此の習慣を養ふのが肝要なことである。一日の最終の仕事は日記をつけることといふ様に、チヤンと極めて置くことになつたら實に結構である。

白い紙を綴ぢて置いても、普通のノート、ブックを用ゐても、日記をつける上から見れば、敢て差支へはないが、たゞの白い紙やノート、ブックでは、餘程忍耐力のある人でなければ、一月か二月た

つと、廢してしまうが定である。それは全く日記として尊重する觀念が生じないのと、一つには日記としての趣味が全たく無いからであらう。日記帳は矢張日記と題した一定の書籍で、凡ての秩序が整然として居るのと、又其の内容は、趣味に富んで居て、筆を執つて記すと共に、眼に見て面白味が起る様に作られなければならぬ。然ういふ風に作られた日記に對しては、尊ぶといふ心と、樂むといふ情が兩ながら起るから先づ永續する。

その樂むといふことも、野卑なる娛樂であつては、前に陳べた尊ぶといふ觀念が乏しくなつて、日記はたゞ一時の戲れ事のやうになつてしまうから、淸潔なる娛樂の趣味を有するものでなければならぬ。

諸方の書林で、年々發兌する日記類の中には、意匠も趣巧もなかなか善く出來て居るのがあるが、みな男子を目的として作つたもので、タトヒ男女兩性に共通することができるとしても、先づ重きを男子の方に置いてあるから、女子の日記としては不適當の個處が多い。則ち男らしい日記帳のみで、女らしいものが皆目ない。

ところが一家の整理をして行く上にも、趣味ある家庭を作る上にも、女生の日記は、甚だ必要である。學校生活をして居る女學生には、尙更ら其日の種々の事を記して置く必要があつて、また將來妻君となり、主婦となりたる後日記をおろそかにしない習慣を造る爲めにも、是非日記を備えればならぬのである。

女生日記は以上の趣意で、編纂したるのである。日々の欄に古今東西の金言、俚諺、詩歌などで女子の戒めともなり樂ともなるものが記してあるから、必ず一日に一つ宛それを記臆することにすれば一年には三百六十五の、名言名歌を記臆して、處世の戒めとすることも、詠歌作文の材料に供することも出來るのである。それから日曜日の欄には英和對譯の欄を設けて、泰西名家の名句名言をそのまに一週間に一つ宛記臆することにしてある、又た每月の初には、氣節、行事、遊樂、料理のことは勿論、フランクリンの十二訓や、楠公の家訓や、新舊女大學や、白川樂翁の座右の銘などゝいふものを出してある。これは一月に一つ宛覺える仕組である。故に編者の希望の如くに、此の日記を利用したならば、女性にとりて趣味と實益とのあることは、却つて他の片々たる册子よりも勝つて居ると思ふ故に予は手前味噌の御手褒めといはれても、凡ての女性に向つて、必ず女生日記を備えられむことを勸むる。

又た日記の書き方は勿論人により、事によりて一樣には行かぬが、こゝに何人にも共通すべきは、思ふたこと、行ふた事、出來た事を少しも遠慮なく、表裏なく、躊躇せずに記すことである。非を掩ふたり、過を飾つたりするのは、決して日記の本旨でない。事實をありのまゝに記して、失錯や、過誤などのあつたときにも、露骨にかくのは、一つの勇氣であつて、將來の戒めともなるのである。英京倫敦に餘り素性のよくない人があつて、或る犯罪の爲に裁判所に引かれたら、此人は日記は善事も惡事も、非行も失錯も、少しも包まずに一々記してあつたが、その犯罪の事柄のみが日記の中に見へないので、日記が證據となつて、其の犯罪は無根と斷定されて無罪となつたといふ話がある。これは日記を正直につけた御蔭で、助けら

れたといふてもよろしからう。表裏なく記して置けば、必らず其人の爲になることは、此例でも分る。惡人でさへ斯うであれば、況して善人の爲にはなほ十分になる筈であらう。

最後に東京日々新聞の女生日記に對する批評が、よく編者の心を得てあるから、こゝに紹介して置きまする。

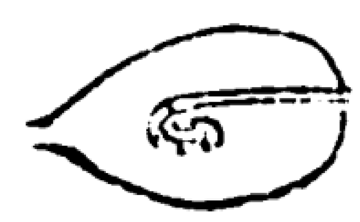
◎東京日々新聞評　體裁の優美なる意匠の巧妙なる一見女學生の好日記なるを認むるものは此日記なり卷中日々の欄外に天氣と寒暖とを記入するの場所を設け古今東西の金言、俚諺、詩歌、英和對譯等にして女子の心得となるべき材料を挿入し且つ女學校案内、女子職業案内等を附記し其實益と興味とを兼ね供へたるは在來の日記と大に其選を異にする所貴婦人令孃、女學生等新年第一に机上に飾らるべきは恐くは此日記ならんか

刺繡

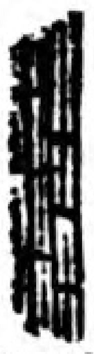
上村百世子

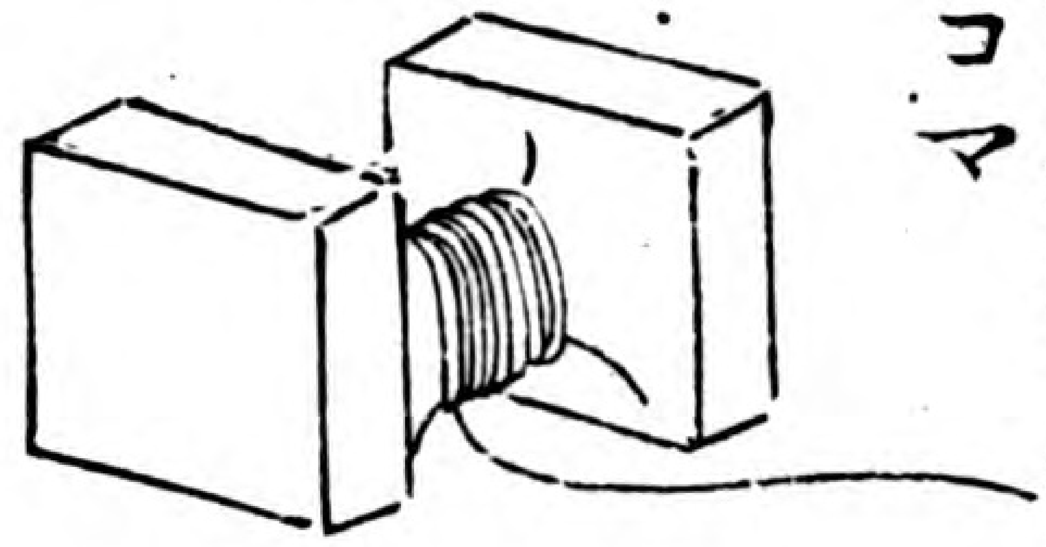
金糸縫ひの練習

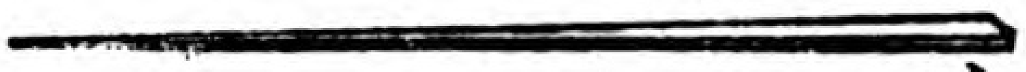
金糸縫ひは、やはり模樣に用ひますもので、一寸必要で無い樣に思れますけれども、極めて必要で御座いまして、縫ひますもの丶進むにつれて、どうしても用ひなければ出來ぬ樣に成ります、又昔から儀式時には是非用ひますから、まづ初め必要の縫ひ方から申ます、縫ひます道具は、前に申ましたメウチを用ひます、かま糸コマ金糸の三種で有りまして、かま糸は赤又は黄色を用ひます、金糸はまがひの四掛、コマは圖に示した如き形の物で、有りまして、二個にて用ひまして此二つに金糸を卷きます、之は太の重さを用ひます針は細糸八を用ひます、縫ひます形は梅の花で有りますから、別に此の度は其形はのせませんけれども、前と同じ梅花の形をやはり布片に附けまして、(イ)瓣より初めます、初にかま糸をよるのです、よりまするには一すが合せ、或は二すが合せて致します、右よりと申しまして、右の手を下に向けて、五度程二條共より、次に右を上に上げて五度或は六度いたしまして、すこし糸を前に引き張て



後切ります、之は其よりのかへらぬ爲なので、御座います、やはり針留をし、中眞と思ふ所に一つのコマに卷きたる糸を取り其先きをとじまして、次に外のコマの金糸をとじたる糸と共に

其先きをとじまして、おまりとじ目の長くない樣に
とじ目とじめの異らぬ樣に二本の金糸を共にとじ
ながら、瓣の形に成るやうに、
圖に示したる如く縫ひまして、
次の瓣に轉ります、之は(イ)瓣
を縫ひました糸がつゞきますか
ら、之も其中眞までとじて參り
まして、前の通り卷く樣な形に
くる〳〵縫ひとじます、梅の瓣
が細く成て居りますから、糸の
とじめは其曲がる所をとじます
順次に前の如くいたしまして、
縫ひ―終ります、終りの金糸は二
分程に切りまして、引込と云ひ
まして太き糸を二重にて、終り
のとじめの所に上より針を下に
通し、其糸の輪に切りました金糸を入れ、下より引
きこむので御座います、とじ目は圖の如く


コマ


メウチ


金糸縫ひ


一度目


金糸縫ひ


金糸初め

前にとじました所の、とじ目の中程にとじめを出し
ていたします、即ちたがひちがひにいたします、櫻花
は之を花瓣の細き方よりと
じ初め、其形に從ひて切目の
所まで致しまして、金糸二本をと
じるだけの所をのけて、細き方ま
で致しまして、前にとじたる糸に
ならべて、中眞までいたします、
それを前にのこして有る切目の所
に向けて、終りまでとじ、順次に
五瓣共致します、初めの中は其と
じ目が曲るから、成だけ注意しな
ければ、形のくづれるものです。
メウチは糸の曲つたり角を直した
り致します時に用ひます。

前號造花とあるは刺繡の間違にて太田とめ子は上
村百世子なり茲に記して粗漏を謝す

雜録

家庭革新演說

記者

去月十四日、神田青年會館に於て催されたる家庭革新演說會には渡邊國武、下田歌子、田川大吉郎の三氏が、女子及び家庭問題に付き有益なる演說ありき、其中下田歌子女史の演說筆記は次號論叢の中に掲載する事とし、今此處には渡邊、田川兩氏の演說に付き其梗概を摘錄す。

渡邊國武子演說の梗概

◎當日渡邊子の演說は、僅か一時間足らずの間で、論旨も餘まり多端に渉らなかつたが、流石は渡邊子の

演說丈けあつて、議論は決して淺薄でなく、大ひに耳を傾ぐるの價値があつた、試みに其中の數節を摘んで見れば、

◎歐米の文明は世界第一である、此文明を吸收して、國運の進捗を計るは刻下の大急務で、彼の日清戰役に、日本が勝ち支那が敗ぶれたのは、一は巧みに早く文明を吸收し、他は文明を吸收する事が遲鈍であつたからである、然るに日本の文明の吸收し方は、餘まり客觀的であつて、少しも之を精神的に翫味するの　が無い、是は實に大缺點である。

◎文明を吸收するには、敎育が其本となるのだが、敎育にも家庭敎育、學校敎育、社會敎育の區別がある、其中であらゆる敎育の基礎となるのは、家庭敎育であつて、學校敎育も社會敎育も、之が支配を受けねばならぬ、ダカラ家庭の革新と云ふ事は、今日の最大急務で、之に依つて始めて、歐米の文明を吸收する事が出來るのである、

◎然るに家庭の主宰者となるものは婦人である、故

に家庭の革新をなすに付ては、女子敎育と云ふ事が又必要を感じて來る。

◎學者の說に依れば、人間と云ふものは嫉妬心もあり猜疑心もあつて、中々調和の出來難い厄介物である、然るに之を調和するに付て二つの方法がある、其一は先づ第一に最も嫉妬と猜疑の少い親子夫婦の間より調和して行て終に之を全社會に及ぼすと云ふ事で、支那の儒敎が即ち其れである。

◎是は餘まりに秩序が立ち過ぎ、階級が嚴重であるから、其弊や終ひに、父父たらずと雖ども、子子たらずんばあらずと云ふやうになり、又支那あたりでは、古來子が親の喪に在れば、官を捨て丶鄕に歸へるなどの事がある、是等は殆んど常識の外に逸して居る。

◎他の一は博愛、即ち互ひに相愛すると云ふ事が、社會調和の方法で、今日歐羅巴文明の基礎が、即ち此上に打ち立てられたのである。

◎ソコデ我國では、今日此の二つを合化して行く事が困難で、之を能く合同する事が出來れば、誠に結構だ。

◎家庭の革新と云ふ事に付ては、先づ其主宰者たる婦人諸君に望みがある、曰く、確乎不拔の主張あらしめよ、曰く確乎不拔の信念あらしめよ、唯だ是れ丈けである、家庭の主宰者たる婦人諸君にして、確乎不拔の主張と信念とが無い限りは、迚も家庭の革新は出來ないのである。

◎私は政治家であつて、宗敎には何等の關係も無いが、婦人に確乎不拔の精神を附與するのは宗敎に限ると思ひます、故に何宗でも構はない、婦人諸君は先づ宗敎によつて、其精神を修養する事が必要です。

田川大吉郞氏演說の梗概

◎田川氏の演題は家庭の立憲的組織とも云ふものであつて、氏は澤山の草稿をテーブルの上に繰り廣げ、熱心に說き去り說き來り、殆んど二時間有餘に涉る長演說を試みたが、其れでも尙は腹稿の三分の一も

演じ盡くさぬと云つて、時刻の薄暮に及んだを怨らんで居たのは、氏が如何に斯問題に熱心であるかゞ知らる丶、試みに三四節を摘録せんに。

◎我國は今立憲政體であるにも拘はらず、家庭は相變らず專制組織で絶へず暗黒世界である、元來、家庭を整理して、而して後社會に及ぶのが順序であるのに、事は反つて逆に行はれ、而して家庭の立憲制度の何時立つか、前途甚だ茫漠ある。

◎家庭に立憲的組織が行はれないから、あらゆる公衆團體にも秩序が立たず、亂暴狼籍を極むるのである、試みに帝國議會の紛擾を御覧なさい、あれ等は全く不規則の家庭の弊風が團體に及んだのです、故に憲政の美は、家庭に立憲的組織が行はれねば決して見る事が出來ません。

◎專制政治の時代には立憲政體を建設せんとて、身命を擲つて奔走した者は幾人もあつたが、今日家庭に立憲的組織を行はんと、奔走する者の無いのは、寧ろ不思議ではありませんか、而して事は前者よりも反つて困難です。

◎家庭の立憲的組織とは、先づ起きる時刻を定むる寢る時刻を定むる、食事、接客、散歩等凡べての事、皆な時刻を定めて行ひ、決して之を亂さず、起居動作一々疎漫に流れぬやうにするので、此事は主人必ず先づ之を勵行して、家庭に模範を示す事が必要で、之と同時に又婦人を束縛より解くと云ふ事を忘れてはならぬ。

◎婦人諸君に對しては又、別段の注文がある、無暗に泣く事を止めて貰はねばならぬ、衣裳の批評をする事をやめて貰はねばならぬ、之と同時に路を歩るくのは、モ少し活潑に歩いて貰らはねばならぬ、西洋の婦人を御覧なさい、男子と連立つて散歩をするのに、ドンナ坂道に掛つても、男兒に少しも後くれは取りませぬ、日本婦人で、男兒と連れ立つて能く歩るける人は極めて少ないやうです。

◎私は又婦人諸君に内職を勸めます、内職は神聖なもので、決して賤しむ可き者ではありません、内

職をすれば、金錢の有難味が知れます、自分が腕で稼ぎ出した金で、物を買ふのは餘程趣味のあるものです。

◎私は又婦人がたが買物をなさるのに、一々青物屋や肴屋を呼付けて、お求めになるのが不賛成です、コンナ物は自分から出掛けて行て買へば、廉すい値段で好い代呂物が買はれます、西洋の婦人が道を歩るくのに、能く籠を下げて行くのを見ませう、アレは多く買物籠で、伊達でも何でもありません、アノ籠を下げて道を歩るきながら、菓物なり、野菜なり、肉類なり、自分の好む所の物を買ひ取り、之を持歸つて食卓に上ぼすなどは、趣味のある仕事で、あながち經濟計りから割り出されたものでもありません。

◎之を要するに、家庭に立憲的組織の行はれない間はドンナに他の事が進歩しても、決して之を以つて文明社會と稱する事は來來ないのです。

庭の落葉

紅松生

嘗て「青葉影」と題して、仙臺地方の風習を述べましたが、尚○衣食住に付て見聞した所を少々書いて見ます、乍併此等を精記することは出來ないから、只大略に止めておきます。

○衣服、男女老幼貴賤によつて、千差萬別であるが、大體に於て婦人は派手を好み、特に中等以下の社會には藝妓風が流行して居ります、先づ夏は縮或は木綿形の類、冬二子織唐綫紡績緫の類を用ひます、中以下の婦人で勞働をするものは、幅の狭い帯をぐるぐる卷にして、其端を一寸挿んでおく、至極簡單なものです、冬時小兒を負う時には、衣服の下に小兒を入れて、母の膚と小兒の衣服とが直接するのです、それから重襲をする時には、大抵浴衣を下着として、上着の裾を端折つて居る、睡眠の際は春夏秋冬の區別なく、褌一つの丸裸體で、蒲團の中へ滑り

込むのです、貴婦人方はいかゞですか、土地の風習だから、全く無いとは斷言致しかねます、此風習は肥後の熊本にも有つたやうに覺へて居ります。

○頭髮、仙臺案内と云ふ小冊子に次の如く書いてあります。

當今婦人の態は種々樣々にして、島田時過ぎて、兵庫も亦昨日の夕なるあり、唐人髷あり、結髮あり、圓髷あり、無性に張り出す燈籠髮あり、或は時流を學んで淡粧眉を濃やかにし歯を白うし前髮を剔り短く額に垂れて束髮なるあり、その淡く蛾眉を掃うて、濃抹の粉脂を假らざる姿容、少しく見る所あれども、惜むらくはその容顏の美虢國婦人の如きものを見ず、其鳥の町のお多福然たるを如何せんや。

併し目下の所では銀杏返か桃割が最も多く、これに次で島田髷で、束髮は殆んど無いと云つて宜しい位であります。

○○食物、一般に辛味が勝つてゐまして、初めて仙臺固有の料理を食つた小生は、咽喉に微痛を感じました、これも世間知らずの頑固者流の料理で、近頃は漸々都の味が輸入せられたと、或新聞紙に書いてありました、當地で有名なのは所謂仙臺眞黒、これは讀者疾くに承知のことである、食物のことは餘り申すまいが、甚だ恐れ入つたのは河蝦です、この蝦は四五分のもので、野川の濁りの中に蛭などゝ同居してゐます、四國地方では魚釣の餌に用ひるのみですが、當地方にはこれを食用に供します、農夫などは盛に捕へて盛に食つて居る、往々蛭を一緒に食つて下痢を催すこともあります、こんな風を觀ると原人時代の感がするが、併し佛國の巴里ッ子が蛙蝸牛を食し、獨乙の土人が麵包に土を附けて食つたり、諾威士人が木屑製の麵包を用ひて居るのを考へて見れば、別に恐れ入ることもありますまい、それから此地方人は一般に大食癖があります、これは無智文盲の女房連のみならず、立派に敎育のある女學生達が、これを敢てするのであります、これに原因が有

らうと思ふ、東北地方寒氣凛烈だから、衣服住所の如き外部の防寒に滿足する能はず、辛いものを澤山食つて、内部からも體温を熾にする必要があるのです、又無頓着無作法もその一原因となつてゐるかもしれませぬ。

○住居、諸官衙諸會社の莊麗な建築は別として通常市民の家屋には、瓦葺も少なくはないが草葺も隨分多いやうに思はれる、從つて二階作は少ない方です、若し夫れ市外向山に登つて下瞰すると、小生の言の虚ならざることがわかる、而して家屋よりも林や田畝が多いやうに思はれて、荒涼寂寞の氣が充溢してをります。

然れ共宏大な建築は決して少なくない、序にその重なるものを申します、青葉城は慶長の昔政宗の築いたもので、宏大なものであつたそうなが、今日は燒失したから、陳述の限でない、市の西南に經峰と云ふ丘があつて、貞山(政宗)義山(忠宗)雄山(綱宗)三公の廟がある、就中貞山公のが一番立派で瑞鳳殿と云ふ、貞山公の衣冠束帶の像が獨眼を見張つて端座してをる、その宮殿廊廟の富麗輪奐は、日光廟に亞ぐと云ふことである、市の西北に大崎八幡宮がある慶長七年政宗の建立で結構莊麗丹碧光彩の美を極め、特にその彫刻は有名なる左手甚五郎の疎腕に成つたと云ふので著はれてをる、先般文科大學史料編纂所からも、その緣起と寫眞を徵されたと云ふ、市の東北には東照神廟がある、これは忠宗の建立で、慶安三年から承應三年まで、約五年を閲して



落成した建築で、華表の石材の如は、備前國から遙に取寄せたと刻してある、結構は宏壯と云ふではないが、珍重すべき建築であると、或美術家が小生に語りました、市の東部には菅神廟と釋迦堂とが脊合に建つてをるが。特筆すべきものでない、只矮小な鐘樓は珍とすべきものだと或人が云つたが、小生にはわかりませぬ、市の東南に國分寺がある、天平九年の建立で、金光明四天王護國寺と云ふたのは、讀者の御承知のことであらう、その後鎮守府將軍藤原秀衡佛敎に歸依して、寺觀僧房を再興し、長堂廻廊を設けて、善美を極めたと傳へてをるが、今は廢蕪して昔の偉大な名殘を止めて居るに過ぎない、その後方の松林には古瓦が殘つて居て、好事者が硯としてをります、それからモ一つ述ぶべきことがあります、市の殆んど中央に芭蕉辻と云ふ所がある、その四角の家屋が古雅なものです、由來は精しく知らないが、兎に角政宗時代の建築で、二階の屋根が二重になつて、第一層には蛟龍浪に騰り、將に九天に登らうとしてをる、第二層には猛獅嵎に據つて、谿谷を睥睨して居る、而して第三層には狡兎疾走して鳥渡後を顧みて居る像、皆瓦製で屋根の裝飾になつてゐるのです、惜い哉西北角の一宇の外は、皆回祿の災にかゝつて亡びました、乍併東北角は七十七銀行で、洋風の三層樓が巍峩として聳へ、尖塔高く空に冲してをる、仙臺市第一の壯觀でせう、市外附近には、先づ松島の瑞巖寺、これは過般「松影波光」中に陳べましたが、何しろ紀州熊野の良材を撰び、名工百三十人の手に成つたもので、玉座の如きは實見した人でなければ談話はできぬ、但無智の大工者流が無意味に修繕するのは、忌々しき極みである、その南方の觀瀾亭は、伊達家の觀月の別業で、元來豐太閤が材木を朝鮮に求めて、桃山に建てたものを政宗に賜ひ、綱村に至りて此地に移したもので、堅牢なものであります

如上の莊大な建築に反して、横穴と申す單純な住居もあつて、松島地方には非常に多い、現に仙臺市外

廣瀬川の岸にも、蝦夷穴と稱するものがある、勿論日高見國の古地であるから、蝦夷人穴居の遺跡と想像ができるが、現今の横穴は悉く後世の僞物であるには失望しました、即ち百姓共の物置なのです、乍併よく探したなら眞正の横穴が發見せられるでせう。

水戸の婦人（三）

東臺小隱

白井伊豆の母

白井伊豆致仕して廉山と云、御奉行勤ける時穿鑿上手にて如何なる强氣の罪人にても問落さぬ事はなかりしと評判せり、廉山の母此事を聞て不審に思はれ廉山を教訓しけるは、大勢の中には無失の者も責らるゝ苦しさにあらぬ事を言出すこともあるべし、穿鑿上手に任せ嚴く問落す事はあしく候、能々心を用ひ問落す事に一偏せず、義理を以て詮議すべしといと懇に申されければ廉山答て、御尤至極には候へ共罪ある者も樣々陳すること罪人の定りに御座候、如何なる者か罪なきを罪ありと申すべきや、御苦勞なされまじく候とて更に聞入ざる樣子なりければ、母人つく〴〵思案せられしが、無罪の者を刑する事其者の不便は勿論、政道に於てすまざる事なりとて、廉山の常に帶する脇指の小柄を隱されけるに、廉山日々出し入さする小童に此罪疑ひなしとて、强く詮議せしが言はざりければ、縛りたゝきて責問れけり小童苦しみに堪かね、殊に辯才を以て問れける故言開く事能はず、遂に寃枉に落入ける時、母人隱し置たる小柄を出して申されけるは、自ら先達て穿鑿の事意見しけれども用ひざる故詮方なく、小童に難儀を掛る事氣の毒なれども、御政道の御爲、家の爲とぞんじて我等小柄を隱せしなり、以後は是にさとりて嚴敷詮議せず。義理を以て問落すべし、たとひ問落すとも、又言葉和かに責問はるゝ悲しさになき事を言たるにはなきやと尋ね窮めて其刑を定る樣にな

すべしと懇に示教ありければ、廉山恐懼甚だしく過を謝し、以來は急度愼み申すべくと對へられ、小僧には厚く賜物せしとかや。

其後坂戸村に於て夜中物取にて人を切殺せし事あり此事申し出るに同村に住居する浪人士を疑ひ、是を捕へ廉山詮議ありしに、始は知ざる事なりと言しが、刀にのりのあるを、疑心甚敷問詰られ、浪士彼是いへども言開く事出來ず無實ながら切殺しに落入けり、廉山母人の示教を思ひ出し次の日浪士を呼出し白狀せし通相違なきや、又責問れ言開く事能はず、無實の事を申すにてはなきやといと和らかに尋ねられしかば、實は存せぬ事ながら御疑心深く所詮遁れ難く存じ白狀せしにて候、此間中申候通り刀ののりは犬を切候に相違御座なく候、其印には橋下に犬の死骸あるべしと云、依て是を見せしむるに果て犬の死骸ありければ處刑は暫くひかへらる、程なく眞賊を捕得て浪士は牢を出され、眞賊を刑に行はれけるとかや。

當時の風治獄の吏は峻酷なるを以て能と爲し、種種の器械を用ひて拷掠百端、首服するにあらざれば止まず、之が爲め枉て誣服なし寃を含んで刑に死する者其幾何なるを知らず、而も世を擧げて之を怪しむ者なかりしに、廉山の母其非理無道にして國の爲め家の爲め不利不祥なるを悟り、其子を教誨して終に能く飜然改悛せしむ、其の識の高き慮の深き感ずるに餘りあり、其性氏を逸せしこと誠に惜むべきなり。

丹羽の妻貉を叱る

丹羽五郎作の長屋持に五兵衞と云者あり、或夜五郎作は御城の當番にて、五郎作の妻女留守してありしに、屋敷の裏にて五兵衞〳〵と呼者あり、妻女怪敷思ひ、夫の枕刀を帶し手雪燈を持行て見るに、居宅をさる事十七八間隔て竹山の傍に貉居たり、婦人是を見て甚怒り、夫の御番留主とてあなどるか惡き奴と聲をかくれば忽ちにげ失けるとかや。

此の五郎作は居合劍術の達人にて良公殊の外御賞

美ありし者のよしなれば、妻女も自然其薫陶を受け、勇氣壯んなりしと見ゆ。

刀を佩び夜廻りをなす

白石長右衞門の妻は湊村法橋東川柳庵の娘なり、夫の御番留主には指添を帶し夜廻りをせしとかや、或夜居宅より二十間許隔て三方竹山の中に藏あり、此處へ行けるに、向より人來る音すればぬき足にて詰よせ、一間計り隔て、何者なるやと聲をかくれば聲を聞知り、御新造さまなるやと言ふ、當方にも其聲に覺えあれば、勝衞門なるや扨々あぶなき事なり挨拶に依て拔付る所なりといへば、私も今少しにて棒にて打倒し、候所にて候私共は每夜廻り申候、御前さまも御廻りなされ候やと問ふ。我等は旦那の御番留主に計り廻るなりと答へたりとかや、此勝衞門は野々上三十三ケ邑一番といはれし角力取なるを、のう番頭と云くのに抱へ置たるなりと。夫の不在に非常を警しめ不逞の徒の侵入に逢はゞ一刀に兩斷せんとす、其氣象用意兩つながら備はれり、方今頻りに尙武教育を說けども實際能く斯の如き婦女ありや否や。

女子風俗

寶曆の頃迄は諸士の妻女は菅笠に紅色の絹などくけ緒にしてかぶりたりとかや、明和八年卯四月御目付より達に、近年靑紙張の日傘相用候族も有之所御城下右等の品相用候儀は見所も如何敷候間以來不相用樣可被相心得事、但婦人醫師社人出家等は不苦候事、是を以て見るに明和の頃より諸士の妻日傘をさせしと見へたり、鄕中にて百姓の女房などは寬政の頃よりさしたる由。

水野外記の妻娶入の時持來れる胡麻の油を入る德利あり二升少餘入る、胡麻油は男女ともに付しと見えたり、此時簞笥は持ず長持葛籠持來る、或は番袋とて夜具を入る大袋ありとかや、髮へ煉油付る事元祿の末か寶永の初よりなるべしと云（以上家庭舊聞）

是等に就て當時風俗の質素なりし事を察すべきなり、夫れ驕奢の弊は流れて柔弱となり易く質素な

る者に勇敢なるが多し、婦女子の概して剛毅なりし事是等の美風に起因せしを知るべし。

古來の兒童遊戲（續き）

實相寺一二三

（十二）　箍廻し　輪ころがし

御維新前から江戸近在の小兒が、樽の箍を竹の枝などと丁字形したるにて地上を押しまろばして行く戲があつた「たが廻したがまはし始めけむ」など、言つた人もある、今日では西洋風に鐵で作つた輪を用ゐるのである。

（十三）　一の膳二の膳

童兒の遊戲に「一の膳二の膳いや〳〵」と言ふ、それから段々數へて十の膳まで言ひ立つる事がある、膳は本膳二の膳三の膳をなかに、四の膳五の膳などと童兒のたはいの無き處から言ふのかと思つて居たが、甲陽軍鑑の料理の事を書いた圖に十膳あつたのであつた、此事は屠龍工隨筆に一寸見えて居た事で今日此遊びは見受けぬよしである。

（十四）　馬のり

榮花物語ゆふしでの卷に

大臣（堀川左大臣顯光）も消え入らぬばかりにて伏し給へるにや、一の宮（顯光の御女に一條院の女御にて、其御子一の宮中務卿敦貞と言ふ）おはしまして、おとゞ起きよ〳〵馬にせむと起し奉らせ給へばわれにもあらず起きあがり給ひて、高這ひして馬にのせたて、まつり給ひてありかせ給へば、一の宮まいより動かぬ馬かなとて、御扇してとく〳〵とうち奉らせ給へ、

など、見えて居るのが是である、今子供が一人の子供の兵古帶を後から握つて、其手の處に子供を載せて馬のりのやうにして行く戲もある、また羽織の後を押さへて後の子供の背に子供を乘せるのもある、いづれも馬のりの戲である、これ等の遊は幾組も馬を拵へて馬上の小兒を落そうと爭ふ事もある、言ひ

後れたが、江戸時代に江戸近在平井村邊の子供の遊びに、馬を逐ふ事がある、一人馬となるものが繩を以て首から首にかけて結び兩手に杖をつき馬の足のかたどりをする、一人が其綱を牽いて行くのであるそうな。

（十五）　土なぶり砂遊び

唐の太宗が「土城竹馬兒童之樂」と言つたのが是である。

法華經方便品には「乃至童子戯聚砂成佛塔如是諸人等皆已成佛道」とある。

北村季吟の獨吟百韵に、

まるをとり腹の機嫌をとりとりに
　おやしく泥をふむやおさない

と言ふ歌も見えて居る。

兒童の土遊び等に家を作る事は古くあつた事と見えて、鴨長明の方丈記にも、幼子の築土の影に小さき家作りて居たると言ふ記事が見えて居る。

砂に文字を書いた事は、古くは菅原道眞が筑紫に左遷せられて、彼地で兒童を相手に、砂上に字を書いて文字を敎へたと言ふ事である、今小兒が砂を手に握つて適宜に溢しながら、地上に繪やら字やら書きて是を砂文字と言ふのである。

（十六）　覆射　數あて

食物でも蟲でも魚でも器具でも筥に納め、又包み隱して置いて、此中のものは何かと聞くそれを占つてあてるのが覆射と言ふ戯である。

碁石や細螺を手にいくらか握つて何個握つてるとの問ひに、答へて其數をあてやうとするのである、碁石を物の數にした事は枕草紙に（村上天皇が女御芳子の古今集の歌誦んじつるや否やを試むるの段に）

其方おぼめかしからぬ人二三人ばかり召しいで、
碁石して數を置かせ給はむとて、きこえさせ給ひ
けむほどいかでめでたくをかしかりけむ　云々

と見えて居る。

（十七）　手々甲

手を組み顔を隱して手々甲と言つて子供をおどすの

である、土佐の國の手々甲は人をおどすのでは無い小兒が集つて互に手を組み合せて手の甲を互に打ちながら「向ひ河原でかわらけ燒は五皿六皿七皿八皿めにおくれてづてんどつさり、それこそ鬼よ、簑着笠着て來るものが鬼よ」と言ひながら、手の甲を打つのであるその終に當る者を鬼と定めるのである、考へて見ると皿數への化物の故事はこんな事から作られたのでもあろうこう言ふ話があるのだ。加藤左馬介嘉明が南京燒の皿を十枚秘藏して居つた、或時近く召仕つて居る者が其皿を誤つて取落して毀したから、主人の咎目を恐れて家に謹愼して居た、嘉明が之を聞いて其召使の者



を呼び出して過は誰しもある者である、苦しからぬ事である、破れ殘りの皿を持ち來れと命じて、自ら悉く打破つて言ふには、此皿がもし殘つて居つたら何時の年に何某か破つたなど丶、其者の名を言ふ事があろう、それはよくない事である、余は怒つてかくしたる次第では無いのであると言つて其後は一向器物を愛せられなかつたと言ふ事である。

（十八）　べかかう　（あかんべい）

大鏡の巻の五に「たかんなの皮を男のお指毎に入れて、目かかうして稚兒をおどせば、顔あかめてゆ丶しうおぢたるかた」とある、「たかんな」は筍の事

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

續々御注文多を以て期限に後れたる御申込者の意を諒し特に十二月廿五日迄に延期す

新按

明治三十七年

女生日記

本書は特に女學生の爲め編纂したる者にして古今東西の婦人に關する金言俚諺和歌等を日々の紙欄に掲上し且つ日曜日の欄には特に英和對譯の一項を挿入したれば日々の出來事を記錄すると同時に知らず識らず古今の聖賢學者哲人等の名言と詩文とを諳誦し其の學識を深くし品性を高うするを得べし又卷頭には女子職業案内學校案内其他種々の事項を載せ毎月の初めには大祭祝日の唱歌古賢の訓戒及び四季折々の遊樂料理等を明細に記しあるを以て學校にあると家庭にあるとを問はず女學生は勿論一般婦人の必す座右を放すべかざなる良日記り

菊袖珍製本頗優美

上製　總クロース金文字模様入　定價卅錢　郵税四錢

並製　背クロース厚表紙石版刷　定價二十錢　郵税四錢

國光社發行

女生日記特別割引券

●本券有効期限は明治卅六年十二月廿五日限とす

●本劵は直接東京本社宛御注文者に限り有効とし特に定價の一割引す（但し郵税は別に要す）

●期限經過後は無効とす

●前金添へ（郵税共）御注文に非されば無効とす（女鑑）

東京築地二丁目　株式會社　國光社

東京築地　株式會社　發行所　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

少年武士道史傳

菊判洋裝美本全八冊

各定價十九錢郵稅四錢

第一編 ◉山中鹿之助 文學士大町桂月著

第二編 ◉上杉謙信 國府犀東著

第三編 ◉本多平八 文學士笹川臨風著

第四編 ◉小早川隆景 田岡嶺雲著

第五編 ◉立花宗茂 文學士白河鯉洋著

第六編 ◉木村重成 法學士太田蒼溟著

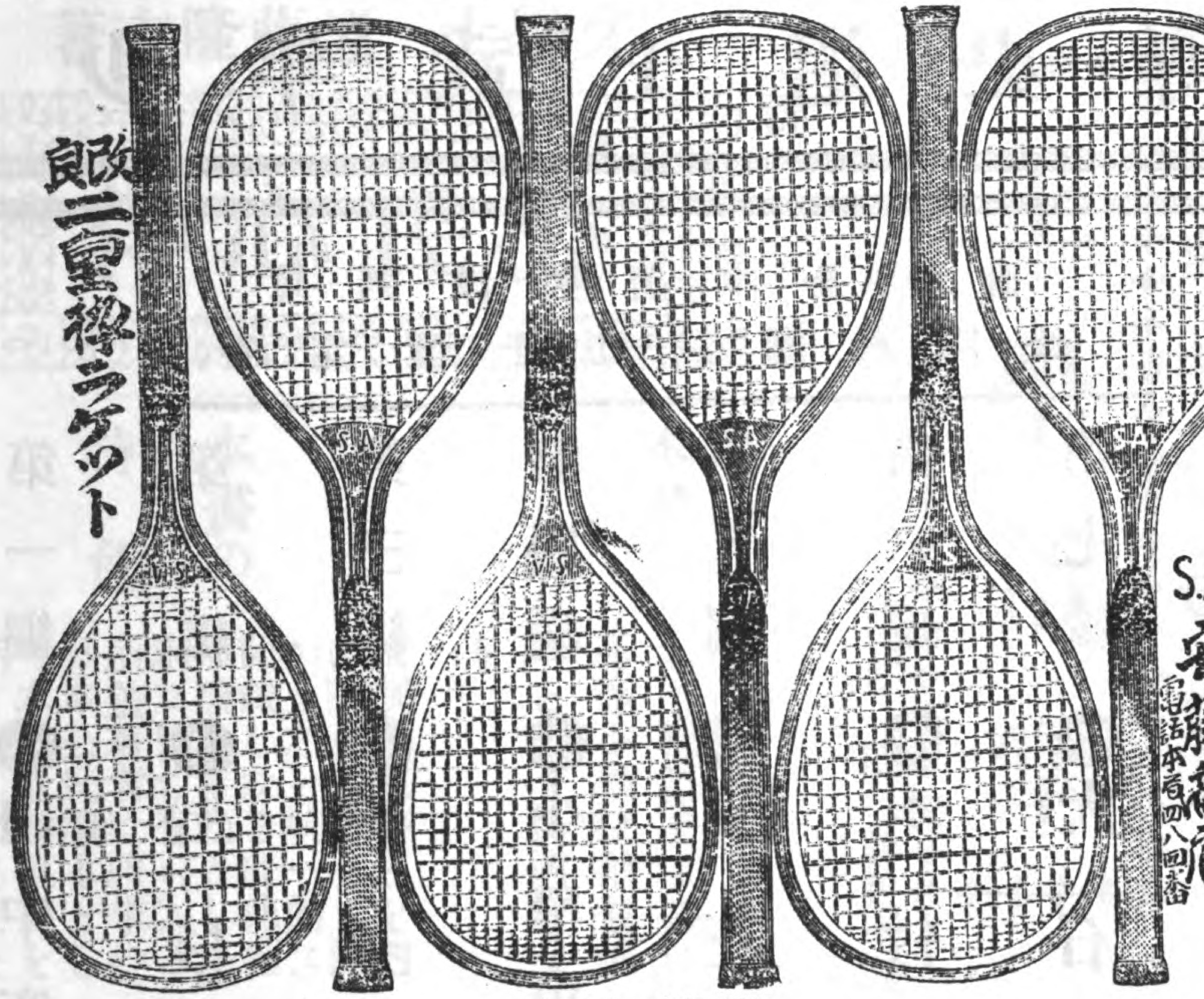
第七編 ◉大石良雄 文學士中內蝶二著

臨時發刊 ◉藤田東湖 法學士工藤重義著

發行所 東京築地 株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

改良二重枠ラケット



東京神田表神保町五番地
S.A 安藤商店
電話本局四八〇番

諸學校用　体操器械

登録商標
S.A.
安藤商店

改良二重枠ラケット	一號	四本	一三、五〇
	二號	四本	一一、五〇
	三號	四本	一〇、三〇
	四號	四本	八、二〇
	五號	四本	七、二〇
	六號	四本	六、二〇
	七號	四本	五、二五
普通二重枠ラケット	一號	四本	一三、〇〇
	二號	四本	一一、二〇
	三號	四本	九、八〇
	四號	四本	七、四〇
	五號	四本	六、七〇
	六號	四本	五、七〇
	七號	四本	四、七五

テニスネット	一號	長四間半 巾三尺五寸	一、七五
	二號	長五間半 巾三尺五寸	二、二五
	三號	長六間 巾三尺五寸	二、四五
	四號	長七間 巾三尺五寸	二、九五
網張棒	上等	四點付	二、九〇
	並等	三點付	一、五〇
最新形室内テニス	ラケット二本 ボール四ケ ネット一張 網張棒二本	壹箱入	一、四五

S.A.
電本四八〇
体操器械
遊戯品一切
東京神田
安藤商店

S.A.
電本四八〇
体操器械
遊戯品一切
東京神田
安藤商店

である「めかかう」は目眩うと言ふ義であろうか、此頃から見えて居るのである。とにかく今言ふべかかう（べつかつかう）の事である、即ちしたまぶちを指で引延ばして裏の赤い肉を見せる戯である、おもに小兒をおどし、人を卑しめたり、また人の請を承諾せぬ時物をくれろと言つたのに對して應じない場合にするのである、赤目と言ふたのが音便で「あかんべい」となつたのである、江戸時代の歌に、

くれもせぬ花一枝を所望して
覗いて見ればべいか紅梅

また、

所望する一枝をくれぬのみならず
この目むきつゝべいか紅梅

など言ふ歌も見えて、俳句の方には、

をる人にべかかうと言へ犬櫻

など〻言ふ句もある。

（十九）しゞま

源氏物語末摘花の巻に

いくそたび君がしゞまにまけぬらむ
ものな言ひぞと言はぬたのみに

と言ふ歌がある、このしゞまとは無言の行を言ふのである、童兒が互に無言をしようと約束をして、鐘つく〲と言つて、何か鳴らして後に物を言はぬ事をするのである、互に默して居つて誤まつて一言を發した者は負けたのである、何時の頃であつたか、或山寺に三人の坊主が泊り合ふた、袖ふり合ふも多少の緣などゝ互に四方山の話をした末に、退窟しのぎに無言の行を寺の本堂でやつた、午過ぎてからしたのであるが、負ける事は嫌いな連中故、日くれ方まで默つて居た、日は暮れる、あたりは暗くなると一人が覺えずくらいから燈明をつけようと言ふと、一人が貴方物言つたぢやないかと言つた、すると今迄こらへて居た一人が私一人は物言はぬと言つたので、これで無言の行も破れた譯であるから、あとは大笑ひであつたそうな。芝居では「だんまり」の幕即ち是れで、口語を一つも混ぜぬ無言の演劇である。

（二十） 道中駕籠

幼き者を脊に負ふて「道中駕籠やからかごや、行きよりもどりは安いな」と囃す事がある、戻り駕籠は値段の廉く乘れるのは道理ではあるけれど、實は安いなを早いなと言つたので、是で「空かご」と言ふ意に叶つて居ると或隨筆ものに見えた、又明治の始小供二人竹或は木の長いのに、一人の子供を乘せて天秤棒のように擔いで行く戯があつたが、これらが即ち道中駕籠である。

（二十一） うなぎの瀬のぼり

東海道名所記に「鰻は川瀬にのぼる者なれば登魚梁と言ふものにて捕ふ」とある、京都の方にて幼なき子供の澤山集まつて、帶にとりついて長く並びあつた背中の上を、一人のぼつて這ひあるくのを「うなぎの瀬のぼり」と名付けて一つの遊戯としたもので、今は無いのである。

（二十二）芋蟲ころ〱 （鬼の居ないうち洗濯）

鰻の瀬登りの名殘に行はれたのでもあろう、多くの子共が帶にとり付いてかゝみながらあるくのである其囃す言葉を聞くと「芋蟲ころ〱瓢簞ぼつくりこ」と言ひながら暫らく歩いて、先に立つた者が「おとの〱せん次郎」と呼ぶと、最後に居たものが列を離れ出て前に來て「何用で御座る」と言ふ、呼びたる者は「手前今迄何して居た」と言ふと、「棚から落ちた牡丹餅を食つて居た」と答をする、また「それなれば雨がふるか鎗がふるか」と問ふに、一寸見に行くふりをして、背かず答へるのである、其時前が善いか後が善いかと言へば「前がよい」と言ふ、それならば前に居よとて、それを先の第一番に居らしむるのである、偖始のように返繰して囃しながら歩くのであるこの囃は手遊の芋蟲から出たのでもあろうか、この外に二人前と後になりて立ち並び、手を引き合つてその手を高く擧げて「いわしこい〱ままくはしよ」と言ふ、數多の子供がその引合つた手の袖下をくゞり拔ける時に、手を引いたもの、潜りに來る者の方に向ひたる者くゞる者の尻をうつ、潜

る者はうたれまいと用心をする、又銘々着物の褄を兩手で洗ふ眞似をして「鬼どの留守に洗濯しよ」と言つて居ると、鬼になつたものが糊を賣ろうと言つた時、着物の裾をかゝげたのにうくる、鬼はひら手で力を入れながら、其褄を持つたのをうち拂ふのである、拂ひ落されたのは鬼に代つてなるのである、これは鬼の留守の洗濯と言ふ諺から出た戯である、今鬼の居ないうち洗濯しましよと言ふは、是から轉訛したのであろう。

（二十三）　酸醤を吹きならす事

酸醤を吹きならした事は　榮花物語はつはなの巻に一條院の后上東門院の容貌を言へる（寛弘五年の所なり）詞に「御色しろくうるはしう、ほゝづきなどを吹きふくらめてすゑたらむやうにぞ見えさせ給ふ」とあるので、當時はならした者もあつたと見える、枕草紙の異本に「大きにんよき物はほゝづき」と見えて居る、是等から考へて見ると女子の酸醤を吹きならす事は古き事である。

本草綱目に酸醤の効能が記されたのは、主治に「食之除熱、治黄病、尤益小兒」附方に「酸漿實丸、治婦人胎熱難產」とある、故に酸醤を口にふくむのはよい事である。

（二十四）　目くらべ　にらみくら

長門本平家物語卷之九に淸盛夢に髑髏を見る處に例へば人の目くらべをするやうに、互にまたゝき

もせずはたとにらまへてぞ候ひける云々

とある、平淸盛は髑髏とにらみくらをしたのである、古くは目くらべと言つた今は「にらみくら」「にらみつこ」と言ふ。

（二十五）　つばなぬこ〳〵

鬼ごとの一種で、鬼になつた者を小山のおこんと名を付けて、之を誘ひ、つれて下にかゞみ、つばなぬこ〳〵と言ひながら、つばなぬく眞似をして、果に鬼に向つて人さし指と大指にて輪を拵へて、その内から覗いて見て、これ何と問ふと、答へてほうし玉と言ふと皆逃げ走るのを、鬼は追ひかけて捕へるの

である、即ちこの戯は狐の的である、何時頃此遊びは始つたかは解らぬが、吾妻などりと言ふ書に其繪迄のせてある、江戸時代の末ごろから始まつて明治に迄其遊が殘つて行はれたのであろう、該書は江戸の遺風を見るのには至極よい書である、此書は明治の初頃に出來た書だ。

尚ほ述べたい事もあるが此位で置こう、そのうち續兒戯小錄をお目にかけるであろう。 (完)

隱れたる節婦

内田茂文

その傳を歴史に逸したるもの、却て小說篇中有數の人となりて、其名嘖々として世に傳らるゝもの尠からず。而して歴史の之を編するなく、小說の之を傳ふるなく、僅に口碑に存し、其名の消えんとする仄暗き社會の記憶中より、幽けき光りを保ち殘されつゝあるもの無しとせず。頗る遺憾の極なりとす。且

是が事蹟の女性に係るものに至りては感更に深きものあるなり。

聞說、元祿年間、肥前の國長崎圓山の遊里筑後屋と言へる妓樓に、登倭と呼べる一妓あり、當時、明の交通商人旻德なるもの、貿易の爲め常に日本に來り、長崎に滯在中、一夜圓山の遊里に行き、筑後屋に遊びて登倭を待せしめたるに頗る其意に投合し、爾來屢々同樓に登りては其都度登倭を聘するより、登倭も亦その情に惹かされ、互に深く契り換はし二人は宛がら愛の天國に遊べる思ひを爲しつゝ在りたり。圖らざりき俄然旻德は我が國禁を犯せる罪の有り、發覺して遂に死刑に處せられぬ、是を聞きたる登倭は悲泣慟哭、殆んど氣絕せんとして僅に一縷の命脈を保ちたるが、終に堪え難くてや、彼は雄々しくも當時の官衙に出願し自ら旻德の首級を乞ひ受け、之を同國小島の郷に厚く埋葬し、彼れ自身は旻德が墳墓を枕に自刄を遂げ、同じ草葉の露と消えにき。

此事歴や古く二百七十年前に係り、歴史の之を傳ふ

るなく、小説の之を編するを見ず、而も其事柄は尙同所の口碑に存し、彼が自刄の地は旻德坂（今は轉訛してヒントコと云）と名けられたり。

去る明治二十年中、同地の有志者是が事迹を辿りて、彼が切なる愛の爲め情夫に殉じたる節操を憐れみ、旻德坂に一基の碑を建て永く彼が淸き芳ばしき操行を傳えんとて、同地長照寺の住職淺井日昇氏に碑文を乞ひ同年の春全く建設を了りたり。左に其碑文を紹介せん。

登倭者、長崎圓山筑後屋之娼妓也、自レ幼穎悟、才色絕レ人、每レ有二遊冶者一、皆無レ不下以二眞實一相接上焉、明商有二旻德者一、來寓二長崎一、一夜登二此樓一、招二致登倭一、交歡終夜、伉儷不レ啻、後屢相見、遂爲二偕老同穴之契一云、旻德後犯二國禁一被レ刑、登倭悲泣號哭將レ死又生、旣而自奮曰、「妾誓二與郎一死生無他、妾當レ殉二郎于地下一矣、被レ刑之日、乞二其首于官一、葬二之小島鄕中一、亦自伏レ刄而殉レ之、時元祿三年某月也、地有二旻德坂一、蓋因レ之名云、嗚呼登倭貞操節義、誠有下足レ感二動人一者上、比二之背君降國不義無道遺二耻于千歲一者一、豈啻霄壤哉、古人不レ言乎、忠臣不レ仕二二君一、烈女不レ見二二夫一、如二登倭一者、其庶幾乎、頃者、同鄕人桐山與四郎、田中勝三郞等、凡二十名、相謀建二碑于其墓側一、請レ余記之、蓋惜二其事之煙滅而不一レ傳也、明治二十年春三月十五日淺井日昇謹記、

噫、彼登倭は一賤妓のみ、敢て之を完全なる婦女子として待つべからざるも而も其志操節行に至りてや、之を世の所謂三十振袖四十島田の齡に至るも尙且つ脂粉に皺面を蔽ひ輕薄男子の玩弄に甘んじつゝある賣春婦に比して、豈啻に霄壤の差のみならんや。

小兒の樂園（つゞき）

佐藤紅綠

かく思ひましたが直きに自分では迚も出來ない事がわかりました、それは急にバラ〳〵釋けたのですか

ら如何いふ工合に糸が潜つてるかは少しも見られなかつた爲めです、彼女は結目の元の形と其の工合を思ひ出さうと致しましたけれども其れももう記臆がなくなつてしまひました、もう太郎が歸るまで其儘にして置くより外はありません、お花は

『併し太郎が釋いてあるのを見たら妾が致たのといふ事がわかりませう、妾は箱の中を見ないと言ひましても信實に思ひなさらないでせう』

と言ひました、そしてどうせ箱の中を見たと疑はれるなら、寧そ見た方がよろしいといふ考へは小さな愚かな胸に浮みました、何と愚なお花さんよ、貴孃は善い事をなし惡い事をなさらない樣にさへすればよろしいのです、太郎が如何なに言ふかとか信じて呉れるかといふ事は御構ひなさらんでもよろしいのです。

お花は此んなに思ひましても、若しも箱の蓋にある顔がお花に勸める樣に見えませんで又た前よりも明瞭と箱の中の聲が聞えませんでしたらば、お花は其儘にして置いたのでせう、自分の耳の聞違であるかどうだか了解らなかつたのですから。併し又もお花の耳に囁ぐ樣な聲がしました、或はお花の好奇な心が囁いたのかも知りません。

『出して下さいお花さん、何卒私を出して下さい、私共は貴孃の御友達になりませう、只た出して下さいよ』

お花は思ひました、

『これは何でせう、箱の中に何か生きてるものが入つてるのでせうか、左樣々々妾は一寸一覗しやうと決心ます、只た一覗です、そして後は前の樣に蓋を安全と閉めて置きませう、ですから一目位は見たつて惡い事はないでせう』

扨て太郎は如何したでせうか、彼はお花と一所に住む樣になつてから以來、お花と一所に樂み遊ばなかつたのは此日が初めてゞした、此日は太郎も思ふ通りに行きませんでした、毎もの樣に幸でなかつたのです、彼は甘い葡萄や熟した無花果を見付けること

が出來ませんでした、若しも太郎に何か過失があるとしたならば、餘り澤山に無花果を好く事でした、熟して居ないのでも甘過る程熟し過ぎたのでも食べるんです、太郎は思ふ通りに行きませんでしたから心の中に面白い事がありません每もの樣に思ふ存分の聲を出して其の友達共の興を添える樣な事も致しません、其んな風に不平して居たもんですから他の小兒等は太郎は如何して此んなだらうかと不思議に思ひました、太郎自身も如何いふわけかゞ解らなかつたのです、著者が御話をして居る此時代は幸福ばかりで人の性質が習慣されてありました事を諸君は思ひ起したでせう、世界は未だ幸福より外の事を知らなかつたのです此小兒等が始めて地球を喜び樂む爲めに送られて以來一人の子も病氣を煩つたり機嫌が惡かつたりする事はなかつたのです、けれども太郎はどうにかして自分の機嫌が惡い事が了解りましたので、もう遊ぶ事を止してお花の處に歸つたがよろしいと決心しました、お花は太郎の御氣に入であつたからです。併し太郎はお花に何か喜ばせやうと思つて花を集めて環を作りまして其れをお花の髮の上に上げる積りでした、花は大層に奇麗でした、薔薇、百合、蜜柑の花、種々の花を太郎が持て行く時に芳い香が跡に飛んで居ました、そして花環は小兒としては巧妙過るほど良く作られました、小さい娘の指は花環を作るには適當であると著者は思つて居ますけれども、此時分には男の子でも今の女の子が作るよりも上手であつたのです、そして著者は此に今大きな黑雲が餘程前から空に湧いて來た事を諸君に御話せねばなりません、其れは未だ太陽を隱しませんけれども、併し太郎が家の戶に着いた時に此雲は日の光りを遮りはじめました、そして急に慣れなる暗闇となりました。

太郎は靜かに家に入りました、何故ならばお花が自分の歸つたのを知らない中に忍足りお花の頭の上に花環を載せて驚かして喜ばせるつもりであつたからです、併し其時はもう其んなに輕く歩くに及ばない

様な場合でした、彼れは思ふ存分に大人の様に強く歩みました、(著者は象の如く強くと言ひたいのですが)、そんなに強く歩ける理由があるので、お花は其んな足音なんかは耳に入らない程其の目的物に熱心であつたのです、太郎が小屋に入る時に丁度お花が蓋に手を懸けて不思議な箱を開ける處でありました、太郎はお花の爲て居る業を見ました此時に一聲でも叫んだならば、お花は手を引いてしまつて、箱の中の秘密は知られなかつたのでせう。

けれども太郎は幾分かの好奇心があるので、此の分配になるべきものは何であるかを知りたい氣もないわけでないから、お花が秘密を見出さうと取掛つてあるのを見て、お花ばかりにうまい事をされて堪るものかといふ考が起つたのです、そして萬一箱の中に立派な美くしいものが入つてあつたら其の半分を取る筈でして、斯様に太郎も同し様に愚になり同し様に過失に陷りました、私共は此の事に就てお花を責めるならば、同し様に太郎を免すわけには參りませんことを忘れてはなりません。



お花が蓋を開けた時に小屋は大層に淋しくシインとしてきました、黒雲は全く太陽を蔽ふて其れを生きたまゝに埋めた様に見えました、少し前から低い唸る聲がありましたが、其れが俄かに雷の様に強くなりました、併しお花は一切其んな事にお構ひなしに短刀直入に蓋を開けました、俄かに幾百千の羽根の生えたものがお花を擦り抜けて箱の外に飛び出した様に見えました。

同時にお花は太郎が痛みを受けた樣な悲しい聲で叫ぶのを聞きました、

『アヽ僕は刺された、僕は刺された、仕樣のないお花さんだね、何故此んな無益い箱なんか開けましたか』

お花は手から蓋を落して、太郎が如何したかを見るために立ち上つて四邊を見廻はしました、雷の雲が室を暗くしましたから明らかに如何しましたのかが見えません、けれども大きな蝿か大きな蚊か氣味惡い音を立てヽるのを聞きました、そして又ハンメウの樣なものが飛び舞はつて居る樣でした、そしてお花の眼が薄暗い光りに馴れました時に、蝙蝠の羽の樣なものを以て居る醜い小さい形のものが澤山、何か人を害しさうに見えて、其の又尾には恐ろしい長い針が付いてるのを見ました、此等の一匹が太郎を刺したのでありました、彼是する中にお花も太郎と同し樣に刺されまして大變な騷ぎが始まりました、厭らしい此の小さい怪物はお花の顔にとまりました、若も太郎が直ぐに走つて拂ひませなんだら、どんなに深くお花を螫したか知れませんでした。是から太郎とお花はどんなになるでせうか。（つヾく）

寸鐵物語（つゞき）

阿多廣介

◎男女の交際を密接にするのは、我邦矯風上の根本なり、即ち醜業婦を交際塲裡より驅逐し、紳士淑女が高尚にして優美なる親密の交際を結び完全なる結婚をなし、和熟なる家風を組織し進んで國民の品性操行を上品に發達せしむるは今日の急務なるべし。

◎西洋人は年少男女が親密なる交際をなし、縦令ひ許嫁になるとも、結婚の儀式を擧ぐるまでは、危險を犯すことはない、故に兩親も安心して年少男女の交際を誘導するのだか我邦の學生諸君は中々ソー安くは氣が許されぬ。

◎我邦の年少男女が同伴したり談話したりする時は、

世間に怪まるゝのみならず、握手接吻でもしたら、最早情を通じたるものとして評判せらるゝのみならず、實際に煙の立つ所には火が燃ゆるの決果となるから、油斷が出來ぬ、夫れで七歳にして席を同ふせずと云ふ冷酷なる制裁を受けねばならぬ、誠に殺風景なる譯ぢや。

◎此の情けなき男女の境遇を如何にして救濟すべきか、其原因と手段とを講究實行するのは、大問題にして又興味あることゝ思ふ。

◎人間の氣質は多血質と神經質と、粘液質と、胆汁質とに分類されてあるが、多血質のものは活氣ありて耐忍力に乏しく、神經質のものは活氣に乏しけれども耐忍力あり、粘液質のものは活氣も耐忍力もなく、無氣力のものにて、胆汁質のものは、活氣と耐忍力とを兼備し、所謂剛毅勇敢の氣質に富むに居るのである。

◎我邦男女の交際の危險なのは一つは多血質の爲めかとも思はれる、即ち氣が輕くして一時の發情を抑制するの耐忍力が弱いのに違ひない、されば神經質を加味するようにして、胆汁質にしたいものである。胆汁質即ち剛毅勇敢の氣質の必要なるとは、單に此一點許りではない、實に人間の個性としても、國民的性質としても奬勵陶冶しなくてはならぬのである。

◎東洋の女子敎育は、主として女子を以て男子の從屬者としたるものである故に、女子の氣質は温順貞淑の一方に傾き、神經質にせんとしたるものらしい多血質の女子を神經質にせんとして、徒らに其の活氣を抑制するときは、表面は目的を達し得るが如くなれども、人情と云ふものは又別である。

◎水は堤防にて溢出を防ぎ得らるべきも、尚ほ大雨のときは潰決せらるゝの恐れがある、故に閘門を設けて餘水を洩らさねばならぬ情欲も之れと同じく、單に壓抑するときは、機に際して防ぐべからざるに至ることあり、即ち忍ぶれど色に出にけり我が戀はと、云ふ塩梅になりて、却て危險のものなり。

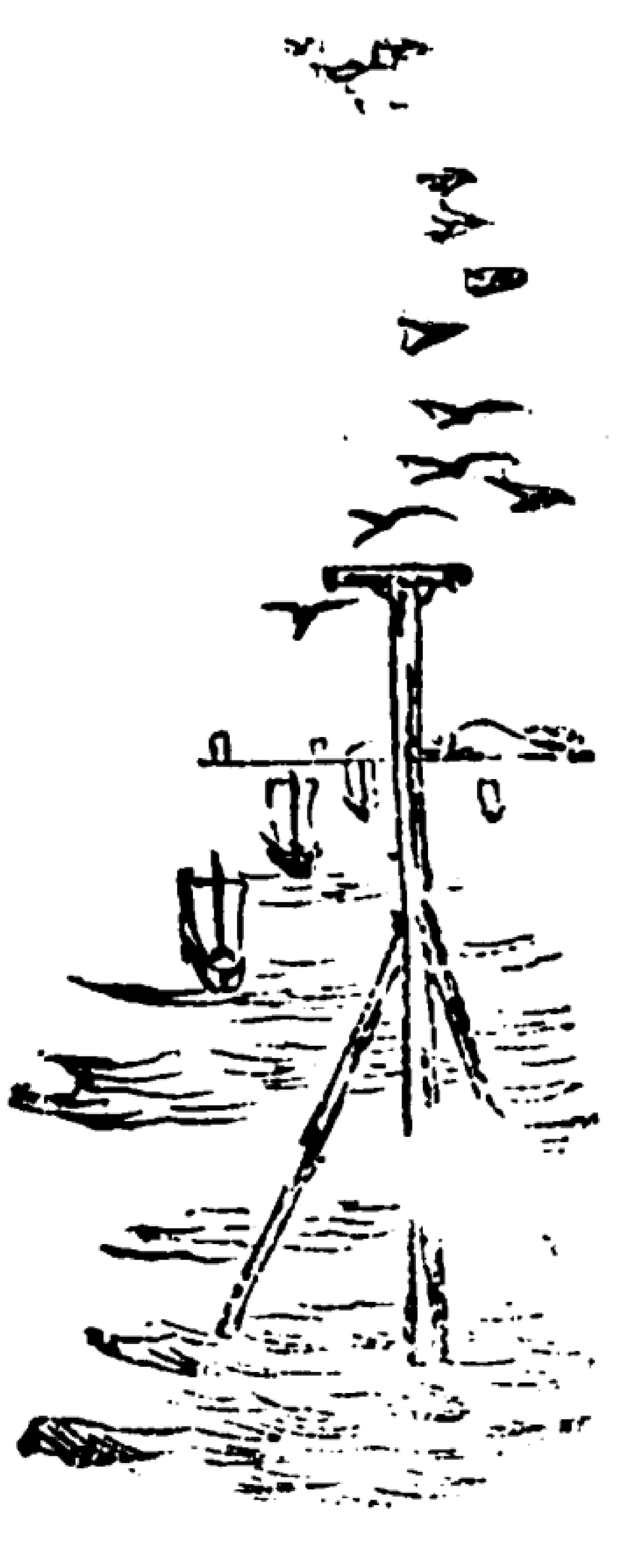
◎總て物は表面に顯はしたるものは、之れを矯正し、

之れを誘導し易けれども、隱密の間に存するときは、如何ともなし能はざるのみならず、益々禍害を增長するものなり、情欲の如きも亦然り、箱入娘に蓮葉者と疵物が多い、又往々醜業婦に貞節なるものがある。

◎男女の關係を絶對に危險のものとし、或は席を分ち、或は墻壁を設け、全く其交際を杜絶するときは水に堤防を設けたる如きものなれども千里の長堤は蟻螻より破れ、父母敎師の視力は、隱微の間に達せざるのみならず、或は却て膝下に雉子を飛ばすの滑稽を演ずることあり、斯くて一旦籠出したる情慾は終に集取すべからざるに至り、婬奔多情、恬として監督者を顧みざるに至るべし。

◎衣食足りて禮節を知る、恒產なきものは恒心なし、物は不足なれば必ず欲くなるものなり、昔より宮女は多情なりと唱へられたり、菓子屋の小僧は最初思ふ存分に砂糖に飽かしむるとのことなり、故に男女の關係は餘りに酷に隔つべからず、寧ろ表面に交際せしめて、却て隱密の間を取締に如かざるが如し。

◎斯く謂はゞ男女子を放任して交際せしめ、其色欲を充たさしむべしと誤解さるゝも計られざれども、其の意には非ず、畢竟するに男女席を同ふし、歡樂を共にするとも端正にして、禮節を重んじ、淡白にして興味を感ずる的の交際法をなさしめざるべからず、君子の交りは淡きこと水の如く、小人の交りは濃くして飴の如しとあり、余は其の君子の交りをなさしめんとするにあるなり。





用心蠟燭

小說

小島蓬城

（上）

日は沒り果てぬ。竹林の奥に聳え立てる榎の高き梢に、塒を擇ぶか、途切れ〳〵に聞ゆる烏の聲。

佛壇の燈明を挑げて、退きて、扨稜々しく坐に着きたるは、表からは、直情家と言はれながら裡では隨分八ケ間敷分らぬ事をも言ふべき、不格恰に大柄なる、肩幅の張つたる、切髮の老婦人。

『正雄さん、イヤ正雄、茲に亡父尊靈が見て御居での所で、私がいふのは亡父尊靈が仰しやるのだと思つて御聽なさい。』

と一層四角に開き直る。如何なる大事か其口を泄れて出づらん。正雄は「又例の」と言はぬばかりに。

『昔でも今でも姑は姑、嫁は嫁、明治になつたればとて嫁姑に變りはござるまい。私が此家へ來た頃には、汝の祖母樣がそれは〳〵嚴しい御方で、右の物を左にするにも御許なくては出來なんだ。あゝさせるのが正當であらうが、私には其がならぬ故、大概の事は大目に見て居れば。』
長烟管を、すうつと吸つてぽんと叩きつ。
『これ、もつと身に染みて御聽きなさい、今の須磨子の行爲は一體まあ何といふことです、自分より外家中に人が無いか何ぞの樣に、あんまり生意氣らしう我儘が過ぎるから、偶に一言づゝ釘を刺せば、其場は温和しう唯々と、蟲も殺さぬ顏して引退るが、口命けた通りには何事もせず、尙はそれのみか、蔭へ廻つて、親の口命でも、善いことはして惡いことは爲ぬが眞實の孝行だといふとやら、其樣生意氣なことをいふのが又と二人あらうものか。』
と言ひさして正雄を見詰むる眼鋭し、正雄は指頭に、其美しき口髭を弄りながら、
『不肖は隨分忙しいです、亡父尊靈だの祖母樣だのを引合に出して、昔は斯うだの今は何だのと長いことを聞かされるより、イヤ其樣なことを折々承ることは到底も出來ませぬ、それより斯うなら斯うと一口に仰しやつて下さい。』
『一口に言へ？。』
『ハイ、又氣に入らぬ所は尊母から充分、本人に仰しやれば可いぢやありませんか。』
『私から別に此上言ふことは無いではありませんか。』
『では不肖から能く諭しませう。』
『諭す？。』

と威猛高に、
『そんな事は遠に通り過ぎて居る。』
『ハア、、。』、
『ハアではありません。』
『では如何するんです？。』
『如何する、解つた咄でないか、あゝいふ家風に合はぬ者は離縁つて御仕舞ひなさい。』
『離縁？、始めて承りますな。』
正雄は稍激せしが、忽ち微笑を面に浮べて、
『其様ことは出來ませんな。』
と語氣頗る冷かなり。
『出來ません？、亡父尊靈の御言葉を反きなさるか。』
『父上が居らつしやるなら決して其様なことは仰しやりません。』
『何ですと。』
焦心たる調子にて、
『伺う一度いふて御覧なさい。』
『もう止しませう爭ひは、須磨には能く諭して置きます。』
『なりませぬ、離縁を爲なさい。』
『解らぬことを仰しやる。』

『何が解らぬのか、汝が厭でも、私が見事離縁して見せる』跡は暫く無言なりし。臺所には下女の細語、奥にも誰か人の氣合せり。

(中)

『須磨さん、一寸と其所に御座りなさい。』昨夕自分の言分が通らざりし爲め、不快の面持凄き隱居は、先刻下女が掃除したりし主人の居室の、机の上を須磨子が整理しつゝありし所へ入り來りて、不倶戴天の仇に向へるらん語氣にて斯く言ひつゝ座に着けり。

須磨子はギクリとしたが、

『ハイ。』

と、左も快く返事して、

『何か御用で?。』

と温然に着座せり。

『用があればこそ呼びましたのさ。』

の前提はまづ毒氣滿々といふべし。

『お前さんは感心で、能く學問が御出來なさる。へゝゝゝ、私等の樣な時代後れは、いづれ月謝でも出してお前さんに敎はらなければ。』

とは何所まで續ける毒矢なるにや。須磨子は只、何といふべき詞をも知らず、但し面には飽くまで沈着の

色を示して毫も毒矢の毒氣を感せざるもの丶如し。かく何と言はれてもオ○ド○ぐ○丶せざるが、第一隱居の癪にさわる所なりとは、世には種々の注文もありけるものかな。

『それでお前さんに聞き度いのは、あの平生お前さんが、何やら記入なさる紅い線の入つた帳面、あれは全體何になさるのかい。』

『紅い線の………？。』

『ソラ黑い表紙の。』

『ハ、家計簿記のことでござりますか。』

『何カ○ケ○ボ○キ、あんな物は無益な玩弄具ぢやありませんか。』

『否、あれに日々家計向の費用を記入致しまするので。』

『記入、生意氣らしい詞ぢやの、すると何ぢやの、詰りあれは日記帳でござるかい。』

『ハイ、金錢出入帳でござります。』

『へー。』

厭に曲つた聲にて、

『金錢出入帳、金錢出入帳がカ○ケ○ボ○キ、始めて聞きました、此年になつて、けれども女は女らしう出入帳といふが可い。而してあの樣な費になるものを使用はいで、反古を反して自身に綴ぢて御使用ひなさい。』

須磨子は稍當惑して、

『ハイ、どうも反古では出來難うござります。』

言い切らぬに隱居は引被せて、

『反古は厭、洒落臭い、出入帳に反古さへ能う使はぬ、ヘイ結搆な奥さんを正雄は持ちました。如何しても厭でござるか。』

『否、厭とは決して、では爾後反古に換へますから、何卒、オヤ御莨盆を。』

と須磨子が立たうとするを。

『其樣にして逃げんでも可うござらう、莨は今吸み度うござらぬ、エヽと、一昨日お前さんは用心蠟燭を悉皆取替へなさつたさうだの。』

『ハイ……替へました。』

須磨子が詮方なく答ふれば、隱居は屹となつて、

『誰に相談して替へなさつた。』

『…………旦那樣には申しましたが。』

『お默りなさい、兎角今の若い者は爲ぬでも可いことを爲たがつて宜敷ないが、お前さん程出過ぎた人も又無いものだ、日外私が何と言ひました、私でさへ今まで取替へたことの無いものを、去年から此家の人になつたばかりのお前さんが、何程自慢面が爲たいとて、其樣ことまで利いた風を爲なくとも可からうぢやありませんか。サア、何と思つて私が止めたことを爲なさつたか、判然と其理由をお言ひなさい。』

『サア判然と其理由を。』

女、殊に老いたる婦女には、さしもあらざる事を仰山らしく言ふ癖あり。

須磨子は止むなく、

『どうも惡うござりました。』

『惡うござりました、ヘツヘツ、其は平生のことです、私が爲さるなと言ふたことを爲なさるには、何か必然理由があるでせう。』……『…………。』

『須磨さん理由は如何です。』

須磨子は漸く容態を正して、

『では申します、何れの家にも用心蠟燭といふものはありましても、多くは古いのが其儘にあつて、實際使用ふ時には火取が惡かつたり立消がしたり、又僅の風に消えたりして役に立ちませぬ。それ故用心蠟燭は折々新しいのに取替へて、倘ほ眞の尖を一度焦して置くべきものと、學校に居ました頃家政の先生に聞きましたから。』

『古い蠟燭が役に立たぬ、其樣ことはござらぬ、昔から聞いたことが無い。』

『火の車とやらいふ、昔の本に書いてありますさうで。』

『エヽ能く學校だの、本だのと、生意氣なことが言へたもんだ、他人が學問が無いと言はぬばかりに。』

『…………。』

『何故私の命令を守りなさらぬ、姑より先生が大切でござるか。』…『…………』。

『それなら先生の家へ御行きなさい、ドラ梅に命令けて以前の蠟燭と替へさせて置から、ヤレ／＼世話の燒ける嫁殿ぢや。』

隱居は重げに軀を擡てズツシ／＼。須磨子は美き双手を膝に重し儘、滋味を帶べる眼に見送て詞もなし。

（下）

素破火事と聞くや、主人徐に立ちて、「斯ういふ時に周章ると思はぬ不覺を取る」と悠々床の間の掛物を巻き納めしが、已に巻き納めて後「ウム此れも矢張り周章だつた」と叮嚀に以前の如く掛けしといふ落語あり。都て災禍は「有る」と豫め言ふべからざるも、又決して「無し」と油断すべからず、されば事に臨んで狼狽へざる様、平素の心掛寔に肝要ならずや。

或深更、麴町なる神山正雄の邸宅近く出火のありし、其時奥様の沈着振と働振、如何してあゝは出來るものかと、口善惡なき車夫、下女までも、自分の功績の如く他人に向つて誇りける。

火事は一軒を隔てゝの隣なりければ、物音聞きて起上り、更に火の近きを見たる隱居の狼狽へ方實に譬ふるに物なく、只罵り騷ぐ外には、他人の邪魔となるばかり。須磨子は夫と共に起上るや、まづ火の下風なることを見定め、姑に叱られて別に貯へ置きたる蠟燭の、眞の尖を焦したるに手早く燐寸の火を移し、數ある提灯に點して家中の要所々々に掛けさせつ。

すうつとしたる寢衣姿に帶をきりゝと締め、華奢なる足には足袋を二重穿きしが、斯は釘抔踏みし時に負傷せぬ爲なりけり、召使の男女の、跣足なるには温然に諭して足袋を穿かせ、狼狽へたるには水を與へて氣を鎭めさせ、正雄と共に自らも手を下し、他人にも命じて大切の物品より順に、皮籠に納め、又は大風呂敷に包み、尚ほ餘れるをば、袷を擴げて其裏に盛り、左右の裙を内より外へと袖に通して結ぶ等充分の用意したる傍には、隱居を車にて自分の實家に送り、扨て、荷を運び出すべき先を召使等に指圖して未だ容易に運べと言はず。他人に悠然と食事させ、自ら火の方向を見てありしが、其儘下火となりて鎭火せし後までも、多くの桶に汲ませし水は其儘に、朝まで戒めて明しける。

此後隱居は如何せしにか、須磨子は今尚ほ神山の家にあり。

（をはり）



野分の曲

山本細柳

かなしいかなや秋風の
杉の梢にさわぐ時
空に怒れる黒雲に
羅刹の爪の見ゆるかな

さみしいかなや秋の野の
野分に雨のまじる時
桐の一葉のちるかげに
世にかなしみのひゞくかな

あゝふきすさぶ秋風の
堤の薮をさそふ時
見よ子雀も地に落ちて
むごきわが世をのろふなり

うき世の稚子をなだめむと
けはひよそひしなでしこも
姿を風に砕かれて
花に涙のつゆわかし

あゝ秋風のさむくして
峰の並木に叫ぶ時
城の櫓の松が枝に
烏は闇をさそふなり

つるぎの如くふく風の
釣鐘草を砕く時
椎の老樹の梟も
苔むす岩に落つるかな

風に木の葉のひるがへり
みそらの雲にかゝる時
伏猪の床のさむくして
猪も涙をしぼるらむ

さはいへ風もさとしかや
さのふ罪なき人の子を
さらへし鷲もおのゝぎて
荊棘がもとに目をとぢぬ

いとしやすごくふく風に
野末をたどる順禮の
娘の髮も亂れつゝ
笠もつうでもわなゝぎぬ

あきかぜ山にさけぶ時
玉の館のたわやめの
かざしの花の色もさめ
袖に蘭麝の香もうせぬ

伊豫簾ふきまく秋風に
人を和せし歌妓の
べにさしゆびの血は冷えて
鏡とる手もくるふかな

心ぼそくも人の子の
魂はみそらにかへる時
時を得がほの河獺は
葦邊を高くめぐるかな

鳥はほゝゑむ春の野の
快樂は夢としれゝども
かくまでかるゝ大空の
叫びの雲にうらみあり

すさぶなかれや秋風よ
世を憤るますらをも
うでの血潮の氷りては
涙に息の絶えもせむ

あはれ此の君

山岡超舟

世に立つからの習ひかも
　知らねどうきは人の身の
上のみならで降る雪に
　まがれど折れぬ操もて
千年百年かぎりなき
　竹となりてもものうしや
色も常盤にかはらねど
　いつしか人に切とられ
にくと皮とを別々に
　そがれて籠に作られて
人の爲にと盡すなり
　傘や團扇の骨や柄や
共に細かく身をさかれ
　雨のしづくや夏の日の
人のあつさも救ふなり

　垣根となればいましめの
繩にかゝりて夜もすがら
　人の守りもつとむなり
杖となりては老の身の
　足の助となりぬべし
綾や錦につゝまるゝ
　笛となりてもかはらじな
胸やせなかをえぐられて
　清き音色を與ふなり
あはれかばかり高尚も
　節をこめたる汝れが身の
人に切られて人のため
　盡して露のうらみなく
仇を恩にてかへすなり
　思へば人は鬼か蛇か
無慈悲かりけり人の世の
　竹となりても悲しやな

〔をはり〕

教の庭

十二月一日兼題

正三位子爵 黒田清綱先生撰

（代撰菊池武則先生）

遠山雪

天

なみはかりうつみのこして海こしの
とほやましろくつもるゆきかな

東京市本郷區東片町四十二番地下田内 篠田圓子

地

遠やまに今朝ふりそめしはつゆきを
わかにはもせにうつしてしかな

肥後國菊池郡城北村 徳永廣子

人

みやこにはもみちもいまた殘れるを

北豊島郡瀧野川村下田端二百九十八番地 松本まつ子

とほやましろくゆきのふりたる

東京 林艶子

甲

はつみ雪つくはねしろくけさみえて
ふくかせさむしむさしのゝはら

福井 平田そう子

この朝けとほやまにふるはつゆきの
みやこに見るもほとなかるらむ

香川 大山豊子

立ならふまつの木の間に見ゆるかな
とうやまのはのけさのはつゆき

美濃 吉村せむ

きのふまて雲のあなたのとほやまも
ちかくも見えてつもるゆきかな

武蔵 大江春子

みやこにはもみちもいまた殘れるを
はつゆきしろしきたのとほやま

東京 河合象子

むらやまのかさなる末にあらはれて
ゆきにそひゆるこしのとほやま

乙

立なひくくもにはきえしとほやまを
　さやかに見せてつもるしらゆき　松山　上原のふ子

はるかなる黒かみやまも名のみにて
　いたゝきしろくゆきのつもれる　壬生　岩間ひさ子

足ひきのとほやまのはを見わたせは
　今朝はつゆきのはなそにほへる　肥後　佐々小琴子

ほの〱とあけ渡りゆくとほやまの
　かけたに見えすゆきのつもりて　東京　後藤きよ子

かつらきやたかまの山のやまかせに
　なひかぬくもやみゆきなるらむ　三河　永井さい子

冬かれし野すゑはるかになかむれは
　おちかたやまにつもるしらゆき　横須賀　上田雪子

鳥狩にとわけいるやまのかひありて
　をちのたかねのゆきを見るかな　東京　金原玉城子

はるはると見わたすをちの山のはに
　はつゆきしろくけさはふりたる　武蔵　佐々木八重子

大そらのみとりのはてにあらはれて
　ゆきいとしろしをちのむらやま　東京　山口琴子

冬ちかくなれるしるしをこのあさけ
　とほやまのはのゆきにしるかな　東京　篠田久子

見渡せははつゆきふれりくもはれて
　むら〱しろしあまのかくやま　東京　青木たま子

遠かたのたかねもちかく見ゆるかな
　けさめつらしくゆきのつもりて　沖縄　仁保しま子

花にとひつきになかめしをちかたの
　やまはみゆきにふゆこもりせり　東京　岩谷川梓子

つれにみぬ遠のたかねもあらはれて
　けさめつらしきゆきのあさとで　三河　河合ぬひ子

すみかまのけふりのひまにみたけ山
　ゆきしろたへにあらはれにけり　三河　服部萬子

あを空のいろにまかひしみれなれや
　たゝしろたへのゆきのとほやま　三河　鵜野久和子

近からはふみわけてこそ眺めなむ
　はなとみまかふゆきのとほやま　東京　石川薫子

丙

いつのまにふりつもりけむ遙かなる
　くろかみやまのけさのしらゆき　伊豫　梯京子

さえ〱しよへの名残かけさ見れは
　をちのたかねにつもるしらゆき　北海道　横澤あやめ子

わかにははまた紅葉せぬこのころを
　不二のたかねにゆきは降りつゝ　茨城　中里希武子

くもかゆき雲かくもかとみまかひし
　こゝろもはれてみゆるしらゆき　河内　小山英子

我かむらのとなりの村のやれこしに
　はるかにみゆるとほやまのゆき　河内　小山楢子

聳えたるみれも見わかすなりにけり
　ふりつもりたるとほやまのゆき　東京　藤澤文雪子

きのふまであをくなかめし筑波根も
　今朝めつらしくゆきを見るかな　壬生　みと子

音羽やまおとはあられとそてさむみ
　はるかにみゆるみれのしらゆき　長野　長しま子

見わたせはなかめそあかぬをち方の
　やまのたかねのゆきのあけほの　北見　中川伊代子

雲ゐなすをちに見ゆるやとしふりて　ゆきをいたゝくくろかみのやま　静岡　竹内みつ子

ゆふくれに比良の高根をみわたせは　ちりくるはなやみゆきなるらん　東京　安井京子

雲とみしとほやまみれを今朝みれは　ゆきふりつもりふゆは來にけり　東京　安井じゆん子

ふみわけしこしの山路のくもはれて　今朝めつらしくゆきそつもれる　東京　安井みし子

庭にのみまつのときはのいろみせて　とほやまのはにつもるしらゆき　東京　椎野秀子

かきくらしふゝきもいつか霽そめて　名殘りにのこるとほやまのゆき　東京　椎野薫子

はなさきし時にもおなししらゆきの　とほやまのはにけふそつもりて　東京　椎野ぬき子

とほめには雪ともしかとしらくもの　あらしにはれぬやまの端のいろ　東京　椎野鋭子

あからひくあさひかけさす遠やまの　ゆきのけしきのおもしろきかな　秋田　小島いわ子

いひしらぬなかめなるかな越やまの　あさ日にゝほふゆきのあけほの　讀人不知

おちへの山またとほくおほへつれ　雪のつもりてちかくもみゆかな　京都　坪内りき子

はるかなるあしから山もふるゆきに　今朝はちかくも見えわたるかな　上總　高石とよ子

おちかたの山さへしろくなりにけり　ふしのみゆきやいかにあるらむ　名古屋　木下鶴子

もみち葉はいつしかちりてふる雪の　なかめもさむきおちのやまさと　名古屋　木下かめ子

いけ水もこほりにとつるこのあさけ　をちのたかねはゆきましろなり　東京　積山鐵子

そら晴るゝ遠のたかれもたつくもの　八重のひまよりみゆるしらゆき　和泉　福原菫子

ふりしきる雪のしひきもうつもれて　ゆきおもしろきとほやまのかけ　東京　荒井滿武子

都に居てはまた霜夜さへしらさるに　はやゆきしろしとほのしまやま　東京　荒井せい子

雪ふりてかれ木にはなもさきぬれと　一ときは目たつとほやまのけい　東京　荒井幸子

はつ雪はよへふりにけむ比叡のやま　けさしろたへのころもまとへる　東京　林環子

たまあられふるよと見れはとほ山の　たかれにはやもゆきそつもれる　秋田　和田りつ子

しら雲のかゝるとみしはなゝへ八重　へたゝるやまにつもるしらゆき　肥後　徳永萬壽子

をち方のやまはみゆきにうつもれて　今朝あたらしきなかめなりけり　肥後　徳永識子

とめて見るこゝろあらすはとほ山の　ゆきふるときをしらてすきなむ　東京　山田靜子

遠かたのやまにましろくゆきふれは　かひもむさしもみわかさりけり　東京　山本廣子

朝ほらけ見わたすかきりしつかにて　ゆきましろなるをちのやまのは　肥後　岡山登壽子

木からしも今朝はあとなく晴ゆきて　あなたのやまにはつゆきそふる　肥後　徳永多瑠子

よそめにはたのしとめつるをち方の　ゆきふるやまをおもひこそやれ　伊豫　山崎匡子

ふと見れはかなたの山もゆきそふる　東京　荒井千代子

きのふにかはるけふのふせいは

ふりそめぬ里よりみれはとほやまの　けさのはつゆきめつらしきかな　伊豫　柳たけ子

夕はれにみつうみとほくなかむれは　くもかとまかふ比良のはつゆき　東京　平岩靜子

みわたせは遠やましろくつむゆきに　おもひこそやれこしのやまこえ　埼玉　前野壽賀子

あさほらけまたはれやらてふる雪の　ひかりにしらむあはちしまやま　埼玉　前野ふさ子

二見かた立ちいてゝみれは海こしの　ちたのたかねにゆきそふりける　東京　下田しげ子

ほのかなるとほき山ちを見あくれは　はなかとまかふみれのしらゆき　東京　疣井あさ子

うすすみのとほ山まゆのおもしろく　見ゆるやゆきのつもるなるらん　熊本　日高かず子

白たえのゆきのころもにつゝまれて　けたかく見ゆるあそのとほやま　熊本　田代豔子

夕されはたかねおろしのかせさむく　とほきやまちにゆきはふりつゝ　東京　疣井こと子

見わたせはあそのとほやま雪しろし　目にたつものはけふりのみにて　熊本　田代綾子

をちかたの山そのられに降りつもり　さむけさまさるけさのはつゆき　丹波　大槻ふさ子

見わたせはさら[illegible]やまのいたゝきに　ふりつもりたる今朝のしらゆき　長野　小泉みつじ子

吳なゐの木の間をもれて見ゆるなり　こしのたか峯にふれるしらゆき　信濃　秋菊子

このはちる庭にはあともなかりけり　とやまにのみやふれるしらゆき　筑後　鏡山増代子

しらくもとよそめにみしはよに遠き　とやまのみれにふれるゆきかな　筑後　武田龜子

とよ年のしるしをみせてしろたへに　ふしのたかねにつもるゆきかな　筑後　武田外代子

今朝見れはとほのまつやまゆきふりて　ひと夜のほとにおいにけるかな　出雲　岩倉頼子

竹むらはゆきにたゆみてしろたへに　かさなるをちのやまを見るかな　東京　河田いし子

なをきけは花とおもへとよしのやま　ゆきのけしきのほの見えにけり　東京　小杉うた子

とけされは遠きよしのゝしらゆきを　さくらのはなとこきませて見ん　東京　小杉はつれ子

しら雪はくもかあらぬとまかふまて　なかめはるけきをちかたのやま　横須賀　岩橋花子

吹く風のみそらにさゆるきのふけふ　ゆきになりゆくをちのやま／＼　伊豫　山崎政子

とほやまにふかくかゝりし黒くもゝ　けふはれ／＼てゆきをのこせり　三河　白井よし子

夜をこめてをちの深やまにふる雪は　そまのかよひちみち見えぬまて　下野　佐野まさ子

みやこにはまた初ゆきもふらなくに　いつれのやまかしらゆきのつむ　長崎　岩田春子

そまひとのわひぬる冬や來にけらし　はやとほやまにゆきそつもれる　薩摩　松原みれ子

みえつるは蝦夷かあらぬか降る雪に　ほの／＼みゆるみねましろにそ　三河　石原逸子

とほ山はまつのすかたにみゆるまて　ふりうつみたるけさのしらゆき　大和　栗山高子

冬ころもいもよとくたておちかたの　下野　佐藤季子

やまやましろくゆきつもるなり　下野　佐藤季子
ありあけの月おちかたのやまのはに
ゆきしろたへにふりつもるみゆ　神奈川　森田八十子
我こふるいものゆくかたなかむれは
なちのやま〳〵ゆきふかく見ゆ　三河　堀田伊勢子
遠やまのゆきのたよりやもてくらむ
きたかせさむきのきのまつかせ　羽後　三浦みれな子
海とほくしらなみたつと見へつるは
ゆきふりつもるおかのしまやま　肥後　佐々有鄰子
うちわたすなちの高やまみちかやま
ゆきのはなかさまはゆかりけり　吳　和住千鶴子
みわたせは遠のやまへはひとよにて
はるにしられぬはなそさきける　大和　栗山俊子
かり人のゆきにほころゝふゆのやま
あはれましらのなきさけふなり　長野　山本直枝子
遠やまのみれのはつゆき見わたせは
くもかとはかりうたかはれけり　長野　山本基子
おほ宮とへたてもあらす見えにけり
なちのやまれにふれるしらゆき　羽後　三浦さわ子
しくれせしくもははれてもしろ妙の
ゆきにかくるゝおつくはのみれ　羽後　佐藤かつ子
もみちはのこすゑをわけて白たへの
いたゝき見するゆきのとほやま　羽後　三浦みれな子
海とほくしらなみたつとみえつるは
ゆきふりつもるを鹿のしまやま　埼玉　横田秋子
松にふくたか根のあらしいつしかと
ゆきにしつまるやまもとのさと　東京　山田ふみ子
ひさかたのそらにかゝれるしら雲と
みゆるは富士につもるゆきかも

もみちはのにしきに迷ふおこたりな　羽後　三浦せつ子
おとろかしたるなつくはのゆき　攝津　森本みち子
里よりはいく重さむさやまさるらむ
はやふりつもるとほやまのゆき　攝津　鹽見文子
小夜しくれはれてみとりの大そらに
はるかにつゝくゆきのしらやま　兵庫　駒井登雄子
見わたせは雲かけむりかとほやまの
みれのあらしにふれるしらゆき　攝津　大岡幸子
つもりけり常盤のまつもいはか上も
ひとつなかめのゆきのとほやま　攝津　大岡花子
見渡せはひへのとほやまゆきふりて
みやこのそらやさむけかるらん　東京　松村あさ子
夜をこめしさむさに雪やふりぬらし
みなきてみませけさのけしきを　下野　若林十四子
をちこちのやまのしら雪つもるらし
ふるさとさむくなりまさりけり　壬生　大西秀子
いつのまに冬はきにけんしくれつゝ
つくはの山にふれるしらゆき　東京　牛山素子
みわたせはつらなる山のはてしなく
みなしろたへにふれるゆきかな　山口　村上操子
とほやまにふりつもれともしら雪は
あとなききくもにまかはさりけり　肥後　吉弘周子
遠かたのたかれましろにふりつみて
ゆきよりしらむあけほののそら　肥後　吉弘新子
小夜しくれいかにさえけん今朝みれは
ゆきにうもるゝをちのやまのは　肥後　仁保基子
朝ほらけをちのみやまのしらゆきは
よはのあらしのなこりなるらん　東京　敷島うた子
ゑたくみもいくたひ筆を措きつらん

とほきくも井のみねのしらゆき

あたらしくなり出てしかと思はるれ
けさみえわたるゆきのとほやま　神戸　それ子

小さゝたくしつかのきはに時雨して
遠ちのたかねにふれろしらゆき　近江　杉江琴子

あらしよりまつうつもれてとほ山に
ゆきふりつもろみねのまつはら　鳥取　大塚信子

をか野邊の松の葉こしのみねのゆき
ふれろあしたのめつらしきかな　埼玉　横田音羽子

すみかまのとほ山けむり目なれても
ゆきのあしたはめつらしきかな　埼玉　横田やな子

落葉

小夜時雨すきてのゝちのあしたこそ
木のはのあめはふりまさりけれ　宇都宮　石川さだ子

ちろもをしひらふもうれし秋はたゝ
よそになかめしみねのもみちは　同　崎尾たに子

山とりのをのへのもみちかつちりて
わかゝくれかもあらはれにけり　同　増淵さく子

からさきの松のしくれにさゝなみや
よろうらふれは木の葉なりけり　同　中島かづ子

夕しくれさそひかはして鳴くはとの
こゑほろ／＼とちろ木の葉かな　同　高松ひさ子

あさけたく里のかやふきしもみえて
葉あらふそてにちろ木の葉かな　同　古瀧よし子

くれはてし秋のゆくえをやまかけの
木の間にみせてちろもみちかな　同　鈴木きくの子

ちりしくもまた一入のもみちはに
にしきあやおろいげのさゝなみ　同　廣瀬いく子

ちりうきてふちせ行けともあすか川
もみちのいろはかはらさりけり　宇都宮　持田しげ子

むら時雨はろれはふりてまとの戸を
かはろ／＼もうつこのはかな　同　絹川つか子

をとこやまちりかひくもり淀ふねの
とまのあらみをふく木の葉かな　同　三澤こと子

筆とりてむかふすゝりのうみつらに
あさ日まはゆくちろ木の葉かな　同　福井なほ子

高瀬ふねさすやゆふ日のいろはえて
つなてもゆらに木の葉ちろなり　同　飯塚しん子

ぬさとして手向のやまのもみちはも
かせのまに／＼ちりはてにけり　備中　大橋緑子

小夜更けて窓うつおとに目覺むれは
しくれにましろおち葉なりけり　同　大橋廣江子

よもすからまとろみかねし枕邊に
ものおもはせてちろ木の葉かな　同　秋田よれ子

立田姫袖のにしきもかきりありて
おほゐのかはのにしきなりけれ　同　阿知さと子

高雄山ちろもみちこそうろはしき
ふくこからしにやれや初めけん　岡山　橋本義子

たつたかは清き瀬にこそもみちはの
あかきこゝろのいろは見えけれ　同　橋本ふみゑ子

小山田は落つろ葉おとにあきふけて
おろさほ姫のころもうつくし　同　吉田文江子

しぐれせしねやの板戸におとさせて
はれたろ月にふろ木の葉かな　東京　森はな子

華族女學校教授 井上頼圀先生撰

冬の家庭

人

愛媛縣松山市 南　青子

げにや美衣を飾らず美食にあかずとも、あたゝかなる家庭團欒のうちに明かし暮すこそ、此上なうたのしけれ、日頃慈愛ふかきたらちねの君に仕へ奉りつつ、裁ち縫ひ家政のわざなど、我責任として萬づみ敎へを乞ひつゝ務むるが例なりき、まいて木枯吹きすさぶ此頃の寒さをも絶え忍びて、學び屋に通ふ弟妹などを見ては、いかで〳〵我もはげまずてやは、今宵しも埋火のもとによりて、最愛の女鑑くりかへし〳〵よみもてゆけば、いよゝふかく身にしみわたりてなん、はては弟妹の罪なきものがたりに、打興ずるたのしさに時のうつるをも、冬のさむささへも知らで、あたりは春のやうなる心地するも、思へばたらちねのふかきみ惠なりけりな。

優等

肥後 佐々有鄰子

此程いそがはしければ、備忘のため日誌記しぬ。十二月一日火曜日朝はやく起床、今日は河水をわたるべき舊習あればとて、近隣の老若は皆群がりて、午前五時ごろより、河瀬におり立て、東方にむかひ朝日子を拜むぞ風俗なる。是れを河渡の朔日といひて、明年の病氣豫防の神ごとなりとぞいへる。家族どもは集ひて神酒をくみかはし、宴席をひらきぬ。わが山さとは、わせもおくても、かりをさめつれば、ごと家に庭あげの餅をつきぬ。第三の火曜日なり、今日は上納すべき日なれば、村長役場に、金圓を使者を以て納めぬ。父君は獵犬ひきて、銃をかたにし出ゆきたまふ。歸館を待ちうけて、御得ものを料理す。日暮なれば、御湯殿に入り、ゆあみを終たまへば、夕飯を供へて、御酒を參らせ、御得ものの兎は、あつものにして奉る。母人は昨日の山路に得たまひし、松茸、しめじなどを、鹽やきにして供へたまへば、いと嬉びたまひ、狩倉の御つかれもわすれたまひしなるべし。興に入りたまひぬれば、妾に小箏とり出てかなでよと仰せられ、横笛をば吹きならしたまふ。末弟が、扇を笏にとりなして、うたひ出たる今様歌。

弓はづのみつぎをさめをへ、たか田くぼ田のわせおくて、にはもせにこそつみあぐれ、あらゆたかなる御代なれや。

肥後 德永廣子

庭の紅葉も散はてゝ、咲のこりたる菊花さへ、今は名殘なくみえて、冬のけはひ、おのづからふかく、指折にもたらぬ。日數となりて、此所も彼所も、餅つく音きくも見るも、いとせはしき。山里のはにふのやどに住身にしあれば、諸人の心をくだく、今日しも、無氣に思ひ過すも、ひたすら父母の惠ならずやと、かたりあひて、かなたの森の中より、ゆつる葉、もろむきなどあまた手折てかへりけるを、母君のよばせ給ふ。仰せはいそぎがたらはらに侍りけるに、妾の衣と弟の袴とを縫て、新しき年の始に着せてよと出し給ひければ、二人共によろこびあへりしが、わきて弟のあとげなきよろこびに父母の君もいとたの

しげに見そなはせけるを、心なきわが身にも、あたゝかき思ひせられて、いかに富ある家庭にも、まづしき家庭にも、赤心よりいづる家の楽しみにまさるは、あるまじく思ひつゞけて、一入しのばれて、我等はらから、いかなる事をも、愛々しく、むつみたのしみ、御二方様の御心を、やすんぜずばあるべからず。

東京　篠田圓子

和氣あいくたる家庭にありてこそ冬はわきて樂しかりけれ。やむことなきあたりは暫しおかむ。先づ中以下なれば妻が温めし夕飯の手酒に主人は晝の勞も寒さもうち忘れつゝ睦まじげに語り交すもありなむ。親子姉妹打ち集ひて埋火取かこみ、降る雪を花とも見つゝ、早咲きの梅に春を偲びつゝ連歌などするみやびかなる家庭もあるべし。又鄙にては賤の男ら雪にこもりて手造りの新酒汲み交しつゝ豊年祝ふさまなど都とは又大に品かはり質朴なるが中にえもいはれぬ愛情籠りていかになつかしからまし。

さるからによしや數百萬の財寳ありとも金殿玉樓に身をおくとも家の人互に心冷かなりせば、わらやの隙もる雪風よりも身をきるばかり心苦しく覺ゆる所やあらむ。錦の褥を重ぬるとも針の莚に座するが如き思ひやあらむ。あはれ高き卑しきけじめなく家の内常に春風の渡るが如く暖き愛情のこもりてこそ霜夜の寒さも物ならず結ぶ氷のうちとけて萬樂しき事のみ多からめ。

長野　松澤まつ子

大和島根の正しき道をふみ分けて、公の爲にいそしまるゝ主人の君が歸らせ給ふや。情あふるゝ主婦の君が御心づくしのあつものもて一家樂しく夕げしたゝめぬれば、やがて、かこむ火桶に櫻炭のにほひゆかしき御物語りも、御庭のゆきもいとゞつもればせうじ押あけ見出だすに、築山の松にかゝれる月影諸共もに今日一日千ゝにみだせしむれの内もまどかになりつ、靜に新たなる謀をめぐらし給ふらめ。

はた又田たがやす家々にては米もつまれたきゞもみちぬれば、心安げに、爐邊かこみて、女子達が針運ぶ傍に、男子等は古今の書をよみもし語りもし細き子等に玉ほこの直なる道を教へみちびく頼母しさよ。かゝる家庭よりこそ、古人の、「深山木のその梢とも見へざりし櫻は花にあらはれにけり」とよまれけん如き子女の出づるらめと思ひやるだにめでたきや。

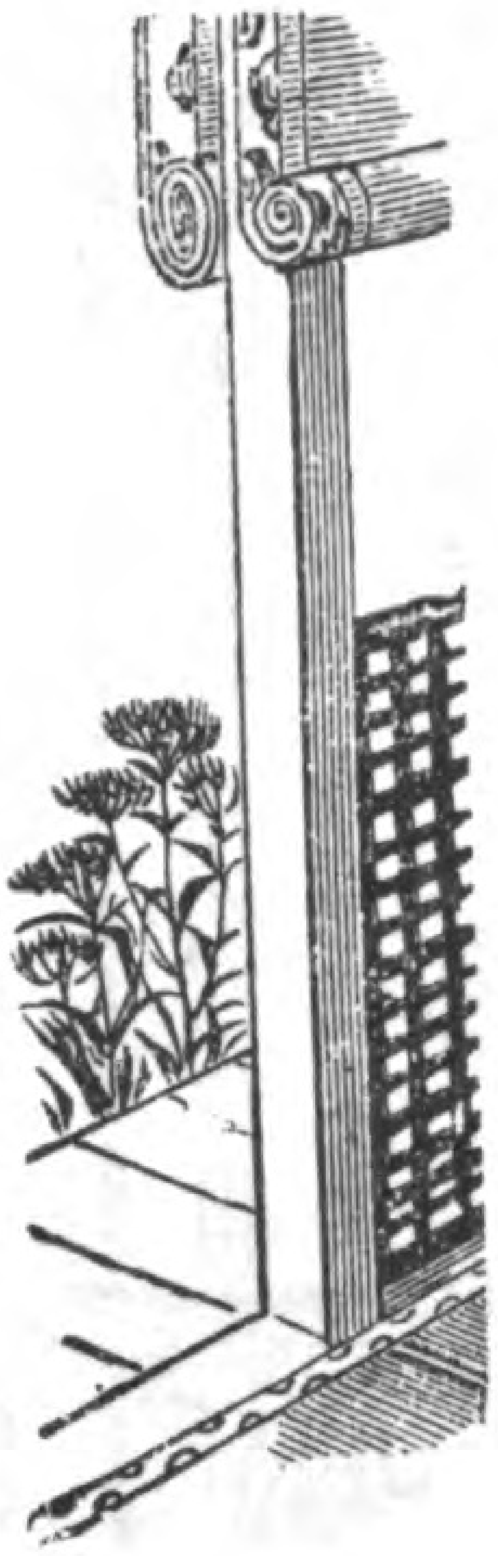
吳市　和住千鶴子

木の葉ちり、時雨うちして物さみしき冬は來にけり。芝生は霜の花さきて、人目も草も枯れ果てぬ。降りくる雪を花と見て、はにふの小屋の冬ごもり、さえかへる雪の朝に子らが朝ゐの臥戸にゆき、やよ起きよ六つの花さきつと云ふに皆おき出で喜ぶ。老の坂こえし母上も子等が喜の聲きゝてそゞろゆかしくやありけん、火桶抱きつゝ障子開かせ見給ふ。さらぬ野山まで、銀の飾をつけ下ゆく小川はしろかれしめきつたらんやうにて、常には見る影もなき梢ともの枝もたわゝに咲きおゝりたる、とりぐ景色美はしさにあかず眺むる折しも、さつと吹きくる花吹雪、あなやとばかり火桶により添ふなんいとなかし。子らは火桶に居たまらず、そともに出でんと言ふを止めて、硝子窓にて見よと云ふに、嬉しげなるさまにて「雪の進軍氷をふんで」と片言ながら唱ふなり。いざ暖かきあつもの調へて、樂しきひろげ備さん。そともは降りしく白雪に、北山おろし吹きそへて、寒さ身にしみ渡れども、内には、暖かき家庭の平和に冬の寒さも忘れぬべし。

東京　石川薫子

高殿の琴の音すでに絶えて梢を拂ふ嵐の音の身にしみ、落葉は雨のごと板戸を敲き、庭の山茶花も氷りやすらん冬の日の折から、はるばる訪ひ來し友を奧に延きて、火桶を中に小さきまどひを開きて、さまぐとありし事ども語り興ずるになむ、淋しき冬の夜も中々に云ひ知らぬ温かき心地ぞすなる。雪の日なんどは又、云ひしらずおかしき事よ、見渡すかぎり地は銀砂をしき、枯木に時ならぬ花の咲けるを其まゝに題にしつ、おのがじし思ひのまゝを詠じたるこそなかしけれ。

母君は其の幼なくませし折の事、あるは山内一豊夫人の貞操の事、春日局、松下禪尼の事ども、さまぐ＼と物語り給ひ妾等若木の枝に美しき花を宿らせ給はんとの御心のいとぐ＼かしこく埋火の早や消えなんとするも心づかでゝ涙催しぬ。小さき弟のけふ學びのやにて師の君の演說なし給ひしとてわれもせんと高き机椅子なんど取り出しつ、師の君の宣ひませし其まゝを片言まじりに二つ三つ耳に止めし事語るなどいとぐ＼興ありてをかし。かくて消えなんとする埋火かき起しぐ＼風さむく淋しき世をも得知らぬ顏にさながらあたゝかき春の日に百花の園に遊ぶがごとく風も又此坐にのみは吹き渡るめる心地せられぬ。



出雲　吉田ちぎ子

冬の山里ほど、閑なるものはなきかな、あしたには、かぞいろは、打寄つゝ茶くみ、夕べには、燈火のもとに、思ひぐ＼の書をひもとくこそいとたのし、されど土地のをやかたとか云はるゝ人の來りて、茶のみつゝ話しす、其の手のさながら、つくね芋、見たらん如く、骨々しく、おそろしげなれば、たえかれて立出る。今迄、雪降りつれば、賤がふせ屋も、いさぎよく見ゆ、遠の山には又一入の眺め哉、花はさかり、月は限なきを、見るものかはと、いひしも、おもひやらるとばかり、曇り來りて、おそろしく、吹き降りきぬれば、雪も、花ものかはと、障子の内に入り、和歌俳句を詠み出でつゝ、きようじ合ふ、外のふゝき何處吹くらむ。

明治三十七年女鑑月並兼題豫告

歌

一月　松　待春

二月　富士山　餘寒月

三月　旅行　春雨

四月　海上雲　遠山花

五月　猿　夏朝

六月　親友　郭公

文

一月　歌留多會の記　おもしろきもの一ッ二ッ

二月　雪中梅園に遊ぶ　春日の局の傳記を讀みて

三月　春季運動會の記　月夜櫻花を賞して

四月　故鄕の友に試驗成蹟を報ず　春を惜む詞

五月　硯　吾が常に愛讀する書籍に就て

六月　藤花を贈る　梅雨中日記の一節



○諸學校の開放

東京市にては過般市内各小學校の運動場を修業後に開放し兒童體育奬勵の一助と爲す事に決し各學校に訓令せしが實行上に障害多しとて未だ全部の實行を見ざるが文部省にても其必要を認め今回各地にある中學校、師範學校、高等女學校及び小學校の校舍幷びに運動場を授業後及び休日に於て公衆の體育又は集會に利便を與ふることゝし去月十日普通學務局長より左の通牒を各地方長官に發したり

小學校の校舍校地等の使用に關しては小學校令第三十條の規定有之候處公衆體育の爲め體操場を公開し又は公の集會に校舍を使用する等の場合に於て敎育上障害を來すの虞れなきときは相當取締の下に便宜認可を與ふるの方針を執られ可然又小學校以外の學校に就きては敎育上障害なき限りは便宜公衆の利用に供せられ然可候依命此段御通牒候也

○第三高等女學校秋季運動會　麻布區北日ヶ窪なる同校は去ぬる十四日構内運動場に於て秋季大運動會を催したり第一年級より第四年級までの十五六歳を頭の小女五百餘名が更々袖を飜して輕快なる運動をなし少しも白粉氣なくして如何にも厭味なかりしは甚だ愫しかりけり當日市會議員新聞雜誌記者及び生徒の父兄は滿場に塡塞して殆ど立錐の地なかりき其の運動せし番組は左の如し

第一回運動會順序

開　會　午前八時三十分

唱　歌（運動會祝歌）　一同合唱

一、十字循環行進　一回　第一學年

二、バスケットボール	二回	第二學年甲級
三、菊水	一回	第三學年
四、コチロン	一回	第四學年
五、龍田ノ錦	一回	第二學年乙級
六、アンヴヰルコーラス	一回	第三學年級
七、タンツライゲン	一回	第四學年
八、お手玉競走	二回	第一學年有志者
九、カレドニアン	一回	第二學年
十、提灯競走	二回	第三學年有志者
十一、複式ロッチェスター	一回	第一、二學年
十二、徒歩競走	二回	各學年有志者
十三、盲目障碍物競走	二回	第二學年有志者
十四、スプンレース	一回	第四學年乙級
十五、五色旗送リ	一回	第二學年丙級
正午休憩		
唱歌（朋友）		一同合唱
十六、クロッスポルカ	一回	生徒全體
十七、美容術	一回	第一、二學年
十八、ヒンターボール	一回	第四學年甲級
十九、復式方形運動	一回	第三學年
二十、抽籤競走	三回	第一學年有志者
二十一、綱引	二回	第三、四學年
二十二、障碍物競走	三回	第二學年有志者
二十三、ダブルランサース	一回	第三、四學年
二十四、お手玉競走	一回	職員
二十五、クヮドリール	一回	生徒全體、職員
唱歌（君が代）		來賓及有志者一同合唱
閉會		
番外、ローンテニス		正午休憩中

○四恩瓜生會園遊會　同園遊會は去る十五日團子坂須藤邸内に於て開かれ養育院男女兒童の唱歌南條文學博士棚橋絢子女史の演説あり了つて一蝶齋の手品餘興を催ふし來賓に壽司及び菓子を配り且つ邸内各所に珈琲店おでんや等を設け求めに應じて販賣する等なか〳〵盛なりき因に云ふ同會にては養育院兒童の遊戯並に運動に充つべき土地家屋を求めん爲め廣く慈善家の寄附を募集すといふ

○三井呉服店女子店員服裝審査會　同店にては過般來募集中なりし女子店員服裝の批評を請はん爲め本月十一日新聞雜誌記者美術家畫家圖案家等を招待して六種の豫撰品に對して公評を求めたるが福地源一郎氏其の他の反對意見ありて「三井呉服店は洋服を賣る店ではない和服專門の販賣店に洋服を着たる

婦人を置く必要は決してない和服で不便ならば襷がけで働け自家の婦などは襷をかけて働いて居る」と大氣焔で以て反對を稱へしが朝吹英二横槍を入れて兎角店員は働を主とする故和服を着くると働けぬ斗りか黒い手足が出て見つともない大槻如電老人が「女は優美を主とするもの故拙者は和裝させたい、さうすれば客も店員を手本として物を買ふ樣になるから營業上よりも德になる」との說もありて結局更に本月中に新案を提出せんことを乞ふとの高橋主任の挨拶ありて此處に局を結び更に三井銀行三層樓上にて晝餐の饗應あり又餘興として天賞堂蓄音器の催ありて散會したり

○孝行團子　　王祥の鯉羹も孟宗の筍飯も此團子の旨味には如かざるべし殊に孝貞節義地を拂ふたる今の世には空谷の跫音よりも尚ほ床しき心地ぞする深川東元町一番地若林きん方同居魚商高橋吉五郎の長女おとよ(十五)と云へる少女は夙に母親に死別れ父は其後々妻を娶りて二人の兒を儲けしが後妻と祖父儀助(六十三)との間折合はずして家內に風波絶えざる中今より五年前儀助は眼病に罹りて失明し左なきだに困難なる家計の如何ともする事能はざるに至りぬ儀助は盲目ながらも此有樣を見兼ねて先頃より杖に縋りておとよに扶けられ團子を仕入れて賣り歩くに行く先々にて孝行團子と評判され昨今は毎日五十錢乃至七十錢位の賣高あり之が爲めに家計を補ふ事少なからず斯くておとよは草臥足を引きて歸宅したる後も祖父の世話を身一つに引受けて何くれとなく甲斐甲斐しく介抱し居るより此事自然其筋の耳に入り深川署より孝女旌表の議を申請中なりとかや

○道後の貞婦(家庭の美譚)　　世は澆季に及びしものから日月未だ地に落ちずかゝる貞婦を生ずるこそ返す〴〵も嬉しけれ道後湯ノ町故蜂須賀岩藏が寡婦タキ(四十七年)といふは界隈に隱れもあらぬ女なるが同人が岩藏方へ嫁したるは彼が十八才の頃なりき當時夫岩藏も血氣の年配なりしかば互に相和し相親しみ心を一にして家業に力むる程に富むとにはあらざれど

も稍や立つる煙も豊かになりこの上尚ほも力の限り勵むならば終には家をも起すに至るならんと近隣の人々は何れも其の睦ましきを羨やむばかりなりき兎角する程に夫婦中には二人の男子を儲けたるが一家は愈よ和合して樂しき年月を送り迎ふ内に夫岩藏は五六年前圖らずも肺病に罹り終にはグッスリ就床するに至りしにぞタキの悲しさ遣る方なく一時は途法に迷ひたりしもさすが健氣の女とて忽ち心を取直し今は却々泣き居る處でなしこの身遁れを取ることもあらば一家は悲慘の境に沈むべしと夫よりは二人の男子の養育方に就き心を碎き且つ病夫に對しては在らん限りの誠を盡し晝は終日一家四人の口に糊すべく脇眼も觸らで立ち働き夜は終夜夫の枕邊に侍して看病に怠りなく或時は夜陰神佛に詣でゝ夫の平癒を祈り或時は長途を踏みて好む食を與ふるなど慈母の赤子に於けるが如く數年の久しき恰も一日の如くに事へしも定まれる運命にや岩藏は去年五月の頃五十一才を一期として終に返へらぬ數の人となりしかばタキは二人の男子を抱きて深き悲しみに陷りしを漸く人々の慰めに依りて懇に野邊の送りを營み忌日忌日の弔ひも怠りなかりしがさて何つまでも泣きてのみあるべきにあらざれば再び心を取り直し爾來は子供を力草に家業を勵み居たるにぞ元來タキはかゝる境遇の婦人に似ず教育の一日も忽にすべからざるを知ればにや二人の男子を監督して學齡期には何れも學校に入門せしめしが今は長男は十七才となりて松山中學校の三年生に上り次男は十三才にて湯渡高等小學校の二學年に在り次第に學資も多額を要するに至りしかば打ち續く不幸に依りて家計次第に衰へし今日にては到底女の手一つに貢ぎ得べきにあらざれどもタキは晝間は當市二番町に在住する米國宣教師シドニー、ギユリキ氏の家に雇はれて水仕奉公をなし夜間は我家に在りて賃仕事に曉かけ斯くして漸く得たる賃錢に依り辛くも兩人の子供を通學させ居れりと奇特なる婦人と云ふべし

○薄幸なりし貞婦　千葉縣香取郡津宮村久保木タ

カといふ本年四十二三歲の寡婦なり今を去る二十五年前同郡豐浦村富田區の木村太兵衞に嫁し暫くは琴瑟相和したれども年經るに從ひ太兵衞酒色に溺れ行き遂に酌婦上りのツメといふを妾とし附近の土橋といへる處に飲食店を開かしめ多くは此處に來りて日を暮し夜を明したりされどタカは曾て此を恨まず何事も我が不行屆なるより起りしものと諦めるのみかツメと交を結び妹の如く此を勞はり自分は鋤鍬執りて田圃に耕し妾宅の補助を受けずと決心し却て餘りあれば金品を送りて只管太兵衞の心配なきやう勉めたり斯くて太兵衞もツメもタカの凉しき志を喜び暮しけるが太兵衞は今を去る十年前不圖せし病崇じ身歿りけるにタカは少しの遺恨なく實の涕を濺ぎて此を葬り亡靈に事へ其より半年ならずしてツメ又其の後を追ひて逝きしが此時もタカは夫の遺身として懇に葬り村民をして歎賞せしめたり其よりタカは寡婦暮となり色香倘衰へぬに彼に斯と言ひ寄る無分別者もありしかど常に淸き袖を打拂ひ〱して些ばかりの醜聞を流さず今日に至るまで堅固に身を持ち通し一人子の成長するを樂に耕作の外餘念無ければ此頃豐浦其他の小學校にて敎訓の種となり居るとぞ

○廣島の孝女　廣島縣佐伯郡小方村木挽職田丸源助の長女いち(十五)は家貧しきが上に母のすゐは數年前より眼病に罹りて盲目となり父の手一つにては一子の糊口にも窮するを見兼ねて十二歲の弟と四歲の妹を引連れ遠き周防の由宇邊まで辻占を賣步きて病める母の藥を買調ふるなど孝道怠るなきには近村の人みな感じ合へりとぞ

○保險會社と女子の職業　女子職業の種類は近來に至り著しく增加するに至りたるが今帝國生命保險會社内に於ける女子執務の成績を聞くに最初は單に試驗として二三名の女子を使用せしに其結果良好なりしかば今日にては約三十名の多數に達し猶は漸次增員せんとの計畫なるよし女子の年齡は大抵十六七歲より二十歲前後を多數とし其利益の要點は第一女

子の多數は獨立の生活をなすもの少なければ其給料低廉にして一日二十七八錢より三十五錢に過ぎざること第二女子は男子に比し法外の希望なきを以て其職務に對して忠實なること第三清潔を好み萬事に細心周密なること等なりといふ

○二千五百人前の辨當は女生徒が機轉の働らき（赤堀峯吉話の）・御飯炊は割烹第一の仕事だから、奥樣自身にやらねばならぬとは、私が始終口やかましく申す所ですが、去廿四日日本女子大學で運動會を催した時のことでした、參觀者は生徒を合せて三千四五百人と云ふ前觸れ之へ供す和洋料理は同樣の七寮舍、（一舍に三十人づゝ）が調理る事になつたので生徒等は初めから三千人前の準備をしたいと請求したが、天氣の都合も分らぬから先づ二千人前だけにして置くが可からうと決したそれにしても日本料理の方だけで御飯を一石炊かねばならぬので、中には之だけは平生手なれた下婢等（各寮舍に雇ひある下婢の事）に炊かせたが可からうと云ふ者もあつたが、熱心な生徒は下婢には强いのを好く者もあれば柔いのを得意がる者もあつて、自然御客へ供す御飯が區々に爲つては甚だ心苦しい、寧その事妾等の手で炊く事にしませうと言ひ出し、到頭一石の米を七寮舍へ平等に分けて少さな釜で炊き始めたから二十三日の夜の十一時からかゝつて翌朝の七時頃までに漸う出來上つたと云ふことです、處が斯ういふ事には他も氣が付かず好し氣が付いた處で局外からは他愛のない事の樣に思はれませうが、此熱心は割烹界に取つて眞に貴い事で、何處の奥樣も何卒斯ういふ意氣込みで庖厨の事をやつて戴きたい

それから愈々當日になると、午前の内に三千人からの御客が繰込んだから之では迚も食事の支度が足りない、と言つた所でそれから材料を買ひに遣つては間に合はない、乃で生徒の内で氣の利いた人等が、サンドキッチを製へて餘つた牛肉のあつたを幸ひ各舍に貯へてあつた胡蘿蔔、葱、甘薯の三品を取り寄せそれを急いで調理して、御飯に交せてライスカレ

ーを五百人前ばかり製へて間に合せた抔は時に取つて好い働きでした

一體教師が教へる時にはライスカレーの材料も之では承知しないのですが、斯ういふ塲合には敎はつた通りの杓子定規に據らうとして事を缺くよりも臨機應變何でも構はず有合せの品で間に合せる方が、割烹の本意に適つたと申すもの（中には食事の廻らぬ爲め指を咬へて御ざつたお人の有つたらうが）勿論初進妙齢の女子がやつたことだから、風味の上に缺點は多々あつたでせうが、其熱心と氣轉とは毛頭申分のない事と深く感心しました

○令孃市長　世には珍らしき話もあるものかな亞米利加は墨哥西リーナーレスてふ一都市にて此頃十八歳の令孃を市長に選び州知事も亦快く其就職を承認したる珍話あり、今其因縁を尋ぬるに同市にては本年の夏より黄熱病流行し始め僅かの間に六七千人の死亡者を出し中には病勢の猖獗に避易し他國へ移住せし市民も多かりしかば一萬五千の人口は忽ち三千餘に減退して市中の衰頽見るに忍びぬ惨狀となりたるが此時同市長の愛娘にマニユエルといへる當年十八歳の美人あり警吏も斃れ醫師も斃れ誰一人患者を看護るものなき病院へ詰め切りて誠意と愛情とを武器となし朝夕病魔の防禦につとめつゝありしが後には父市長も病に襲はれ市吏員輩も或は逃げ或は病み市政を執るものなきに至りしかば孃は看護の傍ら市長に代りて其任に當り夢寐の間も休息する事なかりしが孃の誠心天なる父にや通じけんさしもの病魔も此頃に至りて漸く退散したれば市民の感激いふばかりなく孃が今夏以來の勞苦に報んとて同市長の榮職に推選せしなりといふ



新刊書目

女子之友	一四五、六	東京神田區鎌倉町	東洋社
感化院月報	二六	府下豊多摩郡澁谷村	東京感化院
通商月報	九二	大阪市北區堂島濱通	大阪商品陳列所
婦女新聞	每號	東京牛込區東五軒町	同新聞社
日本婦人	四八	府下豊多摩郡澁谷村	帝國婦人協會
體育	一一九	東京麹町區飯田町	大日本體育會
音樂の友	四卷五、六	府下北豊島郡巣鴨村	樂友社
東京經濟雜誌	一二〇七、八、九、	東京京橋區彌左衛門町	同雜誌社
中央公論	一八年一一	同本郷區西片町	反省社
愛國、婦人	四一	同麹町區下二番町	大日本女學會
工談雜誌	一六三	同京橋區新榮町	工談會
成功	三卷二	同本郷區千駄木町	同雜誌社
國學院雜誌	九卷十一	同麹町區飯田町	國學院
佛教文藝	二卷一	同淺草區新谷町	佛教社
裏錦	一三二、三	同神田區駿河臺北甲賀町	尚絅社

婦人と子供	三卷一〇、一一	女子高等師範學校內	フレーベル會
女子新聞	每號	東京麹町區有樂町	同新聞社
新聲	十編五	同神田區錦町	同社
をんな	三卷一一、二	同麹町區下二番町	大日本女學會
圖書月報	二卷二	同日本橋區本材木町	書籍商組合事務所
六合雜誌	二七四、五	同芝區三田四國町	日本ユニテリアン弘道會
商家の友	一九、二〇	同京橋區南鍋町	時事新報社
慶應義塾學報	七〇、一	同芝區三田四國町	同發行所
大八洲雜誌	二〇七、八	同神田區三崎町	大八洲館
近畿評論	五卷一八	京都市上京區	同發行所
時好	四	東京日本橋區駿河町	三井呉服店
八面美	壹	同本所區南二葉町	同發行所
歌道會報	二	同牛込區辨天町	同會
平民新聞	二	同麹町區有樂町	同發行所
愛國	九二	岐阜縣岐阜市	愛國社
廣告燈	一、二	同神田區通新石町	二六新報社
正教要義	三七	同駿河臺	同發行所

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縱六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴蜜調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

白浪庵宮崎滔天著

三十三年之夢

全一册 菊版洋裝美本
定價金三十三錢
郵稅金八錢

滔天とは何人ぞ彼は哲學者にして豪傑の資を兼備せる一種異様の人物也少壯家を辭し交游十餘年或は支那に遊び或は暹羅に航し或は南洋に渡り其胸中抱懷する哲學的理想を以て直に地上に施かんと欲し運籌畫策する所一に二にして足らざる也唯憾む天時人事共に未だ可ならず非爲の獨立に參翼して一蹶し風雲を南清に捲いて再蹶し半夜燈前無端失笑して曰半生夢覺めて落花を懷ふと乃ち筆を呵して三十三年の經歷を叙す本書は實に彼が半生の懺悔錄也彼今身を浪花節の群に投じ張扇を弄して東海道に在り抑も何の觀ずる所ありて然る乎嗚呼其人既に奇也其文豈奇ならざらんや乃ち情あり哲理あり諷刺あり經綸あり迂餘曲折多角多趣讀去り讀來て活躍せる一篇の長恨詩を誦するに似たり然り而して半面より是を見る眞に是東亞の秘密を藏するの寶庫也

寺内淳二郎譯 **奢侈亡國論** 菊平切洋裝 定價郵稅廿二錢

白浪庵滔天著 **狂人譚** 四六版洋裝 定價二十錢 郵稅四錢

弘田正郎編 **豪吟集** 菊平切洋裝 定價八錢 郵稅二錢

清藤幸七郎著 **天佑俠** 菊版洋裝 定價三十錢 郵稅四錢

發賣元 東京々橋區築地 國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

醫學博士森鷗外著

新刊 **長宗我部信親**

菊判半切 定價金十錢 郵税二錢

本書は著者森博士が、土佐出身の某子爵の需に應じて作られたる琵琶歌なりといふ。吟誦一番すれば戰國武士の面影の髣髴として躍るが如きを見るべし嗚呼中津留川原の血戰に骨を曝らしめたる此の若武者の芳名は、靈山の項と共に高く、戸次川の流れと共に長し。

水主天姥著

千古靈魂 **石田三成** 及其時代之形勢

四六判洋裝 定價三十錢 郵税四錢

勝てば即ち官軍。負くれば即ち賊のみ。理非往々にして轉倒し、曲直或は顚逆す。天道漠々、世事茫々慨嘆せざるべけんや。三成六條河畔の露と消えしより三百有餘年に及ぶも其寃枉は依然として、伸雪する能はざるなり。著者乃ち、明快痛切の筆を操て當年の形勢を描出し、東西の兩雄たる家康と三成とを較論比評するや、恰も秋官の刑を斷するが如く。毫も假借宥恕を須ゐず、一褒一貶、一點一畫の間文舞ひ、句踊て千古の功罪を眼前に見るの思ひあり、汽車關ケ原を過ぎて、鬱葱たる松尾南宮の諸山を望みし者此書を繙いて當年の事蹟を思はゞ、睚裂け、腹斷たざれば已まざるべし蓋し近來の快著なり

在法科大學矢田七太郎著

幕末之偉人 **江川坦庵** 全一册

四六判洋裝定價卅錢郵税四錢

清藤正輔編

西郷從道 全一册

菊判洋裝定價廿五錢郵税四錢

清藤正輔著

聖德太子傳 全一册

四六判洋裝定價十錢郵税二錢

發行所

東京市京橋區築地

株式會社 國光社

明治三十六年[illegible]
明治三十六年十二月一日發行　第拾參年第廿參號　第三種郵便物認可

東京築地國光社印刷